
残念な I S

通りすがり 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残念なIS

【Nコード】

N9320T

【作者名】

通りすがり1

【あらすじ】

桜、花火、星、夏祭り、約束。貴方との思い出は、何よりも大切な私の宝物です。——例え、貴方が覚えていなくとも……それでも、私は……。と、シリアス一直線の予定だったのですが、なぜかギャグになりました。原作キャラのことごとくが残念化しています。旧題『あの日出逢った少女の名を、俺はまだ知らない』

失われたプロローグ、あるいは幕の下りたエピローグ

少女が笑う。

何が楽しいのか、俺の名前を呼んでは笑っている。

ほんの一時。

まだあれは、筈とも知り合っていないほどの昔のことだ。

俺は綺麗な桜が咲く島にいた。

長い人生から見れば、本当に僅かな、一ヶ月という期間だった。

けれど当時幼かった俺には、とても長い時間だった。

そして、そこで俺は彼女に出逢った。

彼女はとても可愛くて、なんとなく名前で呼ぶのが気恥ずかしかった。

だから綺麗な白を持っていた彼女を、俺は『シロ』と呼んだ。

ペットみたいだと彼女は嫌がったが、頑なにシロはシロだと言っ
て通した。

結局最後まで名前を聞かなかったことは今でも悔やんでいる。

俺が島を去る日。

彼女が俺にプレゼントをくれた。

蒼い翼を模したアクセサリー、ペンダントのように身につけられるものだ。

彼女の手には、銀色の太陽を模したアクセサリーが握られていた。

これは一つのおまじない。

いつかまたどこかで逢えるように。

彼女はそう言った。

世界が綻ぶ。

そろそろ終わりは近い。

彼女が悲しげに表情を歪める。

俺との別れを、悲しんでくれている。

そんな顔を見たくなくて、俺は彼女の頭を撫でた。

彼女は一瞬驚いたように目を見開くと、嬉しそうに笑った。

もう本当に終わりが近い。

すぐ目の前にいるのに、彼女の姿も朧気にしか見えない。

最後に、彼女と約束をした。

とてもとても、大事な約束。

彼女が微笑むと同時に、この世界は終わりを迎えた。

これは夢。

夢から覚めた時、全て朧気な残滓に成り果てる。

そんな儚い夢。

俺は昔誰かと約束をした時の夢を見た、くらいにしか思わない。

それでも良かった。

何か、大切なものを思い出したような気がしていたから。

桜舞い散るあの日、遠い過去からはじまって、いつか俺の命が尽きる日、もっと遠い未来の果てまで続いていく、俺の全てを変えた約束。

その夢のような約束が現実になる。

そんな予感を告げる、夢のような夢の始まり。

そう、信じ込んでいた。

——今思えば、この夢は警告だったのだろう。

この世界は優しくないから、ただでさえ脆い夢のような時間は、簡単に壊れてしまう。

だから、早く思い出せ、早く思い出せと俺を急かしていた。

思い出した気がした、なんて。

本当は何一つ、思い出してなんかいないのに。

それに気づかなかったこの時の俺を、俺はきつと一生許せない。

全てを忘れて。

何も思い出すことなく、ただただ馬鹿みたいに笑っていた俺を笑顔で見守っていた掛け替えのない少女。

もう、彼女の笑顔は——二度と見られない。

失われたプロローグ、あるいは幕の下りたエピローグ（後書き）

初めまして、通りすがり1といっています。

今年受験真つ盛りだというのに勢いとノリで投稿しました。

「誕生日に投稿してみるかな」とか考えての投稿です。つまり作者アホです。

初投稿であるため、誤字脱字や投稿延期を始めたミスを多くするかと思いますが、その時はご指摘お願いします。

意見、感想なども根拠（あるいは心）のない誹謗中傷以外であれば出来る限りの改善を努力しますので気軽にお願いします。

なお、更新は本日プロローグと一話を投稿し、土曜日まで一話ずつ投稿。それからはできれば週一、最低でも月一のペースで投稿するつもりです。

楽しんでいただければ本望です。

一話 「この状況はもう新手のイジメじゃないか？」 一夏

居心地が悪い。

そりゃもう、たいへんに。これはあれだ、アウエーだ。場違いだ。例えるなら某巨人野球チームのファンが、間違えて某虎野球チーム側の応援席のド真ん中に孤立するくらい居心地が悪い。

よくわからない？ 安心しろ自分でも何を言っているのかよくわからない。まあ結局何が言いたいのかというところ――

（なんで、俺はIS学園（ウツ）にいるんだ？）

IS――インフィニット・ストラトスは、十年前に発表された宇宙進出のためのマルチフォーム・スーツ、兼飛行パワードスーツだ。しかし、なにを考えたのやら制作者はISを兵器としてアピールした。

そしてその実用性を決定的にしたのがあの有名な事件――。

『白騎士事件』

ISを発表して一月、日本を攻撃可能な世界の国全ての軍事管制システムがハッキングされ、二千発を超えるミサイルが一斉に日本に向けて発射された。

明らかに迎撃不可能な物量に首脳陣は頭を抱え、国民は絶望に叩き落とされた。

そして、後に『白騎士』と呼ばれる白銀のISを纏った女性が現れた。

後に呼ばれる名の通り、西洋の騎士のような出で立ちをした彼女はおよそ半数、つまり千発を超えるミサイルを切り捨てた（・・・・・・）。

超音速で飛翔した女性はその手に持つ剣で近代の戦略兵器を撃墜し、離れたミサイルを召喚した（・・・・・・）大型荷電粒子砲で撃ち落とした。

超音速を叩き出す機動性。ミサイルをも物理的に切断する格闘能力。大質量の物質を粒子から構成する能力。実用レベルの光学兵器。ISは、それらをもってあらゆる現行兵器を凌駕する性能を世界に示した。

そしてその性能を脅威として認定した世界は、国際条約を無視してまでも現地へ戦力を送った。

彼らの任務は『目標の分析。可能であれば捕獲。不可能ならば――撃破』。

当時、使用可能であった最高戦力が投入されたが、結果は惨敗。

いつそファンタジーとも言える最新技術のオンパレードもあり、人命を奪うことなく各国の最新鋭機を無力化させた。

そして彼女は日没とともに姿を消した（・・・・・・）。比喻でもなんでもなく、文字通り消え去った。世界各国の軍が補足し続けていたというのに（・・・・・・）、だ。

レーダーは勿論、目視でさえ確認させないステルス能力。

発表された当初はその成果を認められなかったISに、世界は膝を折った。

二千を超えるミサイルから始まり、果ては八基の監視衛星まで撃破・無力化したISは『究極の機動兵器』として世界に認知された。『ISを倒せるのはISだけである』という制作者の言葉、そし

てその事実と共に。

と、まあここまで言えばわかっていると思うがIS学園とは、一言で言うならば『ISの操縦者を育成するための教育機関』だ。

と、いつでも軍事学校とかではない。現在ISは色々な条約の元、一種のスポーツのようなものになっている。

そして、ここからが俺を居心地悪くさせている要因でもあるのだが、ISにはある重大な欠点がある。

女性にしか扱えないのだ。

理由は不明だが、男には反応すらしない。

そして、ISを動かせるのが女性だけである以上、必然的にIS学園は女子校である。

つまり、なにが言いたいかというと……IS学園に在籍している俺以外の全ての人間は女性であり、IS学園を『ここ』と呼んでいる俺は、現在IS学園に居る。入学式である今日、一生徒として（…………）1、1の教室に。

そして、俺は男だ（…………）。

先ほどの説明には、『ただし、おりむらいちか織斑一夏という例外を除く』と付け加えなければならない。

「お……む……ん」

前後左右、最前列の席なので前は居ないが他三方向には女子が居る。女子しか居ない。

「の、…り…く…？」

これはキツイ。マジで。俺が今全力で現実逃避しているにも関わらず、クラスメートほぼ全員の視線を感じる。ド真ん中に放り込まれるよりはましたが、中央列最前席ではクラスのほぼ全域から見ることができる。視線が痛い。

「きい…る…な？ おり…ら…ん？」

ここまでくると逆に視線を向けて来ない奴を特定できたりする。

一人は（視線で）救難信号を送ったにも関わらずスルーしやがった窓際のファースト幼馴染み。あれ、もしかして俺嫌われてる？

もう一人（多分これだけ）は隣の席に座っている眼鏡を掛けた理知的な雰囲気少女。

「……いや、幼女？ とまではいかないか？」

小さい、やけに小さい。身長はおそらく140あるかどうかといったところだろう。足床についてないし。彼女はこちらを完全無視、文字通り眼中になさそうだ。

「おりむらくん！」

「は、はい！？」

急に現実引き戻され、かつ大声で名前を呼ばれたおかげで反射的に返事をしてしまったが、声が裏返っている。失敗したことを悟

ると同時に周りから押し殺した笑い声が聞こえてくる。

本当に居心地が悪い。別に女子は苦手ではないが度が過ぎている。無理、無理ゲー、オーバークイルにもほどがある。男女比一対二九、ってなんだよ。副担合わせれば三十だぞ？ 担任がどうかは知らんけどさ。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

山田先生が何度も頭を下げながら言ってくる。というかそんなに勢いよく頭を下げたりしたら、先生小さいんだから「あいたあつ！？」……………案の定。

「いや、そんな謝らなくても……………ってというか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

頭を抱えてうずくまる山田先生（涙目）に声を掛ける、聞こえるか？

「うう、いたい……………えっ？ ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですな？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

『やくそくだよ、いちか』

ふと、頭になにか映像が浮かんた。

が、泣きそうな顔をしている山田先生を視界に収めて、それどこ

るではないことを思い出した。

(これ以上ボーっとしてたら泣いちゃうよな、先生……………)

と、まあそれらはさておき、この状況、最初に溝を作れば恐らくこの環境には二度と馴染めまい。

立ち上がり、振り返る。教室中を見渡すように視界に納める。

今まで何となく俺の背中に注目していた視線が、明確な意思を持って俺に向けられる。ついでに某薄情なファースト幼馴染みは横目で見ており、隣の席のミニマム眼鏡さん(今命名)は面倒くさそうに頬杖をついてこっちを見ている。薄々わかっていたが正面から見えて確信した、この子は可愛い。顔立ちは日本の大和撫子そのものだが、西洋の血も入っているのか肌は真っ白で、それが黒髪によく映えている。典型的な丸眼鏡はサイズが大きいらしく少しずれていてそれが余計可愛らしさを増加させている。その奥に見える黒い瞳は胡散臭いものを見ているような目つきだ。……………今見てるの俺だよな？

つと、自己紹介をせねばな。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

言い切り、軽く頭を下げる。上げる。……………マテ、なんだその『え、それだけ?』『まさか、それで終わりじゃないよね?』『みたいな目線は。

くっ、箒(ファースト幼馴染み)! うわあいつ一瞬で目それしやがった! ええい六年ぶりに再開した幼馴染みに何たる仕打ちか!

(いかん、マズイ。ここで黙っていても俺の評価が『暗いやつ』で確定してしまう……………かくなる上は!)

「い」

「アホか貴様は、せめて趣味か特技くらいは言え。そんなモノで満足するような奴はいないぞ、馬鹿が」

以上です。と、言い始める直前に風鈴のような高く澄んだ声が響いた。――って、は？

声の発信源に視線をやる。隣の席の少女。人形のように整った可愛らしい顔を不機嫌そうに歪めた少女。

え？ あれ？ 今、喋った？

「なにをグダグダしている愚図、せっかく助け舟を出してやったんだ、サツサと便乗しろのろま」

……。

「……………」

沈黙。教室全体が、目の前の人形のような少女の言葉によって静まり返った。

さっきまで隅の席でこそそそ内緒話に花を咲かせていた女の子達も、箒も、山田先生も、クラス全員が呆然としていた。

なにせ生粋のお姫様と言わんばかりの可憐な（見た目）幼い少女が、外見通りの美声でいきなりクラスメート（初対面）を罵倒したのだ。

「……………」

なにも答えない俺にかイラついている毒舌眼鏡さん（改名しました）。

いや、この空気の中で何を語れと？

「趣味でもなんでもいいと言っただろうが、その耳は飾りか？」

心を読むな、何者だよお前。

それはさておき、助け舟であることも確か。幸いクラスも静まり返ってるし、今のうちに自己紹介を進めよう。

（ただ―――）

もう少し、マトモな助け舟も出せたんじゃないですかね？ とうかあんな言い方じゃなくても良いんじゃないかな？ 初対面だよな、俺達？

「織斑一夏、趣味は鍛錬、特技は家事全般、唯一の男子ですがこれからよろしくお願いします」

再び頭を下げ、上げる。みんなまだ呆然としている。うん、まあやっぱそうだね。

みんなの意識が飛んでる間にさっさと席につく。自己紹介が終わったら着席するのは当然の事だ。断じて、断じてリアクションがなくていたたまれなかったからではない。

ちなみに毒舌眼鏡さんは興味なさげにボーっとしていた。

そりゃないぜ……………。

二話 「いくらなんでもその自己紹介は……」 幕

「あ、あのー」

あまりの扱いに机に突っ伏して嘆いていたら頭の上から声をかけられた。さっきよりも泣きそうな声だ。あれ？ ダメだった？

Bannon!

頭を叩かれた。

「いつ——！？」

頭を走る痛みよりもむしろ驚きから、声が上がった。
馬鹿な、これは……この叩き方は。まさか……まさか！
跳ね上げるように顔を上げる。

「げえっ！？ ハドラー！」

ドゴオッ！！

「誰が魔王か、馬鹿者」

二発目、直撃。一夏、沈黙しました。さっきの三倍は痛い。さすが魔王。むしろバーンじゃないか？

そしてなぜここにいらっしゃられますか、姉上。

「織斑先生。もう会議は終わられましたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

なんという優しい声。後期のように悟ったか？

「いえ、副担任ですから、これくらいは」

あ、なんか山田先生千冬姉のファンっぽいな。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五才を一六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

これが俺のお姉様。なんという俺様発言。女性だけど。

「キャ———！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいですよ！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

千冬姉の人気は相変わらずのようだ。

ふと気になって隣の毒舌眼鏡さんを見ている。引いてた。ドン引きしてた。理解不能という感情を、隠すことなく前面に出していた。気分はきつと、未知との遭遇。

「……毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

いや、全体の何割かはこんな感じでどう振り分けても混入するんじゃないか？

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

前言撤回、頼むから誰かこれは極一部の人間であると言ってくれ。見ろ、山田先生はもちろん千冬姉まで顔がひきつってるぞ？ 俺？ 大絶賛現実逃避中だ。

さっきドン引いていた毒舌眼鏡さんはと見てみると……あれ？ なんであなた顔を赤くしてるんですか？

「で、なんだあの様は？」

「いや、千冬姉、俺は——」

パン！

本日三度目。そろそろ転校したくなってきた。無理だけど。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

あ、しまった。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男でISが使えるっていうのもそれが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあ」

まあ、とりあえず彼女達の発言は置いといて、だ。
なぜ千冬姉がこんなにも慕われて（笑）いるのかというと。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

実は千冬姉、元日本代表のIS操縦者でIS世界大会の覇者、しかも公式記録は無敗と名実共に世界最強の女性なんだ。

以前少し触れたと思うが、俺は世界で唯一ISを動かせる男だ。理由はわからない。はつきり言って皆目見当がつかないし、思い当たる節もな……いわけではないが、確かめる術はないのでとりあえず放置。

それはさておき
閑話休題。

俺がここに来たのにも経緯がある。

ざつくばらんに言えば偶然ISに触っちまって、ISが反応、それを見られて即入学決定、というだけなんだが一応聞いてほしい。つまり愚痴だ、愚痴。

二月、中学三年の俺は受験まっさかりだった。

俺は学費が安い・家から近い・学力真ん中、と三拍子揃った藍越あいえつ学園を受験するために自宅から本校より遠い（……………）受験会場へと向かっていた。

昨年起きたカンニング事件のせいで採用された、入試会場は受験二日前に通知するという愉快な方式のおかげで現在俺のテンションはただ下がりにしている。

が、諸事情により千冬姉だけに負担をかけ続けている俺にとって藍越学園の入試は落とせない。

なぜなら藍越学園は卒業後、その九割が学校法人の関連企業に就職しているからだ。

しかも優良企業が多く、地域密着型なので転勤もない。花丸だ。本当は中学卒業と同時に働きたかったのだが、千冬姉のOHANASHI、もとい（肉体言語による）お話しによって説得されてしまった。

とまあそんなこんなでやってきました受験会場、多目的ホール。そしてやってきたはいいけれどあまりの迷宮具合に迷子な俺。

……。

「いや、中三にもなって迷子かよ」

いかん、シャレにならん。

というわけで目の前のドアを開けてみる。誰かいませんか？

「あー、君、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいっ
たらないわ。まったく、何考えて……」

いた。いたんだけどやたら忙しいのか、此方をチラリとも見ずに
まくし立ててきた。ついでにビシリとカーテンを指さすと、結局最
後まで一瞥もせずに部屋を出て行った。

（着替え？ ああ、カンニング対策の一環か？）

そこまでやりますかね？ まあどうせやるなら徹底的に、てこと
かな。

そんなことを思いながら、カーテンを開けるとそこには――

――ISがあった。

ひざまずくような格好で鎮座しているそれに、なんとなく近付い
てみる。

これは現代の力の象徴。

かの天才、篠ノ之束しののたはねが造り上げた『最強の機動兵器』。

（機動兵器として運用された、宇宙進出のためのマルチフォーム・
スーツ………まるで）

冷たい感触。どうやらいつの間にかISに触れていたようだ。

そして――

——ISが起動した。

「!？」

それと同時に頭に直接叩き込まれる数多の情報。ISに関する情報が刻み込まれていく。

「こいつ……動くぞ」

ISが展開していく。ISを理解していく。俺は今、ISを操縦している。

そして、ISの中そこから見た世界は——。

「では次の人、お願いします」

山田先生の声に意識が戻る。

どうやら、現実逃避のあまり意識が放浪の旅に出ていたようだ。よくあるけど。

ところで自己紹介は今誰なんだ？

ガタリと、隣から席を立つ音が聞こえる。

「くどうれん工藤煉」

風鈴のような澄んだ声が響く。どうやら毒舌眼鏡さん改めレンの

番のようだ。

レンは一呼吸置いてから再び口を開いた。

「趣味は読書、特技は薬品の生成。好きなものは平穏と静かな場所と他人の不幸、嫌いなものは騒動と騒音と暴力と他人とウサギ、なにより馬鹿。特に馴れ合うつもりはないから用がなければ関わらないでもらいたい。なお、敵対するものには一切容赦するつもりはない。以上」

……ひでえ、なんだこの自己紹介。明らかに俺の事をどうこう言えないだろ。見ろよ教室の空気が完全に凍りついたぞ？　つか、礼もせずに何事もなかったように席に着くんじゃねえよ。見ろ、千冬姉まで固まってんぞ、今日一日で千冬姉のレアな顔見過ぎだろ。

凍りついた教室の雰囲気は苛立たしげに顔をしかめるこの（見た目だけ）お姫様、どうすればいいんだろう？

二話 「いくらなんでもその自己紹介は……」 幕（後書き）

通りすがり1です。実は報告があります。

昨日、土曜日までは一日一話投稿と言いましたが思つところがありました、一日二話上げることになりました。

投稿二日目にしていきなり予定を変更するなどという、自分でも驚くほどの無計画ですが、どうかよろしく願います。

三話 「人は見かけによらない……………なんてレベルではありませんわよ！」

現在、一時間目の休み時間。

ちなみに日付は変わっていない、IS学園ではギリギリまでISについての授業があるため入学初日から授業がある。

ここが普通の学校であれば呪いの言葉でも吐く事実だが、今の俺にとって問題なのはそこではない。

「……………」（カリカリカリ）

ここで少し再確認。

ここはどこ？ IS学園。

ここには誰がいる？ 生徒と教師。

原則ISを操縦できるのは？ 女性のみ。

つまり？ ……………この広い学園に男は俺一人。

「……………」（ペラリ）

（甘く見てた。なんだこれ。なんなんだこれ！？）

学園全体で男は俺ただ一人。覚悟はしていた。していたんだが。

（想像以上にキツ過ぎだろ！）

教室はもちろん廊下にまで及ぶ人の群れ（他学年の生徒まで）。しかもお互いに牽制しているのか誰も話しかけてくることはなく、周囲にはぼつかりと誰もいない空間が横たわり、その周りを取り囲むように人（もちろん全員女子）が密集している。ドーナツか。

（俺は珍獣かよ……………）

唯一そばにいるのは隣の席に座るレンだけだが（他の女子はみんな退避した）……………。

「……………」（ペラリ）

そうですね。趣味は読書とか言っていましたよね。予習らしきものは終わったのか？　そういえば自分に関わるなとも言ってたな。というか他のお隣さん達が逃げた原因の一端はあなたにある気がするんですが？　マイペース過ぎやしませんか？

「……………ちょっといいか」

凜とした声が響く。どうやら俺が話しかけられたようなのでうつ伏せていた体を起こす。

こいつは……………

「箒？」

篠ノ之箒^{しのはなひ}。六年ぶりに会うファースト幼馴染みだ。以前俺が通っていた剣術道場兼神社の娘。墨を流したような艶やかな黒髪は今も昔も変わらぬポニーテール。不機嫌そうな目と雰囲気には磨きがかっている。

「廊下でいいか？」

ここを抜け出せるなら何でもいい。なんなら温泉くらいは付き合っぞ？

「早くしろ」

「了解」

廊下に向かう筈。追う俺。道を空ける女子。これなんてモーセ？
廊下に出たはいいものの、珍獣包囲網は継続されている。教室と
変わんねえ。

「そういえば」

「なんだ？」

しばらく沈黙が続いたが、なにも話さないのどこちから話しか
けてみた。確か…………。

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだって？ おめでとう」

「……………」

黙殺。

え、俺なんかした？

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「いや、新聞に載ってたし」

「な、なんで新聞なんか見てるんだ！」

なんという理不尽。誉めたのに怒られたうえに新聞を読むとか。

「それと」

「な、何だ！？」

ものすごい剣幕。カルシウム足りてるか？

「久しぶりだな、六年ぶりだけどすぐに篤だってわかったぜ」

「え……」

「そんな見事なポニーテールはなかなか見れないからな」

「……………」

また睨まれた。ううむ、六年前とは迫力が違うな。

キンコーンカーンコーン。

おっ、予鈴かて早っ！？ さ、さすがIS操縦者、あつと言つ間に解散していった。

「俺達も戻ろうぜ」

「わ、わかっている」

篤も呆氣にとられていたようだ、少しどもった。

どもったのが恥ずかしいのか、さっさと俺から顔をそらして踵を返した。

マズい。大変マズい。

現在、二時間目の授業中。

一応入学前の参考書は読んだが圧倒的に知識が足りない。

そんな知識量で大丈夫か？ 大丈夫じゃない、問題だ。

いや、マジで。真剣に何を言ってるかすらわからない。専門用語が多すぎる。

他の入学する前からISのことを勉強してきた生徒と、入学が決定してから今日まで（茫然自失していた時間を除く）の短い期間、しかも独学で一から参考書を読むしかなかった俺、同じレベルを期待されても困る。

チラリと隣の席（レンとは反対側）を見る。熱心に授業を聞きながらノートを取っている。

軽く周囲を見渡す。真面目に授業を受けるクラスメート達。頭を抱える俺。

（どうしろと……どうしろと言っんだ！）

とりあえず無駄な足掻きだが、授業範囲のページを開き黒板をノートに写す。できれば意味のわからない単語を調べてノートの隅にメモしておきたいが、ノートを書くのに手一杯でなかなか上手くない。

「おい」

悪戦苦闘していると隣から機嫌の悪そうな声が聞こえた。レンさん？

「さつきからバタバタと目障りだ。これをくれてやるから静かにしろ」

そんな言葉と共に渡されたのは……折り畳まれた一枚の紙。ノートを破いたのか？ 恐る恐る開いてみる。

『一時間目からアタフタと見苦しい、覚えればとりあえず理解のとかかりになる単語をリストアップした。死ぬ気でその足りない脳みそに刻み込め。そして静かに授業を受ける。事前に使いやすい重要単語表くらい作っておけ間抜け』

冒頭にそう書かれた紙には、黒赤青の三色で色分けされた単語表が載っていた。簡略化されたわかりやすい説明に加え、それぞれの単語に関連する教科書のページが書かれている。

これなら最低限重要な単語の意味はわかるし、深いところまで知りたければ書かれているページを開けば詳しい説明が載っている。

まさか、レンが休み時間ずっとカリカリ書いていたのは……？
レンに視線を向ける。此方に全く欠片も爪の先ほどにも注意を向けず、真っ直ぐ正面を向いて授業を聞いている。

もしかして……レンって良い奴？

とりあえずノートを一枚破り感謝の意を走り書き、レンの机に置く。

レンはチラリと一瞬だけ視線をやるが、それを特別どうこうすることはなく再び授業に集中した。

せっかくレンが作ってくれた単語表を無駄にしないためにも、俺もせっせとノート作成に取りかかった。

「ちょっと、よろしくて？」

レンにもらった単語表の助けもあり、なんとか乗り切った二時間目の休み時間。

ひとまずレンにちゃんとした礼を言おうと口を開いた瞬間、いきなり声をかけられた。

話しかけてきたのは金髪ロールの西洋人だった。

つり上がった目と尊大な態度、こちらを見下したような雰囲気は『いかにも』今の女子と言わんばかりだ。

今の世の中、ISを操縦できるのは女性だけということもあり、女性はかなり優遇………どころか女尊男卑とも言えるような風潮になっている。

現在の男の立場は完全に奴隷、労働力となっている。昨今、全く見知らぬ女性にパシられる男の姿をよく見かけるほどだ。

つまり、目の前の金髪縦ロール（仮名）はそういった手合いだということだ。

ちなみに、レンは毒舌だが別に男だからと見下しているわけではなさそうだ。

「訊いてます？ お返事は？」

「ん。ああ、訊いてるが……何の用だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくし私に話しかけられるだけでも

光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

この手合いは苦手だ。嫌悪しているといってもいいかもしれない。

「それを言うなら、初対面の相手に払う礼儀というものがあるんじゃないか？　そもそも君は誰だ？　悪いが俺は君が誰か知らない」

自己紹介の間、意識が飛んでいたせいだけだな（主に千冬姉ショックと回想、ついでに毒舌ショックで）。

しかしどうやらこの回答は金髪縦ロールにとって気に入らなかったようで、顔に明らかな嘲りの色を浮かべている。

「私を知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

金髪縦ロール改めセシリア（……）とやらが胸を張る。割とどうでもいい。

「いい加減そのうるさい口を閉じろ、くるくる頭」

いつそ幼いとも言える声が割り込む。読んでいたのであろう分厚い本を机に置いたレンが苛立ちも露わにセシリア（……）を睨めつける。

「な、なんですよ、あなた？　このセシリア・オルコットの話にいきなり割り込んでくるなど、無礼ではありませんか！」

ああ、セシリア（……）だったのか、なんか変だと思った。

「うるさい。他人の迷惑も考えられないくらい貴様の頭は残念なのか？ まあ、あんな頭の悪い演説をするくらいだから残念なのだろうな、だがせめてその残念な頭で考えることぐらいは覚える」

「なっ！？ …… ああ、確かあなたもこの極東の島国の住民でしたね。ならばしかたありませんか、なにせ極東の蛮族ですものね」

「……………」（ペラリ）

無視。セシリアが声のトーンを落とすと同時に本を開き、文字通りセシリアを眼中にも入れていない。

ここまで来るといつそすげえよ……………。
セシリアの顔が引きつっている。哀れだ。

「こ、このセシリア・オルコットを知らないというのですか」

大声を出さなければレンが絡んでくるとはないと結論づけたのか、若干声を落としてレンの介入などなかったように話しかけてくるちよっぴり涙目なセシリア。うん、がんばれ。超がんばれ。

「ああ、すまないな。知らないんだ」

自然と声と視線が柔らかくなる。

「くっ、国家代表IS操縦者の候補生。しかも栄えある英国のですわよ！？ なぜ知らないのですか！」

大きくなった声に反応したレンが本から目を上げてセシリアを睨む。……なんだ、あの目。OHANASHIを開始する直前の千冬姉に通ずるものがあるぞ。

「つ、つまり、私のような選ばれた人間と同じクラスであることは奇跡……幸運なのですね。その現実をもう少し理解しヒイ!？」

セシリアもレンの視線を感じ取ったのか微かに震えながらも声を抑えて話を続けていたのだが、ついヒートアップして声が大きくなった瞬間レンがセシリアの肩を掴んだ。

「な、な、な、ななんですか?」

セシリアさんや? 精一杯虚勢を張っているところ申し訳ないんだが膝が笑ってるぞ? 尋常じゃない速度で。

「……………」

無言で肩を掴み、いつの間にやらにこやかに微笑んでいる(……。レン。いや、目が全く笑ってないから。目だけが無表情だから。……………がんばれセシリア、負けるなセシリア、強く生きてくれ。

「……………そろそろ」

「ヒッ!？」

「そろそろ、静かにしてもらえないか? オルコット?」(ニコッ)

かくかくと首を縦に振るセシリア。
その肩がミシミシと悲鳴を上げているように聞こえるのは幻聴だろうか。だいいいなあ。……………レンこええ。

結局、這々の体でレンから逃れたセシリアは俺との会話（と言えるのか？）を続ける気も無くしたようで、解放されるやいなや一直線に自分の席に戻った。

なお、チャイムが鳴るまでの間、教室内にはレンがページを捲る音だけが響いていた。

あ、まだお礼言えてない。

四話 「あれ？ 俺、当事者なのに空気？」 一夏

気付いた事が一つある。

レンが静かな場所と平穏を好むというのは本当のようで、実際さつき騒いでいたセシリアが修正されていた。

だが、どうやらレンはひたすら周りに静かであることを強要するのではなく、あくまで自分のすぐ近くで騒がれることをとても嫌うようだ。

現に、さつきの休み時間、騒いでいたのはオルコットだけではなく、他にも何人かいた。

レンは別の事に集中している時に、どうしても意識内に収まってしまう範囲で騒がれるのを嫌うようだ。

だから範囲外にいたクラスメートは修正されず、範囲内で騒いだセシリアは修正された。

そして、他に集中することがなかった自己紹介の時間に起こった千冬姉関連の騒ぎには関わらなかった。……いや、例えば読書中であつても関わりなくなつたに違いないだろうが。

さて、まあつまりなにが言いたいかと言うと、だ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ 私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

この状況に、助け舟は期待できそうにないということだ。

事の発端は三時間目。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

この授業では一、二時間目と違って、山田先生ではなく千冬姉が教鞭を振るうようだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

うん、すぐくめんどくさそうだ。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

これを聞いてどう思う？ ……すぐ、面倒です。

なるやつはご苦労様だ。マッサージくらいならいつでもやってやるぞ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

………は？

「私もそれが良いと思います！」

オリムラ……折村？ いや、俺以外なら誰でもいいけど。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

は？ え？ いや、はあっ！？

「お、俺！？」

立ち上がる俺。一斉に襲いかかる期待の眼差し。……箒、レン、お前くらいだよ、視線を向けなくていてくれるのは。見たくもないのか興味もないのかは知らないけど。

「邪魔だ。織斑、席に着け。他にいないか？ いらないなら決定するが」

「ちょっと待ってくれ！ 俺はそんな「くどい」」

せめて最後まで言わせてくれよ！？

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

救世主だ！

そう叫びかけたこの時の俺を殴り飛ばしてやりたい。

そして、冒頭の回想という名の現実逃避からここに繋がるとい
うわけだ。

「實力から考えれば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍
しいからと極東の猿にされては困ります！ 私はわざわざこのよう
な島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをしに
来たわけでは断じてありませんわ！」

そんなに日本が嫌いなら今すぐ国に帰れよ。ISなら別にイギリ
スでも学べるだろ、お互い嫌な気持ちになるから可及的速やかに帰
ってほしい。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそ
れは私ですわ！」

どこの演説家気取りだ。戦時中に、敵国に対してならいざしらず、
平時に公共の場、しかもまさにその国で貶すような演説をして共感
なんて得られるはずがないだろう。しかも結局はただの自画自賛か
よ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自
体、私にとっては耐え難い苦痛で」ナルシスト黙れ自己陶醉者、自画自賛なら
よそでやれ」

……………レン？

「レ、レンさん……でしたか？ 今は私が話しているのです、邪魔
しないでもらえるかしら？」

先程の件が尾を引いているのか若干腰が引けているセシリア。

「貴様に名を許した覚えはない、僕の名を呼ぶな、気持ち悪い」

さつきよりも機嫌悪くないですかレンさん！？　そしてニヤニヤしながら傍観してないで止めようよ千冬姉！

「な、な、な、なんという屈辱！　こ、こここのセシリア・オルコットに向かってなんという暴言を！」

あまりの怒りに恐怖を忘れたのか凄まじい剣幕でレンに叫ぶセシリア。

「何を言っているんだ？　これ以上ないくらい貴様に相応しい言葉を選んでいるつもりだが？」

今気付いたけどくるくる頭と呼ばなくなってる。……………もしかして固有名詞で呼ぶ価値もないと思ってるのか？　……………ありそうだな。

「私は貴族ですよ！？　払うべき敬意というものがあるでしょう！？」

「貴様のどこに敬意を払ってしかるべき要素がある？　あいにくだが権威に縋るしか能のない輩に払う敬意は持ち合わせていない」

あつ、レンって自分のことを僕って言うのか。

「あ、あなたどこまで人を愚弄すれば……………！」

「はっ、自分を棚に上げることだけは唯一誇れる程度には得意なようだな」

そもそも、と続ける。

「貴様の苦痛がどうか知ったことか、そんな愚痴は個人的に友人にでも漏らせ、聞くに堪えない。……まあ、貴様に友人がいれば、の話だな」

馬鹿にするような声色で言った。あ、鼻で笑った。

「ああ、あるいはその高貴な血筋とやらに引かれて寄ってくる輩にでもいいんじゃないか？」

そう嘲るように締めくくるレン。もう興味を無くしたのか、席について呑気に欠伸なんかしてる。本当にブレないな。

「……………」（パクパク）

顔を真っ赤にして無意味に口を開閉するセシリア。金魚みたいだ、金髪だし。

ふと、セシリアがなにかに気付いたようにはっとした。

「わかりましたわ……………あなた、その猿が好きなんでしょう！だからそんなに必死で庇うんですわね！？」

鬼の首を取ったような勝ち誇った顔で、自信満々に言い切るセシリアに視線を向けたレンは『ダメだ、こいつ、もうどうにもならない……………』と言わんばかりの表情を浮かべ、どこか生暖かい目でセシリアを一瞥するとなにも見なかったフリをした。レンなりの優し

さだろっ。…………セシリア。

「あら、図星なのですわね？」

ニヤニヤしながら続けるセシリア。いや、気付けよ。この、教室内に流れる生暖かい空気に。

「でしたら、ちょうどいいですわ。そのあなた、決闘ですわ！」

ビシリと俺を指差すセシリア。って俺！？

「いやいやいや、待て待て待て。なんで俺なんだよ！？ 普通ここはレンじゃないのか！？」

馬鹿にするような表情。うぜえ！

「そのメガネはどうやらあなたのことが好きなようですし、それならあなたがボロボロになったほうが堪えるでしょう？」

ズビシとレンを指差すセシリア。超個人的な理由だ。しかも陰険。ちなみにレンは生徒手帳を開いている。いや、こいつが俺を好きとかないだろ。無反応だし。

「元々、クラス代表についての話でしたし。自薦他薦いずれも受けていないメガネとの決闘はおそらく許可が下りませんでしょうし」

そういえばそうだったっけ？ すっかり忘れてた。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

む。

「侮るなよ？ 真剣勝負で手なんか抜くか」

「そう？ 何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこの私、セシリア・オルコットの实力を示すいい機会ですね！」

うーん、この流れはやっぱりESで決着をつけることになるのか？

「こつちこそ！ そうそう簡単に無様を晒すかよ！」

好戦的な表情で睨み合う俺とセシリア。やばい、ちょっと楽しいかも。

「さて、話はまとまったな。勝負は一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

テンション上がっててノリまくったけど、よくよく考えれば別にクラス代表に興味無いんだよねあ。……………勝っても負けてもデメリツトしかない決着って…………。

（まあ、約束しちまったからな。今はできることをやるだけだ。ひとまずは——）

——真面目に授業を受けますか。

後日、なぜセシリアに突っかったのかレンに聞いたところ『僕は馬鹿が嫌いなんだ』という答えが返ってきた。……………セシリア。

四話 「あれ？ 俺、当事者なのに空気？」 一夏（後書き）

舌の根も乾かぬ内に、というやつです。

ああ言った当日にまたもや破ってしまっただけにすいません。

ただ、ISのネームバリューのお陰か初投稿から二十四時間で5000PV突破、ユニークアクセス879、14件のお気に入り登録、果ては感想を一件頂きまして、感極まって投稿してしまいました。

切人様、本当にありがとうございます。

今後はこういうことはないようにと心がけます。……………というか、これ以上ペースを上げるとストックがあつと言つ間に尽きてしまいますので。

……………ところでお気に入り登録してくださった方ってどうやって確認できるのでしょうか？

五話 「まさにラブコメの主人公だな。せいぜい気をつけろ、一步間違えればめ

「うう……………」

放課後、俺は机に倒れ伏していた。

「くそ、いくらなんでも無茶だろ」

授業はひたすら専門用語のオンパレード。いくらレン特製の単語表があるといっても限界はある。

（いや、あの後も作り続けてくれたんだが……………）

授業の度に、どこかいつ作ったのやら必要になる度、授業中にさえ仏頂面で単語表を渡してくれている。そろそろノート一冊分になるほどの量だ（効率的なレンの表でさえそれだ、ISに必要な知識量は半端じゃない）。しかも俺の理解度を考慮しているらしく、正に痒いところに手が届くような使い勝手の良さ。

とはいえ、それはあくまで俺専用の簡易辞書にすぎず、俺自身が使いこなせれば意味が無い。残念ながら、ここまでしてもらっておきながら俺の勉強不足（情状酌量の余地はあると思うけど）で活用しきれていない。

（がんばらなくちゃな、なんでか知らんがわざわざレンが作ってくれたんだ、真面目にやらなきゃ合わせる顔がない）

当の本人はHRが終了した瞬間帰ったけどな。あまりに速すぎて未だにお礼も言えてないぞ。昼休みは昼休みで一瞬でどっか行っち

まったし。お礼も兼ねて少し話したかったんだけどなあ。

昼休みといえは……………やっぱいいや、思い出したくない。モーセ再臨とだけ言っておく。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね、よかった」

「はい？」

自分の名前に反応して顔を上げる。案の定山田先生だ。書類を片手に立っているのだが、なぜか妙に小さく見える。なぜだ？ いやどうでもいいけどさ。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました。」

はい？ いや確かにIS学園は全寮制だけどさ。たしか――

「俺の部屋、決まっていんじゃないじゃなかったですか？ 一週間は自宅から通学するって……………」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的に無理矢理部屋割りに押し込んだみたいです。……なにかそのあたり政府から聞いてます？」

最後だけ耳打ちしてきた。いや、なんにも聞いてませんよ？ 今までで唯一の『男のIS操縦者』だから監視と保護の両方を付けると連絡を受けて以来日本政府からは放置されていますし。

「そう言うわけで、政府特命もあって、寮に入れるのを最優先したみたいです。個室を用意するのに一月くらいかかるので、それまで

相部屋で我慢してくれ」

ふむふむ、それなら朝の内に言っとこうぜ。というか今やっと部屋決まったって、行き当たりばったりだな、日本政府。それはそうと。いつまで耳打ちを続けるんだろうか？

「部屋はわかりましたけど、荷物の準備があるんで一回帰っていいですか？」

面白そうなので、何となく耳打ち状態続行。

「あ、いえ、荷物なら「私が手配してやった。ありがたく思え」」

脳裏にドラクエボス戦のBGMが流れる。たまにFFも流れる。

ああ、このラスボス感溢れ出すBGMが流れるということは千冬姉か。絶対どこぞの大魔王マギールのごとく、全能力カンスト即死無効チートスキルデフォ最強武器独占のような無理ゲーのラスボスだけだな。イベント勝利も望めなさそうだ。

「あ、ありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯の充電器に、外出バッグでいいだろう」

大雑把！ 確かにそうだが……まあ外出バッグがあるならいいか。ちなみに外出バッグとは、セカンド幼馴染みのフットワークの軽さを見習って作ってみたものだ。初めて使う。

「じゃあ、時間に注意してくださいね。夕食は六時から、寮の一年生食堂です。シャワーは各部屋にあって、大浴場もありますけど、

織斑君は今のところ使えません」

「あー、公共の施設ですもんね」

「えっと、説明は以上です。私達は会議があるので、これで。織斑君、寄り道せずに寮に帰ってくださいね」

いや、50mの道のりでどこに寄れというんだ？

「1025号室は………ここか」

部屋番号を確認して鍵を差し込む。あれ？ 開いてる？

部屋に入ると大きめなベッドが二つ、ホテルみたいな部屋だ。荷物を足下に放置し、ベッドにダイブ。………羽毛だ、これ。ベッドも柔らかいし。国立万歳。20歳になったら、是非とも羽毛布団党に清き一票を捧げよう。

「誰がいるのか？」

ドアの奥の方から声が聞こえる。シャワーでも浴びてたのか？

「ああ、同室になったものか。これから一年よろしく頼むぞ」

………ん？ この声は、箒？

箒、シャワー、相部屋、同室。嫌な予感しかない。とりあえず

全力でドアから体を背ける。ちょうどベッドに腰掛けているような体勢だ。

「こんな格好ですまない。シャワーを使っでいてな。私は篠ノ之」
「」

予感的中。というか。

「どんな格好だよ。怖くて振り向けないぞ？」

キョトンとしている篤。いや見てないよ？ 何となくそんな雰囲気な気がする。

「い、い、いちか………？」

「お、おう」

真っ直ぐと前を見据えて力強く頷く。まあ壁に向かってなんだが。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる………？」

声が震えている。そりゃシャワーから出た直後（しかもこんな格好とやらで）に異性がいたらこうなるわな。

「いや、俺もこの部屋」

俺が言葉にできたのは、ここまでだった。コトリ、と何かを掴むような音が聞こえたその瞬間、反射的に体を前に投げ出す。

ゴウウ！

凄まじい音と共に後頭部を何かが掠める。文字通り間一髪だ。更に追撃の気配。

体勢を整えて力強く足を踏み出す。目指すはこの部屋からの脱出、あの扉の先にはきつと心休まる世界が待っている。

「待て一夏！」

待つてなんてられない。俺の全て（主に生存本能）がこの扉の向こうに待つ世界《安全圏》に走り出せと叫んでいる。

さあ、飛び出そう！

「うおうっ！？」

「きゃあっ！」

世界が反転した。なんだ！？なにが起こった！？待て、落ちて、落ちて、落ちて、織斑一夏！冷静に、順番に事態を整理しろ。

1 ・俺の部屋決定。

2 ・部屋到着。

3 ・箒に遭遇。

4 ・言い訳開始。

5 ・言い訳強制終了、緊急脱出。

6 ・女の子を押し倒す。↑今ココ

オワタ。

これはオワタ。何やってんの、俺？ 部屋から飛び出した勢いそのままに女の子押し倒すとか。つかむしろどうやったの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？

「い……た……？」

呻き声を上げる少女。何が起こったのかわかっていないのか、呆然としている。……じゃなくて！

現実逃避している場合じゃない！

「わ、わりい、怪我とか大丈夫か？」

「け、怪我……？ だ、大丈夫で……待て、貴様は何をしている？ なぜ廊下で僕を押し倒してなどいるんだ？」

……え？ 貴様？

「レ、レン！？」

「~~~~っ！ 耳元で叫ぶな色情狂！」

「し、色情狂！？」

「まだ日の昇っている時間から、女子しかいない公共の場で、初対面の、それも女性的魅力もほとんどないような僕でも見境無く、いきなり押し倒す貴様が色情狂でなくてなんだと言っんだ！」

「否定できねえ！」

行動を客観視すると本当に救いようがねえなあ俺！

「何をやっているんだ、一夏？」

底冷えするような声、というものを今身を持って知った。

「ほ、箒……さん？」

あまりの恐怖に体が動かない。レンを押し倒した体勢のまま、振り向くこともできずに言葉を返す。

「篠ノ之？」

レンが訝しげに言う。状況が理解できていないんだろう、色んな意味で。こうなった経緯を知らないし。箒の雰囲気から危険度を悟れるほど付き合い長くないし。

「もう一度聞く、何をしている？」

まずい。ここで返答をミスったらデッドエンド一直線な気がする。ここは慎重に答えなければ。

「レンを押し倒しています」

何口走っちゃってんの俺！？

「そうか、死「待て、僕にも状況を説明しろ」」

「……工藤、だったか？ これは私と一夏の問題だ、口を挟まな

いでもらいたい」

「貴様の目は節穴かなにかか？ 現在進行形で色情狂に押し倒されている僕の姿が見えないのか？ そもそもその振り上げた木刀をどうするつもりだ？」

「無論、一夏の後頭部に振り下ろす」

ピンポイントで急所を狙うな、シャレにならんぞ。

「少しは状況を見る猪侍、その色情狂の体勢と貴様の腕前を考えると明らかに致命だろう。殺人犯になりたいのか？」

うつ、とどもる箒。完全に頭から抜け落ちていたな。ちなみに俺は今orz状態でレンを押し倒している。なんでさっさと退かないかって？ 箒が怖くて動けないんだよ！

「第一、位置的に僕も巻き込まれる。理由もわからず馬鹿共の痴話喧嘩に巻き込まれて怪我をするなど馬鹿らしい」

うつ、いや確かに俺が悪かったけどさ。そんな蔑むような目で睨まないでくれ。

「猪侍、ひとまず貴様の部屋で話を聞かせろ。いい加減この場を離れるぞ、衆目が不愉快だ」

……………そういえば、ここ、女子寮の廊下だったな。喧騒に引かれて集まった人目が痛い。

コラッ、そこっ！ 「織斑君って……………ロリコン？」とか呟くな。それでもって周囲も引くな。

「な、なにをしている、さっさと行くぞ！」

篤が俺を引っ張り起こす。今更状況に気づいて恥ずかしくなったのか、顔が真っ赤だ。

「いい加減どけ、色情狂。いつまで僕の上にいるつもりだ」

わかったから脇腹を抓らないで下さいレンさん。

六話 「俺は変態か!？」 一夏

「貴様が原因だ」

俺達の話聞き終わって開口一番、レンが箒を指差して言い切った。

「ま、待て！ 確かに私に非がないとは言わないが、断じて原因などではない！」

慌てたように叫ぶ箒。ちなみにちゃんと剣道着を着ている。多分すぐに着られるのがこれしかなかったんだろう。…………俺を追撃するために急いだんだろうなあ。

「はんっ」

箒の弁明を鼻で笑い飛ばすレン。心底馬鹿にするような表情をしている。ちなみにレンは上下の黒いジャージを着ているんだがいせん、少し大きいためダボツとしている。

「恋は盲目、とでも言うつもりか？ 視野狭窄、浅はか、馬鹿、考え無し、短気。…………幾ら言葉を重ねても貴様を形容するには足りないな。自分の行動を客観視しろ、織斑に非がないとは言わんが、最大限配慮を重ねた織斑の話を聞くこともなく一方的に暴力を、しかも自分の力量も省みず、明らかに致命レベルのものを振るう者以外の誰が原因か。原始時代からやり直せ野蛮人」

罵倒。一部意味のわからない物も混じっていたがレンはひたすら箒を罵倒している。

ほうきは もう なみだめだ！
ってちよつと待て！？

「レン！　いくらなんでも言い過ぎだ！　俺を庇ってくれるのはう
織斑を庇う？」れ……へ？」

え？　疑問系？

「寝言は寝て言え。僕が、織斑を庇う？　はっ、ありえないな。な
ぜ僕が貴様を庇わなければならない」

「えっ、いやだってさっき」

「僕はあくまで原因を追求しただけ。貴様を庇う心算など欠片もな
い」

キツパリというレン。

「……………」

いや、なんかもう自惚れてすいませんでした。……………って、あれ
？　なんでそんな気まずそうに目を逸らすんですかレンさん？　そ
の『やつちまったよ、オイ』みたいな表情はなんぞ？

「あ、いや、その……………すまなかった、織斑！」

ガバツ、と頭を下げるレン。え、なに？

「本当にすまない、謝罪しなければならぬのに、切り出しづらい
からと不快にさせるようなことばかり言ってしまった」

え？ えと？

「許してもらえないとは思わないが、とにかく謝罪させてくれ！」

「いやまじでさっきから何を言ってるんだよレン！？」

むしろ謝罪するべきは俺だろう！？

「織斑を色情狂と言っただろう？」

いや、それは仕方ないんじゃないか？ 普通はあんなことやったら即座に寮長《千冬姉》に突き出されても文句は言えないだろう。

「いいや、タイミングが出来すぎたとはいえ狙ってできるようなことではないし、そもそもあんなに焦っていたんだ、何か事情があったと判断するべきだったのに、確認もせずにあんなことを……」

……」

「いやそんな、気にすんなって！」

見た目小学生（だいたい三年生くらい）のようなレンが頭を下げながら落ち込んでいるのは精神衛生上たいへんよろしくない。

「篠ノ之もすまなかった、僕は自分のことを棚に上げてあんなことを……」

「い、いや、こちらこそすまなかった」

多分俺と同じように思ったのだろう。必死にレンの頭を上げさせ

ようにする筈。

レンはどうやら非常に責任感が強いようで大げさなくらい自分の非を責めている。しかも謝りづらくてつい暴言を吐いてしまい余計謝りづらくなる、といった感じに連鎖自爆していくようだ。これなんて自虐連鎖？

「いい加減頭を上げてくれ！」

筈の悲鳴のような叫び声に一瞬体をビクッとさせたレンは恐る恐る頭を上げだした。やっとか。

「す、すまない、また不快にさせてしまったな」

ポーカークフェイスを崩して涙目でしょんぼりするレン、しかも身長差の関係で上目遣いな上に眼鏡がだいぶずり落ちている。やべえ………なにこの可愛い生物？抱きしめたいな、レン！

あまりの可愛らしさに抱きしめようとフラフラ立ち上がる筈を止める。ついでに暴走気味な俺の思考も止める。

多分今のレンは抱きしめても文句を言わないけど、それはやっちやいけない気がする。

「ただでさえ織斑は唯一の男子生徒として注目されているというのに、あんな公衆の面前で悪評の元になるような軽率な発言を………僕はどう償ったらいいのか」

うげっ。中途半端に現実味あること言うなよ、これフラグじゃないかな？

「ま、まあ気にすんな、そんな噂が流れたらレンも否定してくれるんだろ？」

「ああ、もちろんだ。……………すまない、非はこちらにあるのに気ま
で使わせてしまって」

また落ち込むレン。ネ、ネガティブだ……………。

「……………織斑、僕にして欲しいことがあったらなんでも言ってくれ。
僕にできることならなんでもしよう」

意を決したように言うレン。

「いや、なんでもって……………」

「頼む！」

うつすらと涙を浮かべた瞳で、継るように俺を見るレン。それを
見た瞬間、俺の中で何かが疼いた。

幼さを色濃く残しながらも、女性らしさを感じさせる丸みを帯び
た体は背德的で。切羽詰まったように慌ただしく動く淡いピンクの
唇は柔らかそう。哀願するように上目遣いでこちらを見つめる瞳
は嗜虐心をそそぐ。そして、必死に尽くそうとする健気な雰囲気、
それは保護欲と共に支配欲をくすぐり――

（今、俺はなにを考えた？）

自分の中のドス黒い欲望を認識して、愕然とする俺。
織斑一夏、（21）への目覚めだった。

「ざけんなあつー！」

あ、危なかった……。何が危ないって、それも悪くないかもとか思っちゃう自分がいたのが何より危なかった。

「す、すまないっ！　だが、僕にはこれくらいしか思いつかなくて……」

「いや違うから！　レンに言った訳じゃないから！」

泣きそうな顔をしないでくれ！　なんか今日一日で築き上げられた俺の中のレン像がものっそい勢いで崩壊していくんだが！？

「そうじゃなくて！　レンに責任なんてどこにもないって！　いきなり男に押し倒されたら誰だって錯乱するだろ、悪かったのはこっちだって！」

同意するように頷く篤。

「そもそも、女子が男子になんでもするなどと簡単に口に出すものではないぞ？」

「？　なぜだ？」

『は？』

「いや、だから、なんで女子が男子になんでもすると言ってはいけないんだ？」

小首を傾げるレン。……いや、お前まさか。

「なあ、レン、子供がどうやってできるか知ってるか？」

ゴフッ！ と噴き出す箒。

「い、一夏、お、おま、お前！ なにを聞いてるんだ！？」

俺の首を掴んで揺さぶる箒。いや苦しい、苦しいです。

「なにをしている篠ノ之！？ なにをそんなに怒っている！？」

レン は こんらん している。

カオスだ。

「女子に、こ、こど、もの作り方を聞くなど、貴様はいつ変態になったのだ！？」

「ま、待て箒、わけ、わけがあるんだ」

「篠ノ之！ 織斑もこう言ってるんだ、話を聞いてやれ！」

「む……わかった、話してみろ一夏」

や、やっと解放された……。さっきの説教が効いているのか割とあつさりだった。

「で、レン、子供はどうやってできる？」

「い・ち・か！？」

「待て箒！ とりあえずレンの答えを聞いてくれ！」

ついに木刀を持ち出した箒を慌てて制する。

「？ 子供はサンタクロースが届けるものだろう？」

予想斜め上だった。コウノトリが、という話ですらなかった。
箒も口をポカンと開けて呆然としている。

「？」

なにに驚いているか全く理解していない顔だった。無邪気に首な
んか傾げている。「明らかにオーバークだ…… サンタ協会は
なにをやっているんだ」とか呟いてんな。どんな協会なんだよ……
…。というか、なんか、こう――

――汚しなくなる。

この新雪のように純粹無垢な、まっさらにキレイなレンにどうや
って子供ができるのか、その体に直接刻み込んでやりたい。嫌がる
レンを拘束して閉じ込めて、無理やり犯して、注ぎ込んで俺の――

（俺はいつから変態になった！？）

いくらなんでも思考が危なすぎないか！？ なんか世界の意思《
作者のお茶目》に言わされたような……。『ヤンデレ一夏とか
面白いかも』ってなんの電波だ！？

「し、しかしおおお、おし倒すとか色情狂とか！」

顔を真っ赤にするぐらいなら最初から言わなければいいんじゃない
か箒？

「？ 押し倒すのはセックスをするためだろう？」

その見た目と声で平然とセックスとか言うの止めてくれませんか
ねえ！？

「知っているぞ、男女一組でやるスポーツだろう」

『……………え？』

ハモる俺と箒。得意気に続けるレン。

「基本的に夜、ベッドで、好き合う者同士がやるもので、場所や時間、相手を弁えない者を色情狂と呼ぶのだろう？」

あれだけ謝ってくれたんだ、織斑はそういう類ではないんだろう？
そうあっさり続けるレン。警戒心薄すぎるだろう……………。

質問の意図がわからず首を傾げ続けるレン。遠い目をする箒。

結論、レンは天然だ。

七話 「あれ、意外とへっぽこ……………」？」 幕

あ、そうだ。

「レン、俺にISのことを教えてくれないか？」

「ん？ ああ、了解した」

平然と返すレン。ですよねー、そんな急に言われても困るよね——
——って。

『え？』

「？ どうした、そんなアホ面晒して」

あ、なんか久しぶりにレンの毒舌を聞いた気がする。

「い、いやさ、言い出した俺が聞くのもアレだけどさ、いいのか？
俺、ISについては完全に初心者だからすごく迷惑かけると思うぞ？」

「何を言っているんだ、織斑？ 今日の授業、誰のおかげで乗り切れたと思うてる？」

うっ。

「貴様がどうしようもない劣等生であることなど百も承知だ。現在このIS学園に通う生徒で最も学力が低いのは間違いなく貴様だぞ？ 自覚しているのか、織斑」

レンの容赦ない口撃。一夏は157ポイントのダメージを負った。

「……………はつきり言って、馬鹿のために割いてやる時間など持ち合わせていないのだから」

あ、一瞬の躊躇いもなく馬鹿と断言された。いや劣等生とか色々言われたから今更だけどさ。

「えーと、たしかレンは馬鹿が嫌いだって言ってなかったか？」

恐る恐る聞いてみる。

「ああ、大嫌いだ」

……………俺、嫌われてる？

「だから僕は、馬鹿であることを自覚し、改善するために努力する者は好きだ」

へ？

「短い期間で出来るだけのことはしたのだろう？ でなければ、渡したノートも無駄になっていたはずだ。真剣に授業を聞いていたようだしな」

「あ、ああ、そりゃまあ」

そもそもスタートラインにも立ってない状態だったからな。置いていかれないように頑張りはしたが……………結局間に合わなかったし

なあ。

「織斑が馬鹿であることを免罪符に開き直るか、馬鹿であることを自覚しないような輩であれば見捨てたのだから。……………第一、織斑を多少なりとも認めているから僕の名前を呼ぶことを咎めないんだ。でなければ今頃魚の餌にしている」

普通は名字からだろう、なんてばやくレン。ってあれ！？ いつの間に俺はレンを呼び捨てにしていたんだ！？ 心の中で呼ぶだけだったのに……………。というかブツブツと死体の処理法を検討しないでほしいんだが……………。ま、まあ認められているのは喜ばしいことだよな、うん。

……………レンだけは怒らせないようにしよう。

「それに、織斑が急いでISについて学ばなければならない原因の一つを作ったのは僕だからな」

「は？」

「あの自称・誇り高き貴族（笑）が、織斑に決闘を申し込んだのは僕のせいだ。完全に巻き込んだ形になってしまった……………申し訳ない。代わりにもならないが、これから先の学園生活、協力は惜しまない」

な、なんかさっき吹っ切ったように見えて必要以上に滅茶苦茶気に病んでませんか？ あれはほとんど俺とセシリアの問題だろ。

「本当に……………初日から、迷惑ばかり……………僕は……………なにをやって……………死にたい」

鬱来ました——！ 自分の言葉でダメージ食らってネガティブに！？ なんかもう最初の傲岸不遜というか冷徹というか、他人を拒絶するような鋭い雰囲気、ザ・孤高みたいな印象が丸ごと吹き飛んだ！ ファーストコンタクトからこんな短期間でイメージがここまで変わる人もそういないんじゃないかなあ！？

「し、死にたいとかそんな簡単に口に出すものではないぞ……………」

箒もイメージとの落差がすごいのか冷や汗を流している。
ギャップ

……………うん、さすがにネガティブレンは安易に可愛いなんて騒げない程の危うさがあるもんな。いや、普通に可愛いんだけどそんなこと言えないぐらいに雰囲気が暗い。

「……………あ、ああ、すまない、また自分の世界に入ってしまった」

憔悴したように呟くレン。目は虚ろ。露骨に落ち込んでいる。

なんかもうこの子、実はとても面倒でへっぽこなんじゃなからうか？ 普段は強がってるだけで。

「……………っと、すまない、少し取り乱したな。安心してくれ、微力ながら全力で織斑に協力することを約束しよう」

「あ、ああ、サンキュ」

いきなりキリツと表情を引き締めて宣言。確かにカッコイイけど、さっきのすでにカリスマブレイクしてるぞ？

「では僕は部屋に戻る、部屋は隣だから用があれば来てくれ。……………できれば今すぐにでも織斑にISの知識を叩き込みたいぐらいだ

が、まだやることがあるだろう？」

『?』

「年頃の異性が同じ部屋で暮らすんだ、相談するべきことはたくさんある。まあ今日中に決めて、明日からは特訓に集中できるようにしておいてくれ」

あ、そっか。なにせ俺と篤は今日から一緒に暮らすんだもんな。

「そ、そっか、一夏、お前が私の同居人だというのか？」

「あ、ああ、らしいな」

騒動の原因を思い出したのか、きまづそうに尋ねてくる篤。む、しおらしくしているとやけに可愛く見えるな。

「な、なんだその煮え切らない返事は！ だいたい男女七歳にして同衾せず！ おかしいだろ！？」

顔を真っ赤にして怒鳴りつけてくる。うん、七歳云々はともかく普通十五の男女が同居はまずいよなあ、世間的にも常識的にも。

「お、お、お……お前から、希望したのか？ 私と、その……同居したいと」

いや、さすがにそれは。

「たしかに俺は思春期の男子高校生だけど、そこまで常識を無くしたつもりはないぞ？」

まあISの常識をぶち壊して今ここにいるわけだが。

そして気まずそうなレン。可哀想に、話を遮られたせいで部屋に戻るとまで言っておきながら部屋から出るタイミングを逃して硬直、しかもだいぶプライバシーなことを話そうとしている空間で、気づいてやろうぜ箒？　レンがまた涙目になっているぞ？

「で、ではなぜこんな部屋割りに！」

「なんか政府の命令だとか」

「変えてもらえばいいだろう！？　言い出さなかったのか！？」

いや、そりゃあ。

「寮長が……千冬姉だからなあ」

遙か彼方を見つめて呟く。

「……………」

箒も遠いどこかを見つめている。

「……………」

レンも呆けてる。多分どうすればいいのかわからなくなって混乱してるんだろっとな、へっぽこだし。

「千冬姉に……………文句なんて言えないよなあ」

力無く頷く箒。コソコソと脱出しようとするレン。黄昏る俺。
ボタン、というドアの閉まる音をきっかけに覚醒した俺達は、同
居するうえでの決まり事を相談し始めた。
なぜかやけに赤かった箒の顔が印象的だった。

そんなこんなで一時間後。

一通り決め事を確認して時間が出来たのでレンの部屋を訪ねてい
る。いや別に変な思惑なんてナイデスヨ？ たちよつとどんな部
屋か気になったのと、もし準備ができているなら軽くこれからの勉
強予定について聞きたいなあ、なんて思ったからだ。

……………なんで疑わしげなんだよ。俺はロリコンじゃねえ！

「どうしたんだ、一夏？ さっきからブツブツと」

ちなみに箒もいる。

「気にすんな、なんでもない」

また変な電波を受信しただけだ。

「そ、そうか……………」

若干引いてる箒。はて、なぜだ？
そんなことを言ってる内に到着。まあ隣だからすぐなんだが。
それでは、ノックを。

「人の部屋の前で何をブツブツと言っているんだ？ 変質者が貴様
は」

する前にドアを開けて俺を睨めつけるレン。

どうでもいいけどさ、ノックしようとした手がドアにはねられて
そこそこ痛いんですが？

「勉強？ 一応簡単なテキストを制作している途中だが……見て
いくか？」

涙目になっている内に簿が説明してくれたみたいだけど、少しく
らい心配してくれませんか？ 結構凄い音したんだぜ。

「そこまではさすがに…… ルームメイトもいるだろ？ 元々今日
はどう進めていくかを聞きに来ただけだしな」

簿も頷いて賛同の意を示している。さすがに見ず知らずの男を共
同部屋に上がり込ませる訳にはいかないもんな。ん？ なぜそんな
微妙な顔してますか？

「それが、色々事情があるらしくてルームメイトはほとんど自宅か
ら通うそうだ。一応寮にも籍が置いているが実質僕の一人部屋でな、
多少その生徒の荷物はあるが遠慮はいらない」

うわ、羨ましい！

「といふかなんで俺をその部屋にしてくれなかったんだろ？……」

「織斑の入寮は急に決まったのだから仕方ないんじゃないか？ 第
一その生徒は織斑と面識がない、寮に泊まらないという確約がない

以上、万一の事を考えて幼馴染みに押し付けたのだろう」

俺はババ扱いですかそうですか。

「まあいい、立ち話もなんだから入れ。お茶も出せないがゆっくりしていけ」

もう少し警戒心持とうぜ、レン。女子から積極的に自室に招き入れるとか危ないなあ。

ん？

「これがテキストか？」

二、三箱の未開封のダンボールを除いて唯一この部屋に置かれているモノ。机の上にある開かれたノートパソコンの画面にはISについての問題が綴られている。

「今日の内に作成して明日プリントしようと思ってな。だいたいは終わったが、どうだ？」

「ああ、俺のレベルに合わせて作ってくれてるみたいだな、サンキュー」

マジでちょうど理解しているギリギリのレベルで作られてる。ホントすげえな、レン。

「そうだろう？ まあこれに教科書などを絡めてやるから期待している」

満足げに無い胸を張るレン、少し眠そうだ。

荷解きもせずにつてくれたんだな……これは、マジで頑張らないとな。

七話 「あれ、意外とへっぽこ……………」？ 幕（後書き）

そろそろクオリティが誤魔化せないレベルに……………。

連続二話更新は今日で終了です、なんと昨日11時時点、つまり丸二日でPV10000及びアクセス10000を突破しましたし、お気に入り登録も20を越えました。

読んでくださり本当にありがとうございます。

アタリメさん、ナタナタさん、あきふゆさん、こうりさん、切人さん、感想ありがとうございます。

おかげでかつてないほどのモチベーション、スピードで執筆できました。難関だったセリア戦も指が進むこと進むこと。ニヤニヤしながら携帯をいじくってました。

未熟な作品ですが、これからも読んでいただけると嬉しいです。本当にありがとうございます。

八話 「そもそもこの学園からしてカオスだろうが」 レン

朝、寮の食堂で俺達を発見したレンの第一声。

「……………そんなに食うのか、お前ら」

大きく目を見開いて驚く。（見た目だけは）小動物チックで和む。

「いや、お前こそそれだけか？」

箒も驚愕を顔に貼り付けて問う。

ちなみに二人の献立。

・箒↓和食セット。ご飯、納豆、鮭（切り身）、味噌汁そして漬物。普通に一人前、俺もこれ。

・レン↓野菜ジュース（100%）。

「いや、レンそれは……………」

「な、なんだ？ まさか織斑まで僕がおかしいと言っのか！？」

おかしいとまでは言っていないが、とぼやく箒。

「僕はおかしくなんかないぞ！ 朝からそんなに食べる織斑達がおかしいんだ！」

なんで何も言っていないのに勝手に追い詰められているんだ？ と

りあえず落ち着け。

「す、すまない、取り乱した」

うん、なんであんなに取り乱したんだろうね。朝食にトラウマでもあるのか？

「ボクハフツウダボクハフツウダボクハフツウダボクハフツウダボクハフツウダ」

目がすんごくグルグルしてる。明らかに普通じゃないし、復活してない。

「って大丈夫かレン！？」

「クハフツウダボクハフツはっ！！　だ、大丈夫だ、問題ない」

野菜ジュースにシュガースティックをザラザラと投入しながらネタに走るレン。いやいや。

「問題しかないわっ！！」

キョトン顔。無意識なのかご丁寧にスプーンでしっかりとかき混ぜている。よく見たら目の焦点が若干合ってない。

うん、朝っぱらから相変わらずなざんね……………へっぼこ具合だ。

「！？……………（ゴクツゴクツゴクツ）……………」

首を傾げつつ野菜ジュース（リンディ仕様）を一気に口に含む↓

ザ・ワールド！ 時は止まる↓顔色七変化↓そして時は動き出す↓
涙目になりながらも口の中身をゆっくりと嚥下する↓無言でつつぶ
す。さすが、知り合ったその日にへっぽこ認定させただけのことは
ある。

ちなみに箒はレンが（ハムスターのごとく）頬張るように口に野
菜ジュースを含んだ辺りから目を輝かせて携帯で動画を撮っていた。
涙目になったレンを見て鼻を押さえていたのは……………色々と俺の中
の幼馴染み（ファースト）像が崩壊しそうなので深く考えないよう
にしておく。

「……………大丈夫か、レン？」

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ。

「……………っ！……………っ！」

箒、タレてるレンに悶えてないでそろそろ戻ってこい。

そんな俺達を見て、声をかけるのを断念した三人娘の姿があった
そうな。ちなみに周りの喧騒は二人のおかげ（笑）で全く意識しな
かった。

それから、なんか寮長だった千冬姉に急かされたり、いつの間に
かレンが毒舌モードに戻ってたり、山田先生が俺的にちよつとアレ
な話題を出してレンに冷ややかな視線を送られたり、山田先生が生

徒達にからかわれたり、それをレンに鼻で笑われて落ち込んだり（男女云々ではなく授業もマトモに進められないことに失望したらしい）、正直者を目指して叩かれたり、衝撃の新事実（らしい、俺モルモット化のお知らせ）が発覚して騒ぎになったり、箒がキレたり……とイベント盛り沢山の午前だった。

……山田先生、強く生きてください。

んで、なんやかんやで午後（昼休み）、俺はセシリアに絡まれてたりする。↑今ココ！

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようと思ってたのかと」

まあ、そのつもりだったけど。わざわざどうでもいいことを言いに来てレンの機嫌を損ねないでくれないかなあ。

ほら、セシリアが視界に入った瞬間表情歪んだし。

「まあ？　一応勝負は見えてますけど？　決闘ですしフェアにいきませんと」

あの、レンが「専門分野で素人に喧嘩ふっかけといてフェア？　嘲笑われないのかこの低脳ドリルもどき」とか呟いてますよ？　だが全く気づかないセシリア、レンとは違った形で残念な……もといへっばこな奴な気がする。

「なにせ私はイギリスの代表候補生……つまり専用機持ちですから！」

フル・ティアーズ
「第三世代兵装BTの実働データを取るために専用機を与えられるだけだろう、何を勘違いしているんだ？」

当然のごとくなぜかセシリアには届かないレンの呟き。

「聞いてますのアナタ!？」

机に体を預けるようにして伏せながらジト目でセシリアを睨みつけるレン……をハアハアしながらデジタルカメラで撮影する篤。……目を覚ませとかそのデジカメどこから持ってきたとか撮影されてることに気づけとか言いたいことはたくさんある、が、とりあえず一言。

「なにこのカオス」

まとめるとこうなる。

唯一の男子生徒に絡む、というか一方的にまくし立てる金髪ドルの女子生徒（偉そう）。

朝の件が尾を引いてるのがグデーっとしながらも女子生徒（偉そう）をジト目で睨んで小声で罵倒を繰り返す隣の席の女子生徒（メガネ幼女）。

グデーっとしている女子生徒（メガネ幼女）に興奮するあまり、鼻から情熱を垂れ流しつつ陰から撮影する幼馴染みな女子生徒（凛々しいポニテ）。

取り囲むように周囲に集まる無数の女子達（主にモブ）。

「なにこのカオス」

大事なことは二回言いました。

「よし、篤、レン、飯食いに行こうぜ」

あっちでいつの間にか一人語りを始めているおぜうさまはスルー

の方向で。きっとその方がみんな幸せ。

「

.....
へっ？ あっ、私か？ いや、私は、いい」

反応が遅かったのは、きっとデジカメの中身を確認してたからだろうな。

「まあそう言うなって。行こうぜ、ほら。.....編集は後でもできるだろう（ボソッ）」

「なっ、なにを言っているんだ一夏！？ 私は行かないと「なんならおぶってやろうか？」！？」

顔を真っ赤にした簪の肩に手を置くおっ！？

反転。

掴まれた腕と、視界に映るあべこべな世界、浮遊感が俺に状況を教えてくれる。

とりあえず取られた腕を捻って外し、空中で体勢を立て直す。足を下に、頭を上にと微調整をしつつも着地の準備を整えて——
——レンを押し倒した。

「あうっ！」

「うおっ！？ レ、レン、大丈夫か！？」

「いつ、一夏っ！」

な、なにがどうなってんだ？ 俺は確かに着地体勢を整えていた

はずなのに、いきなり目の前にレンが飛び出してきて……………まさか。

「いつ、つー……………織斑、そろそろ退いてくれないか？」

「なあ、レン、今何をしようとした？」

「は？ 何の話した？」

「しらばつくれるなよ……………今、俺を助けようとしただろ？」

「？ 何を言っているんだ織斑、恥ずかしい話だが、立ち上がるときに足を引っ掛けてしまったただけだぞ？」

……………まあ、いつか。とりあえず立ち上がり、手を差し伸べる。

「いや、なんでもない……………ただの思い違いだったみたいだ」

さて、それでは。

「飯食いに行こうぜ、二人とも」

「あ、ああ……………」

しょんぼりしてる筈。まあさっきのことは気にすんな、武道家の性だ。俺は気にしない。

「わかった、食堂か？」

そしてお前は少し気にしようぜ？ 仮にも男に押し倒された直後だぞ？ ………………信用されてんのは嬉しいけどさ。

俺らin学食。

思わずラピュタ王の名言を言いたくなるくらいに人が溢れてる。

「箒、何でも食うよなお前」

「人を食いしん坊みたいに言うな！」

「日替わり買ったからそれでいいな？ レンは「もう買った、問題ない」…………早いな」

なんて会話を繰り返して間にすでに食券をカウンターに。ちなみに箒は展開について行けず軽くパニックだ。

「ええい、頼んでもいないのに次から次へと！ くっ、早く写真を編集しなければならぬというのに！」

隠してるつもりなのか最後の方だけ小声だったけどバツチり聞こえてるぞ、箒。

「む、織斑。じゃれ合うのは後にしろ、定食が来ている」

肝心のレンにはなぜか聞こえてないけどな！

「お、うまそうじゃん。ありがとう、おばちゃん」

「うまそう、じゃない。うまいんだよ」

輝くおばちゃんスマイル。

「どこかテーブル空いてないか？」

「あっちが空いているだろうが、もっとよく見てから言え」

「はいよ。………箸、いつまでも拗ねてないでさっさと行くぞ」

「編集………」

戻ってこい箸、色んな意味で。

九話 「いったい二人は何をやってるのかなあ!？」 のほほん(前書き)

おはようございます、通りすがり1です。

今話は、一夏が魔改造されている話です。苦手な方はご注意ください。
さい。

自分でも読んでいて首を捻ることがある内容ですが、目を通して
いただければ幸いです。

九話 「いたい二人は何をやってるのかなあ!？」 のほほん

で、だ。

「結局、レンは何を頼んだんだ?」

「見てわからんのか? …………… まさか、本当に目が悪かったりするのか?」

若干気まずそうに聞いてくるレン。いやいやそうじゃなくてさ。

「いや、むしろそうであってほしいというか、自分の目を疑っているんだが…………」

「は? 何を言っているんだ?」

「いや、だってさレン」

そのトレイの上に乗ってるのは。

「どう見てもトーストだよな?」

しかもたった一枚。あとは少量のジャムのみだ。

「貴様の目は節穴で確定のようだな」

「え?」

「ちゃんと紅茶も付いているぞ」

限りなくどうでもいいところだった。

「いい加減食事を始めないか？ 時間がなくなる」

なんだ箒、ヤケに元気じゃないか？

「それもそうだな、食べるぞ織斑。いただきます」

『いただきます』

言うやいなやトーストを両手で掴みハムハムとかじり始めるレン。

「ほわぁ……………」

おk、把握。

ツッコむのも疲れたから一言だけ。

「授業に遅れても知らんぞ、箒」

結局、授業にはギリギリで間に合った。他にも先輩が話しかけてきたりなどしたが概ね平和だった。

「ハア、ハア、ハア……………」

「どうした、箒、もう終わりか？」

自然体で構える目の前の幼馴染みが問いを投げかける。

ここは剣道場で、今は放課後。私が一夏をここに連れてきた。確かにISの知識も必要だが、決闘をするなら実戦経験も必要だと、工藤とも意見が一致したからだ。

中学の時、剣道関連で一夏の名を聞かなかったことから剣道部に所属していなかったことは容易に推察できる。もし大会などに出れば、間違いなく全国大会で優勝していたと断言できるだけの實力を一夏は小学四年生、つまり私が転校する時点で持っていた。

一夏が私に初めて勝ったのは、道場に通い始めてから半月が過ぎた頃。基礎を学び、形になったとはいえ、今まで身体を鍛えることすらしていなかった少年が、当時の私を負かしたのだ。

私は強い。剣においては、だが。才はあるし、小さな頃から剣を振り続けてきた自負もある、現在では全国大会で優勝したという実績まで残している。客観的に見て同年代の女子の中に剣で私に勝てる者は、少なくとも国内にはいない。間違いなく私の剣の才はずば抜けていると言っている、悲しいことにそれ以外に誇れるような才は無いが。

だが、一夏は別格だった。

圧倒的な才覚。どこか姉さんにも通じるような、文字通り天に才を与えられたら存在——天才。指南していた父さんはもちろん、姉さんや千冬さんまで驚愕させるほどのソレを、一夏は持っていた。

一を聞いて十を知り、百の思考を元に千の仮説を立て、その全てを己の糧にする。

そうとしか言いような無い、驚異的な学習能力に思考力。膨大な知識と数多の思考により、ついには一つの流派を立ち上げ

ることすら可能とするほどの開発力。

鍛えれば鍛えるほど、応えるように上がり続ける身体能力。

あらゆる分野に及ぶ才能。

超能力かと疑うほどに鋭い勘。

それを支えているであろう演算能力。

語り始めれば止まらないであろうほどの、比べることすら馬鹿らしくなるような天【災】。

姉さんの話では、流石に姉さんには及ばないものの、それに近いレベルの技術者としての才能を持っているらしい（曰わく、姉さんが育てれば辛うじて対等の共同開発者になれるほど、だそうだ）。本領は違う所にあるという話なのに。総合力で見れば、姉さんを含めても間違いない世界で最高の天才だと言う（少なくとも私はいくん以上の天才を見たことがない、だそうだ）。ちなみに興味のないことにはその才は、一般的に天才と呼ばれる程度にしか発揮されない。

それだけの才を持ちながら、一夏は姉さんのように人格破綻もしていない、所謂普通（と言うには大分格好良すぎるが）の男と言える。

「どうもいつくんは自分の才能を『特別』ではなく『個性』として捉えてるみたいだね」

と、あの姉さんを持つてして呆れさせていたが。

そんな天才を、倒せるかもしれない。

三年間。あるいは私達が引越してから五年間。一夏がその間剣に携わることがなければ、もし小学四年生の時点《あの頃》の一夏のままなら勝てるかも知れない（腕が衰えてとは思えない、仮に衰えていてもすぐに思い出すだろう）。そう考え、これが千載一遇のチャンスであることを理解した。

その結果がこれだよ！

コホン。実は、今私は思わずキャラがブレてしまいうくらい焦っている。

「ハア、ハア……ちゃんと、剣道、を、続けて、いた、みたい、だな！」

手合わせ開始から三分。振った竹刀はことごとく避けられ捌かれ弾かれと竹刀以外には悲しくなるくらい当たらず、ふと気を逸らした時油断した時気を張り詰めすぎた時に情けなくなるくらいに打ち込まれている。何本取られたかは覚えていない、開始三十秒で七本取られた辺りからカウントしていない。する余裕も無い。対する一夏は忌々しいことに、打撃の瞬間に手を弛ませて衝撃を逃がす程度には余裕がある。

「おう、ちょうど色々煮詰まってたから我流に切り替えて自主練習してたんだ。部活は入らなかったけどな」

それはまあ、一夏だったら部活なんか入った方が効率悪いだろうさ。なぜ気づかなかった、私。自分を客観的に見ることの出来る一夏なら、悪い癖もつかないだろうしな。

「箒もかなり強くなったな、見違えたぞ。さすがは全国大会優勝者と言ったところか？」

どの口が言うか、どの口が！ しかもこの試合、一夏は性質の悪いことに持ち前の身体能力は一切使わず、私とほぼ全く同じ身体能力で戦っている。つまり現在劣勢であるということは、完全に技術で負けていることを意味する。

「それ、を、あつさり、下す、お前、は、なん、なん、だ！」

疲労困憊、床に倒れ伏す。ああ、悔しいなあ。

「なんせ俺は、織斑千冬の弟だからな。千冬姉が誇れるぐらい強くないと」

苦笑しつつ、私に手を差し伸べる。大きな手、小さい頃とは違う手だ。一緒に成長していけなかった空白の期間を、少し寂しく思いつつも手を取る。

「まあ、今日はここまでにしようぜ？ レンも待ってるし、篁も疲れただろ？」

私の息が整ったのを見て、一夏が声をかける。

「む、だがまだ十分も……」

「無理をしても仕方ないだろ？ 久々に試合も出来たから勘も大分戻ったし、最後の小手は少し強く打ちすぎた、痛むだろ？」

心配そうに私の顔を覗き込む一夏。端正な顔が至近距離まで近づいてきたせいで、顔が真っ赤になるのが自分でもわかる。

嗚呼、これだから。

私は一夏に恋をしている。端正な顔立ちをしているからではない。強いからでもない。ましてや、天才だからなどでは絶対でない（むしろ私は天才というものは苦手だ）。

優しくて、かつこいいからだ。『かつこいい』というのは外見を指して言ってる訳ではない。勿論一夏は外見もかつこいいが、そういう話ではない。一夏は『これ』と決めたことを必ずやり通そうとする、信念のようなものがある。例え、どんな結果になろうと一歩も退こうとはしない。そんな姿に恋をした。……まあ、前述した特徴が好ましいものであることも事実だが。

そんな『かつこよさ』と、信念を貫きながらも決して変わらない優しさが、私は好きなんだ。

「ああ、そうだな。久しぶりだというのに最初から激しすぎるぞ？ おかげでたった数分でくたくただし、少々痛かった」

「悪かった。あまりに久しぶりだったから加減がわからなくて……。それに、さ、やっぱり楽しかったから」

「そうか、なら、いい」

「サンキュ、箒。あ、だけど箒も悪いんだぜ？ 挑発なんかしてくるから」

挑発？ ああ、そういえば鈍ってないか試してやるとか言ってしまったな。

「し、仕方ないだろ？ せっかくの数少ないチャンスだったんだ、私だって一夏と闘^やりたかったんだ」

「はは、そいつは光栄だな。つと、箒、ドロドロじゃないか、シャワーで流してきたらどうだ？」

「言われなくとも。というかそうなるまで私を動かしたのは一夏だ

ろっ?」

汗で胴着がびしょ濡れだ。

「だからさっきから謝ってるだろ? そろそろ部屋に戻ろっぜ」

「ああ、ではまた後でな?」

踵を返し、更衣室に向かう。早くシャワーを浴びたいものだ。

それはそうと、道場から出た所で顔を真っ赤にしたクラスメイト
三人とすれ違ったのだが……風邪でも引いたのか?

九話 「いつたい二人は何をやってるのかなあ!？」 のほほん(後書き)

五日間連続でこんにちは、通りすがり1です。

以前言っていた通り、連続二話更新は昨日で終わりましたが、作者のモチベーション上昇の影響でビックリするほど早く執筆できたので行けるところまで連続更新してみようと思います。

ここからは人によっては好き嫌いが大きいかもしれませんが、見捨てずにアドバイスしていただければ嬉しいです。

それでは、失礼します。

十話 「この可愛い生物、持ち帰っていいか？」 幕（前書き）

やっとセシリア戦ですね…………。

あと二話くらいセシリア戦なんですが、なんで一巻の半分までで十二話も使ってるんでしょうか？

十話 「この可愛い生物、持ち帰っていいか？」 幕

一週間が過ぎた。

早い。しっかりと七日たったはずなのにやけに早く感じる。そう、例えるならページを一枚捲る程度の時間しか経っていないような……。

「何を呆けている織斑、痴呆症には少しばかり早いぞ？」

「む、俺は健康には気を使っているぞ！ 生涯ボケるつもりはないっ！」

「そんな無駄口を叩いている暇があるなら準備でもしている、劣等生」

お前が一週間みっちりスパルタで叩き込んでくださったお陰で劣等生は脱したわ！ この一週間放課後は箒と三十分ほど稽古をしてから日付が変わるまで（飯と風呂を除き）ひたすら勉強だったからな！

……………というか。

「準備もなにも、そもそも機体がないんだがなにをしろと」

目を逸らしてんじゃねえ！

「落ち着け一夏、焦るのもわかるがとりあえず落ち着け！」

いや、そりゃわかってるんだが……………もうすでに対戦相手が出撃している（……………）のに、まだ機体が

届いてもいない（……………）んじゃ焦っちまうのも仕方ないだろ？

そして更に数分が過ぎる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………こないな」

「……………打鉄を準備してくる、いざとなったらそっちを使え」

レン退場。

「……………」

「……………」

沈黙。

『まだですよ！？ 私もう二十分はこの広いドームで独りですわよ！？ いい加減待ちくたびれましたわ！ というか皆さんの「うわあ、あの子約束すっぱかされてるよ、かわいそう……………」みたいな視線が本格的にいたたまれなくなってきたので本当に早く来るか棄権するかしてくださいませんか！？』

オープンチャンネルを通してセシリアの悲痛な叫びが木霊する。

「……………」

「……………」

…………… すまんセシリア、さすがに申し訳ない。

それでもまだ待つてくれているセシリアに謝罪と感謝の念を捧げ、
ついでに評価を上方修正しつつもレンが打鉄を持ってきてくれたら
すぐに出撃しようとセシリアの縦ロールドリルと不幸に誓った。
そんな時だった。

「お、織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君
っ！」

「怖っ！」

何事！？ ヤンデレ！？

「お、織斑君専用のISが届きました！」

あ、よかった、山田先生だった。

「って、マジですか！？」

「はい！ 遅くなっちゃいましたけどついさっき」

「そういうことだ、さっさと用意しろ。アリーナの使用時間は限ら
れている。……………さすがに不憫だしな」

いつの間にいらっしやりまするか、千冬姉もとい織斑先生。そし
てやっぱり不憫に見えますよね、セシリア。

「いいから早くしろ、織斑」

鈍い音と共に搬入口が開く。

——そこに、『白』が、いた。

純白。いつかどこかで見た■■の白のような、無垢な輝き。

「織斑君専用IS『白式』です！」

山田先生の言葉も耳に入らずフラフラと白式に近づき、触れる。まるで、唯一無二の相棒と再会したような不思議な錯覚を覚える。

そして、理解した。

身体を背から投げ出すように預ける。瞬間、白式が纏わりつくように装着される。まるでかつて失った半身を取り戻したかと思うほどの一体感。

俺だけの、俺のための剣。これで俺は、戦える。何が相手だろうと、戦ってみせる。

世界が一変する。

五感が拡張される、認識できる世界の情報量が跳ね上がる。そして、それを掌握する。

湧き上がる万能感。そしてそれをも支配する。白式の状態をチェック………なんだこれは？ 機体の設定に無駄が多い。とりあえずそれらが必要最小限のエネルギーで稼働できるように設定し直す。

………これでよし、あとは——

「そこまでにしろ、織斑」

ん？ 千冬姉？

「どうしたんだ？」

呆れたように溜め息を吐く千冬姉。マジでどうしたんだ？

「一夏、お前試合のこと忘れてるだろう」

.....

.....

.....

.....

..... ああ！

「何言ってるのさ千冬姉、そんな大事なこと忘れるわけないだろ？」

当たり前じゃないかH A H A H A！

「行ってやれ、本当に哀れだ」

そう言っ指差すのはモニター。映し出されるは誉れ高きイギリスの代表候補生。何かを諦めたような虚ろな目が煌びやかな金髪と見事にミスマッチしている。

「.....」

「.....」

「.....」

「……………」

「……………行ってきます」

「ああ、そうし「織斑！ 打鉄を持ってきたぞ！」……………」

いつも二つに折って首のあたりで留めていた髪を振り乱し、常に表情のない顔には汗を流して紅潮させて、小さな身体を目一杯に使って、息を切らせながらも第二世代IS打鉄を台車に載せて、レンが転がり込んできた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「ハア、ハア、ハア。ど、どうした、織斑。も、持って、きたぞ」

膝に手を当て、荒い息を整えながらも問いかけてくるその姿は、紛れもなく全力疾走したあとのそれだった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

気まずい空気が流れる。……………どうしよう、こんなにも必死に、全力で俺のために頑張ってくれたレンに「サンキュー。でも専用機来たから別に使わないわそれ、ありがとなH A H A H A!」なんて言えないよなあ……………。

「織斑、早く準備を、しなければ、間に合わない、ぞ」

まだ整わない息の中から飛び出たのは優しい善意。冷や汗と罪悪感が止まらない。

「織斑、本当にどうし」

レンが顔を上げた。俺達の顔は今引きつっていることだろう。レンの顔が少しずつ怒りの色に染まっていく。

「なにをしている！ 準備ができているならさっさと行けノロマ!」

……………は？

「お、怒ってないのか?」

「今まさに怒っているのが見えないのか貴様は……………」

レンはいかりのボルテージがあがった!

「いや、そうじゃなくてさ。レンがそんなになってまで打鉄を運んでくれたのに」

「鳥頭が貴様は、さつき言ったばかりだが打鉄はいざというときの
ために持ってきたんだ。専用機が来て準備ができているのならそれ
に越したことはない」

普通は頭でわかっていてもやさぐれるものだけだな……………やっぱ
レンは良い奴だな。

「さっさと行けノロマ」

「あいよ……………千冬姉、箒、レン、行ってくる」

ピットゲートに進む。

「行つてこい」

「あ……………ああ、勝てよ」

「むしろ逃げ」

「あれ、私は!?!」

忘れてました。

「織斑一夏、白式！ 出撃するぜ!」

大空へと、舞い上がる。

その頃のピット。

「頑張つて、運んだんだがな……………」

「ハア！ ハア！ ハア！（訳：しょんぼりするレン可愛い！）」
特に意味はない。

「！……………あら、逃げずにきましたのね」

セシリアの顔が輝いている。……………本当にすまないことをしたと思う。

「悪い、遅れたな」

「ええ……………ほんっ、とうに！」

「すまん、言い訳はしない」

「……………まあ、いいですわ」

まだ多少不満そうだが誠意は伝わったみたいで少し機嫌が直った。
「最後のチャンスをあげますわ……………と本来なら言っていたでしょ

うけど、あいにく今はそんな気分ではありませんの」

セシリアの機体『ブルー・ティアーズ』。その名の通りに蒼い機体だ。

手に二メートルを越す長大なレーザーライフルを持ち、特殊武装『ブルー・ティアーズ』を有する第三世代型IS。

そんな情報が白式から送られてくる。………まだ初期化も最適化^{インク}処理も終わってないんだからそっちに専念しろや。

「ボロボロにして差し上げますわ！　というか痛めつけます！　主に私のストレス解消のために！」

納得はできるもののだいぶアレな事を叫ぶと同時にライフル『スターライトmk?』を俺に向け、発砲。

白式から事前に送られていた情報から予測していた俺は身体を傾ける。

紙一重。シールドエネルギーの膜スレスレの位置を光が薙払う。

「おいおい、いくらなんでも俺をナメすぎじゃ」

走る悪寒を感じて緊急回避。身体を倒して加速、この場を離脱する。

四閃。一瞬前まで俺が居た場所をレーザーが駆け抜ける。回避しなければちょうど両目に喉、心臓をそれぞれ撃ち抜くような軌跡を描いている。

ISの防御機構上、どこを撃つてもシールドエネルギーの消費量に大きな差はない。そのため、基本的にISでの戦闘においては回避が難しい部位を狙うのがセオリーだ。代表候補生であるセシリアがそれを知らないとは思えない。

タラリと冷や汗が流れる。恐る恐るセシリアの顔を見る。

「さんざん待たせてくださいましたわねとか同情の視線がいたたまれなかったとか独りであのド真ん中に放置はないですわとか言いたいことは星の数ほどありますけど……………」

あえてそこを狙ったということはつまり……………殺る気だという意思表示。という考えも浮かばないくらい殺意に溢れてんな、あの様子だと。しかもそれでいて思考は冷静に、いかに効率的に俺を狩るかをシュミレーションし続けていることだろう。

「いまだかつてない屈辱を味合わせてくださいましたし、まあ一言で言いますと……………」

極めつけはあの目。アレは……………

「ぶちころしますわ！」

阿修羅すら凌駕しかねないほどの怒気を放っている！

これが……………

これが……………代表候補生というものか！

アレと一緒にするな！ そんな全世界の代表候補生の声が聞こえた気がした。

十一話 「これが英国代表候補生セシリア・オルコット、そしてブルー・ティア

もう一話投稿！

いえ、セシリア戦をもう少し進めたいのと実は小田急が止まって
暇なんです。

不純な理由ですが、楽しんでくれれば幸いです。

十一話 「これが英国代表候補生セシリア・オルコット、そしてブルー・ティア

回避。それに徹する。

正直な話、問題ないと思っていた。知識面ではまだ追いついたとは言えないがIS学園生の平均程度にはなったし、ISを一度だけ動かした時、つまり入学試験では元代表候補生だという試験監督を下した。一般的な代表候補生の戦闘を映像資料で閲覧した時も脅威とは感じなかった。負けるとは思わなかった。

だが、だ。

「今の私は！ 今までの限界を凌駕する存在ですわ！」

縦横無尽に空を翔る五つの砲台から連携してリンチされるとも思わなかった。

「粉碎！ 玉砕！ 大喝采！ ですわ！」

「のわっ！？ ちょ、い、今！ 今、レーザー曲がったぞ！？」

レーザーの間の微かな隙間をかくぐっていたらその内の一本が、僅かだが曲線を描いた。なんとか避けはしたが、これを使いこなされたらさすがに避けきれぬ自信はない。どうやって避けたかって？ 空中でもマトリックスはできただけ言っておこうか。

今のところ被弾はしていないがそれも時間の問題だな。接近しようにも連携をとっているせいで迂闊に近づけば集中砲火を食らうのは目に見えている。

「言ったはずですよ、今の私は今までの限界を凌駕する存在だと！」

「色々越えすぎだ！ 偏向射撃^{フレキシブル}はB T最大稼働時にしか発現しないはずだろ！？」

「そんなもの《ISの常識》が！ 今の私に通じると思わないでくださいな！」

「J《常識で》K《考えろ》！」

「……………」

ピットの中、四人の女性は全員驚きを露わにしていた。

（オルコット……………データと違うな。拙いながらも偏向射撃まで使えるとはな）

（うわわわわわ！ お、織斑君すごい！ さすがは織斑先生の弟さんといったところですね！ それにしても……………オルコットさん、本当にあれで代表候補生？ 代表の間違いじゃないかな）

（い、一夏が押されている！？ と、というかセシリアに重なって見える修羅はいつたい……………？）

（あのくるくる頭、ただのバカだと思っていたがあれほどの素質を

持っていたか。なるほど、少なくとも努力を怠ってはいないようだな）

織斑一夏《主人公》よりも注目されるセシリア。今この時だけは、確実に主人公をも凌駕していた。

（しかし、これなら後三十秒だけ一夏に時間をやればよかったか？いくらあいつでも初期化や最適化処理どころか、OSの書き換えもせずにこの相手は少し厳しい。今の白式は燃費が向上しただけ、あいつの反応に追いつけないだろうしな）

そう、今この時だけ（……………）。

目の前を無数のモニターが流れていく。一つ一つに情報がびつとりと書き込まれたそれらを、俺は書き換える。

（動きが鈍い。機体が俺の反応速度に追いついてきていないのか！）

同時進行で雨霞とばかりに降り注いでくるレーザーを避けなければならぬのが少しばかり厳しいが、まあなんとかなるレベルだ。

（機体が追いつかないなら追いつくように設定すればいい。機体制御のスラスターからPICまでを完全マニュアルに設定。後は極限まで性能を使い切れるようなOSを作成しつつ白式のスペックを確認！）

唯一の武装である近接ブレード（形状は刀、名称未設定だったの
でなんとなく斬月に設定）を展開、二本のレーザーを刀身で弾き全
力で加速、セシリアとBTの包囲網から逃れる。

「やっと武器を展開しましたわね！やる気になってくださいまし
たの？」

「あいにくだが、まだ開店準備中でね！少しばかり踊ってからだ
な！」

「ならば私があなたのために鎮魂歌^{レクイエム}を奏でて差し上げますわ！華
々しく散りなさい！」

「だが断る！」

出力全開、アリーナの遮断シールドに張り付くようにして旋回す
る。包囲しようとセシリアとBTが追いかけてくるが機動性ではこ
ちらが上だ！背後から死神のように迫り来るレーザーを急制動と
急加速、バレルロールを始めとするアクロバティックな動きで回避、
物理的に逃げ場が塞がれた時は斬月（確定）でレーザーを切り払う。

（運動性能のデータは集まった。OSのインストールも終わった。
残念ながら初期化と最適化処理はまだだが）

今まで二つに分けて使い続けていた並列思考^{マルチタスク}（……………
……………）を完全に戦闘のような一つに統合。さあ！

「反撃開始と行こうかあ！」

急制動、PICを全開にして一瞬で停止しながらセシリアに振り

向く。

「！ 反撃などさせませんわよ！」

さすがに判断が速い。出だしを潰すつもりなのだろう、セシリアを中心に大きく円を成すように展開されたB Tが一齐にレーザーを放つ。

確かに、普通ならそれが最善手だ。真っ直ぐ斬りかかっていけば間違いなく被弾するし、多少軌道をズラして前進しても被弾する。偏向射撃があるならなおさらだ。確実に回避するためには横に大きく避けるか後退するしかないが、セシリアはまだ撃っていないライフルを構えているため後者を選択すれば撃ち抜かれるし、前者ではアリーナ中央にてB Tによる包囲網が再び完成する。

確実な回避方法はないし、回避を選んでも反撃の出鼻が挫かれて詰み。間違いなく最善手だった。

相手が普通なら、だけどな。

「甘いぜセシリア！」

イグニッション・ブースト

瞬時加速。スラスタから放出したエネルギーを一度取り込んで圧縮、再度放出することで爆発的な加速を得る技術だ。元ネタはきつと、デデデな大王を倒す球体戦士だな。

「そんな状態から瞬時加速を！？ 死ぬ気ですの！？」

もちろんだが、いくらISでも最高速で飛んでいる状態で正反対の方向に瞬時加速、つまりマリカというキノコを使ったりなんかしたら操縦者が無事なわけがない。高い機動性を持つならなおさらだ。白式の機動性なら俺以外がやったらまず間違いなく死ぬか、少なく

ともIS操縦者は続けられないだろうな。あ、千冬姉だけは例外、きっとどうにかする。

俺はついさっき機体の制御を完全にマニュアル化してある。過剰なほどの、文字通り出力の限界までPICを酷使して慣性を軽減、全身のスラスタもミリ単位で角度を調節して使用し、なんと通常の瞬時加速より少し大きいぐらいの負担で瞬時加速による180度ターンを実現した。………きっとセシリアには壁にぶつけたスーパーボールのような勢いで跳ね返ったように見えてただろうな。

何はともあれ作戦成功。偏向射撃も多少かった四つのレーザーのド真ん中をスレスレで通過、セシリアまで最短距離で一直線だ。

「なんですの！？ くっ、ですが瞬時加速中は直進しかできません！ まだスターライトが残ってますのよ！？」

真っ正面から迫り来るレーザー。だが甘いぜセシリア、完全にマニュアルで操作している俺なら！

「バレルロール！？ そんな、瞬時加速中にそんなことまで！」

ギリギリで回避成功。掠りはしたがスピードが落ちるほどではない。もう、目の前にいるセシリアにスターライトを撃つ時間は残されてない。これで！

「終わりだ！」

「まだです！ まだ終わっていませんわ！」

「なっ！？」

意表を突かれた。一言で言えばそうなるだろう。まさか、過剰な

ほどの運動エネルギーを持った近接格闘特化機を、遠距離特化機が近接武装で受け止めるとは思わなかった。

「くうっ！ 耐えて、インターセプター！」

衝突の余波だけでもずいぶんエネルギーが削られたというのに、景色が流れるほどのスピードで押され続けながらも決してセリアが手放さない一振りの剣。

業物ではない。そもそも完全に遠距離型のブルー・ティアーズは懐に入り込まれた時点で終わりなのだ。そんな機体の殆ど要らない子のような扱いの近接武装に余計な容量は割けない。

だが、斬月の一撃を受けて半ば両断されかけてもなお、インターセプターは折れない。

ドゴオッ！

白式は鏑迫り合いの体勢のまま、衰えてなお凄まじいスピードでブルー・ティアーズをアリーナの壁へと叩きつける。

「くうっ！」

更にエネルギーが消費される。ついさっきまでは無傷だったというのに、もう残存エネルギーは三割を切っている。

だが、終わってはいない。

バキィ！

鈍い音と共に手の中のインターセプターが砕け散る。蒼い姫を守る最終防衛手段、騎士の誇りたる剣はその役目を全うした。今の一撃をまともに受けていたら、確実に勝敗は決していただろう。

「ありがとうございます、インターセプター。ゆっくりお休みなさい。……あなたのおかげで、やっと勝機が見えましたわ」

「……嘘だろ？ あれなら近接特化機の主武装でも切断できるんだが」

「何度も言いましたわよ？ 今日の私達は、今までの限界を凌駕しますの」

慈しむように、誇るように微笑んだセシリアは目の前で呆けている一夏の肩を掴み、拘束する。

「インターセプターを犠牲にして作った好機。チャンス無駄にはしませんわよ？」

ブルー・ティアーズに隠された最後の切り札が、一夏を吹き飛ばした。

十二話 「受け継がれる力、ってどこか？」 一夏

有り得ない、と思った。

あの一撃は、それこそ白式の斬月だろうと切断できるものだっただ。それをあの特別な機能を持っているわけでも、ましてや業物であるわけでもないただの西洋剣が砕けながらとはいえ受けきったのだ。

おもしろい。

あの一撃を受け止めることを決めたセシリアも、それに応えて耐えきったブルー・ティアーズも、賞賛に値する。

そんな彼女達にこそ、俺は全力をぶつけたい。今、俺に出せる全力を。

だから、俺に力を貸せ、白式。

——初期化と最適化処理が完了しました。行きましょう、主。

倒した、とは思わない。

「ブルー・ティアーズ！」

アリーナの反対側に取り残されたブルー・ティアーズを呼び寄せる。ライフルは量子変換する間も無かったので投げ捨てた。インターセプターは破壊され、虎の子のミサイル型ブルー・ティアーズも

先程使ってしまった。もう、私の武器はこれだけ。

強かった。おそらく、今まで戦ってきた誰よりも。

偏向射撃。よくわからないまま使えたその特殊技術に加え、四つのブルー・ティアーズと同時にスターライトまで使用した。今までも、そしてこれから先もきつともうないくらいの絶好調。

それでも、彼には一発も当たらなかった。ISの性能もあつただろうけど、それ以上に彼自身が強かった。圧倒的な反応速度に始まり判断力、観察力、思考能力etc...。正直なところ、最初から真つ向勝負でこられていたら勝ち目は全くなかった。そう思うくらい理不尽に強かった。でも、なぜ最初から全力で来なかったのかしら？ そう疑問に思い、気付いた。

彼は、何時間ISを動かしたのだろうか？ どう考えても私よりも少ないし、この一週間彼がISで特訓したという話は聞いていない。つまり彼は――

ふわり、と不自然に土煙と白煙が揺らぐ。

ついさっきミサイル型を彼に叩き込んだ辺りだ。

やはりあれで終わってはいなかった。瞬時加速や衝突の余波で多少消費はしていただろうが、被弾は実質ミサイル型のみ、それも完全に直撃したようには思えない。勝ったと考えるには無理がある。ぎる。

（さて、私に残された武装は通常型のブルー・ティアーズが四機のみ。対して相手は武装に変化なし。シールドエネルギー残量は五分……なんて樂觀はできませんか、倍はありそうですね、先の爆発の余波でも少しばかり削られましたし。……はあ、不利すぎて笑えませんか）

それでも、諦める気はない。覚悟を決めると同時に、『白』が現れた。

「ファースト一次……シフト移行………？ まさか今まで、初期設定の機体で？」

「ああ、これが『俺』の本当の『白式』。ここからが本番だ」

機体が軽い。反応が追いつく。全く俺の動きを阻害しない。ついさつき機体の設定やらなんやらをいじくって俺用に調整したんだが………これが専用機、俺に全てを適合させた俺のためだけの機体。

「ふふ、おもしろいですわね、本当にあなたはおもしろいですわ。仮にも代表候補生である私を初期設定の機体で圧倒するなんて………一次移行までしてしまった以上、武装がほぼ尽きた私には勝ち目はありそうにないですわね」

初期設定とはいえ、フルカスタムしたそれすら軽く凌駕する。白式が俺に適応しようとしてくれているのだ。

「ですが、私にも代表候補生としての誇りと意地がありますの。簡単には負けませんわよ？」

「おう。……本気で行くぜ、セシリア。お前とは全力で戦いたい」

斬月がその名と姿を変えた白式唯一の装備、雪片式型を突きつける。

「光栄ですわね。ですが、手を抜いたら奴隷にすると云ったでしょう？　無論、私も全力でお応えしますわ」

セシリアも負けじとB Tを周囲に滞空させる。

「決着をつけようぜ！」

真っ直ぐに、セシリアに向かう。

ISの試合は、いわゆるLP制で行われる。ライフ・ポイント

最初に決められただけのシールドエネルギーを与えられ、それを削り合う。そして先にエネルギー残量が0になった方が負け、という至ってシンプルなルールである。

基本的に射撃・格闘に関係なく被弾すればバリアーが発動してエネルギーは消耗するし、強い衝撃などを受けてもまた同じ。バリアーを貫通して装甲に被弾すればその部分が破壊されたりもする。そして、ISには絶対防御というシステムが備わっており、極端にシールドエネルギーを損失する代わりにバリアーを貫通するような攻撃でも受け止めることができる。まあ最終安全装置みたいなものだ。

雪片式型。モンド・グロツン我が親愛なる姉にして世界最強の女性である織斑千冬が、第一回世界大会において使用した唯一の武装、雪片の後継装備。その特殊能力は刀身に触れたエネルギーを無力化すること。それはレーザーなどの射撃攻撃などはもちろん、ISのエネルギーシールドであろうが例外ではない（……………）

……）。つまり直撃さえさせれば、強制的に絶対防御を発動させることができる一撃必殺の武器、それが雪片だ。その強力な唯一仕様特殊才能の代償に、発動には多くのエネルギーを消費するうえ、拡張領域をほぼ全て埋め尽くすため他の装備は一切持てないというハードモード縛りプレイを強要する素敵仕様、素人に渡す機体に装備するものじゃない。まあ、その分攻撃力に関しては特殊能力を使用せずともISの全装備トップクラスという廃スペックなのだが。

迎え撃つためにこちらに照準を合わせようとするBTを斬り飛ばす。

「これ……速いなんてものでは!？」

続けて一振り、さらに一機落とす。

「ブルー・ティアーズ!」

残る二機が即座に反撃に移る。だがこの雪片なら!

「レーザーを打ち消した!? ……その武器、まさか!」

「ああ、雪片式型。千冬姉の雪片の後継装備だ」

加えて、俺は今零落白夜は最低限しか使っていない。レーザーのエネルギー量と全く同量のエネルギーを、雪片とレーザーの接触部位にだけ、直撃する瞬間だけ発動させた。……完全マニュアル操作だからこそのことだな、これ。まあ基本的にやっていることはエムゼロと同じだ。自分が求める結果を出せる最低限のエネルギーを効率的に運用すれば、これ以上ないほどの強力な切り札になる。

「そしてこれが！」

白式のエネルギー残量は200強。俺が極限まで燃費をよくしたというのに、全開にするとこれだけあっても三十秒も発動できないとは、どれだけマゾ御用達の特異能力なのだろう、これ？

「俺と！ 白式と！ 千冬姉の！ ワンオフ・アビリティー、零落^{れいらく}白夜^{びやくや}だ！」

「！ ブルー・ティアーズ！」

「遅い！」

一振りに残ったBT二機を落とし、瞬時加速を発動、セシリアの懷に潜り込む。エネルギー残量は57、やはりBTが一発掠ったか……だが、これだけあれば十二分だ！

「おおおおっ！」

下から上へ、逆袈裟に放った斬撃は、確かにセシリアを捉えた。

『試合終了。勝者——織斑一夏』

………実は雪片式型の攻撃力と零落白夜の危険性を忘れていて、直前で斬撃の軌道を逸らすのが一瞬でも遅れていたらセシリアが真つ二つになっていたという事実は——知らない方がいいよな？ ん？ 絶対防御？ エネルギーが有限である以上それを使って発動する機能にも限界があるんだぜ？

「死人を出す気が貴様はあああああああ！」

ドゴウッ！

「ぐおおおおおお！」

ちょ、まつ！　そ、それIS用の近接ブレードだから！　刃返しても立派過ぎる鈍器だから！　むしろ今俺が死人になるから！　気づいてマイシスター！

「うるさい！」

ゴッ！

「うぬあああああ！」

駄目だ……俺は、俺はもう死ぬんだ。嗚呼、時が見える。ガクッ。

「お、織斑あああ！？　ま、まだ逝くな！　きゅ、救急車！　救急車を呼べえ——！」

パニックるレン。うむ、和む。

「……………」

そして返事はしない。ただの屍のようだ。すまんレン、その優しさにもう少し癒されたいんだ。

「ハア、ハア！」

興奮している。ただの変態のようだ。

「なにをしたらか貴様らは！」

スパアン！

千冬ねスパアン！……………織斑先生の出席簿アタック。俺に72のダメージ、箒に68のダメージ、俺に83のダメージ。

……………ぶっちゃけセシリアとの戦闘よりピットに帰ってきてからのダメージの多い気がするんだが。

「お、織斑先生、何をするんですか！？ い、いいいくらお、織斑先生でも、僕の友達を傷つけるなら敵と見なしますですよ！？」

うむ、その優しさはとてつもなく嬉しいのだが、足も声もちよつと人体の神秘を感じるくらい震えてるぞ？ オマケに千ふスッ。……………織斑先生もホウ、って感じで面白いものを見るような目してるから！ レン逃げてー、超逃げてー！

「ヒッ！ ど、どどどうしてもや、やややというのなら！ ぼぼぼ僕とイ、イイクサストがああ相手になりますでしょうか！？」

テンパリながらも俺の前に仁王立ちするレン。やべえ、友達と呼んでくれた感動とか無償の優しさとかにむせび泣きたいが、それ以

上に罪悪感がああ！

「…………おい織斑、これでもまだ茶番を続けるのか？ 正直私は申し訳なくなってきたんだが……………」

全くもってその通りです！

「な、なんの話をしているんですか！？ く、くく来るなら……………で、できれば来ないで下さ」だ、大丈夫だ、レン。大丈夫だから「い……………は？」

呆けたような顔。うう、罪悪感が。

「へ？ お、織斑？ ……………大丈夫なのか！？ け、怪我！ 怪我は！？」

駆け寄ってくるやすぐさま優しく頭を触診するレン。

「い、いやそれが少しクラクラと来て倒れたが、少し立つのが辛いくらいだ」

さらに湧き上がる罪悪感。いやだって「癒やしと優しさと和みが欲しかったんだ」なんて言えないだろ？

「ふ……………ふざけるなあ……………」

この後、泣きながら俺に罵声を浴びせ続けるレンを宥めたり、白い眼で冷ややかに俺を見つめる教師二人に言い訳したり、泣き疲れたレンを部屋まで運んだりしたりと、犯した罪の重さを自覚する時間が続いた。

「友達と言った時、私に目もくれなかったがまさか……………」

相変わらず存在を忘れられたりショッキングな事実に気づいてしまったりと、地味に不幸を噛み締める剣道少女もいた。

十二話 「受け継がれる力、ってどこか？」 一夏（後書き）

おはようございます、通りすがり1です。

多分連続更新は今日で止まります、週一更新くらいにはしたいものですが……………。

やっとそろそろ一巻の半分が終わりますね。

…………… なんてほぼ五万文字使ってこれしか進んでいないんでしょ
うか？

不思議ですね。

十三話 「私の名前は……」 ? (前書き)

やっと書けました、通りすがり1です。

PV40000突破、ユニークアクセス5000突破、お気に入り登録50件しました。

本当にありがとうございます！

十三話 「私の名前は……」 ?

ああ、彼だ。

時たまノイズが混じるものの、しっかりと映し出される映像を見て思う。

ずっと会いたかった人。

この世界でただ一人の、大切な人。

唯一無二の友人。

涙が溢れてくる。

この十年、彼のことを考えない日はなかった。

彼は今どこにいるのだろうか？

彼は今なにをしているのだろうか？

彼は今どんな姿をしているのだろうか？

彼は？

彼は？

彼は？

私には何一つわからない。

私は彼の側にはいないから。

私は彼の側にはいられないから。

私は彼の側にはいてはならないから。

彼は私のただ一人の友人だ。

彼は私にとってこの世界で唯一の大切な人だ。

彼は私が ■ ■ として ■ ■ な人…… いけない、それ以上考えてはいけない。

彼にとって私は有害だ。

だから想いに蓋をする。

私は彼を ■ しているから。

とても独り善がりな ■ だけど。

構わない、私はただ彼が幸せであればそれでいい。

そのためならなんだって、この世界だって利用する。

役目なんて知らない。

生きる意味を失った私には、それしか残されていないから。

いや、仮に生きる意味を持っていたとしても私はそれより彼を優先する。

彼は私を覚えていない。

それがどうした？

彼は私を知らない。

それがどうした？

彼は約束だって覚えていない。

それがどうした？

彼は私を――。

それがどうした、それを選んだのは私。

何を捨ててもいい。

何も知らなくていい。

私が願うのはただ一つ。

あの優しい彼が。

あの強い彼が。

私の友人^{ヒロ}が。

私の ■ ■ な人が。

私の ■ ■ する人が。

幸せになりますように。

それ以外はなにもいらないから。

だから私はここで夢を見る。

終わらない夢を。

幸せな、分不相応な夢を。

黒い思いを押し込めて。

桜舞い散る、この場所で。

嗚呼、彼が、幸せでありますように。

私の名前は、シロ。

彼が、私にくれた名前。

これだけが、私と彼の絆の証。

それで、十分。

それ以外なんて、要らない。

温かな液体が私の表面をなぞる。

それを臍氣に感じたまま、ただ今日の出来事を反芻する。

（あれは――）

自然と思考が向かうのは今日の試合。

これ以上ないほどに自分の全力を振り絞り、全霊を賭けてぶつかり、そして――

（負け、ましたわね）

敗北。代表候補生として積み重ねてきた実績と誇り、そしてその果てにある自身の可能性。その全てで持つて相対し、一次移行にも届かないような短時間しかISに触れていない素人に、完敗した。いつか至りたいと、そう望んでいた到達点に限りなく近づいても、初期設定の機体にすら届かなかった。

（悔しい、はずなのに）

一次移行してからは、ブルー・ティアーズもあっさりと捉えられ、私自身も反応すらできずに斬り伏せられた。

（悔しい、けど）

どうやったのかなんて見当もつかないような、全く新しい機体制

御。

代表候補生である自分にも扱えない高等技術である瞬時加速。
そして、それを機体制御にまで応用してみせた。
すでに技量で負けている。
すでに才覚で劣っている。
自身の限界を凌駕してなお、届かない。
彼は、果てしなく遠い。

（それが、なんですか？）

限界を超えても届かないならその先へ。
彼がまだ先へ行くというなら、私もさらに先へ。

（追いつきたい、彼に）

憧れてしまった。
求めてしまった。
堂々とした、力強い姿に。
優しい微笑みに。
どうしようもなく、惹かれた。
止まらない、止まらない。
止まりたく、ない。
心を奪われたから。
IS操縦者として、女の子として。
認められたい。
想われたい。
だからあなたに追いつきたい。
そして――

（いつか、届いた時は）

想いを、告げたい。
告げて。

共に、歩んでいきたい。

悩む。

考えることはただ一つ。

（どうやって謝罪しましょうか？）

今更ながら振り返ってみれば、黒歴史認定確実な発言ばかりですわよね。

『私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？』

………何様なのでしょう、私。

『私を知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を！？』

まあ、これはまだ大丈夫ですわよね？ ………もっと言い方というものがある気がします。

『私は貴族ですよ！？ 払うべき敬意というものがあるでしょう！？』

強権を振り回す者を貴族とは呼びませんわよ……………。

『文化としても後進的な国』

いくらなんでも暴走しすぎてませんか？

…………… これでもまだ一部だという事実が、心底恐ろしいですわ。

男に代表云々は…………… まあ、私にも代表候補生になるために費やした努力とか時間とかがありますから、簡単には譲れないものでしたし。

それと男性嫌悪が混じって、あんなことになってしまったのですわね。

（どうでしょう？）

現実逃避しているわけではありません。

これって、どう考えても最悪ですわよね？

悩む。

考えることはただ一つ。

「もうちょいいいけそうなんだよなあ」

「どこまでぶっ飛んだ機体にするつもりだ、強欲にもほどがあるぞ」

いやいや、強欲なんてそんな。俺はただ零落白夜のエネルギー効率を良くしたいだけだよ？

「……すでに代表決定戦の時に比べて30%は燃費向上していたと記憶しているんだが？」

「ああ、あと20くらいはいけそうな気がするんだよ」

「半分まで落とす気なのか……？」

ん、なんでそんな目で俺を見るんだ？

「元々の消費エネルギー量が異常だったんだよ」

「いや、当たれば一撃必殺という点を考えれば妥当じゃないか？」

「いや、装備近接オンリーでスキルも両刃の剣オンリーはマゾ仕様だろ。対策なんか簡単に立てられるし、連携もかなり辛い」

「その対策も問答無用で打ち破れる輩が何を言うか」

「そうですね、今までにないくらい絶好調だったというのに、分の悪い奇策以外ではかすりもしなかったではありませんか」

「いや、実際結構危なかったぜ？ まさかセシリアが、というか代表候補生があそこまで強いとは思わなかった。事前にBTについて調べてなければ負けてたかもな」

「ですが今回の代表決定戦で手の内はバレましたし、もう勝負にな

らないかもしれませんわね。調整も進んでいるようですし」

「それが零落白夜は発動する度にエネルギーを消費するからな。おいそれとは使えないことに変わりはない。かといって垂れ流しなんかにしたら効率上がったと言ってもすぐスカラカンだしな」

「なるほど……具体的に何回ほど使えますの？」

「発動に50近く必要だから……節約して十回が限度だな。実戦ではその半分、五回ぐらいになるだろうな」

「十分に危険ですわね。しかも展開時間そのものは延びているんですわよね？」

「ああ、出力を抑えれば数分は展開し続けられると思う。必要な時だけ出力上げれば攻撃力も十分だから短期決戦になら使えるか？」

「ところでなぜ貴様がいる、くるく……ドリルロール（金）」

「今くるくる頭と言い掛けましたわよねえ！？　というかドリルロール（金）って……」

「何のことだ、クルクル・ドリルット？」

「せめて原形くらいは留めてくださいませんか！？　文字数だけは合ってるあたり余計腹立だしいですわよ！」

「？

セリシア・カカロットだったか？」

「私はいつサイヤ人になったんですの！？ さり気なく前半も間違えてますし！」

諦める、セシリア。レンのそれは素なんだ。普段はああだけど中身はへっぽこな天然なんだ、それを俺達はこの一週間で思い知ったよ。

「！ セルニア・フレイムハ「似てますけど違いますわよ！」………
…？」

ほら、無表情で端から見たら馬鹿にしているように見えるけど、心底不思議そうだから！ 微妙に首傾げてるから！

「くっ、確かに今回の件は全面的に私に非がありますが、話すら聞いてもらえないほど嫌われているなんて………！」

いや、レンは本気でお前の名前を覚えてないだけだと思うぞ？
嫌いかどうかは知らないが。

「いや、というかい加減僕の質問に答えろ………ええと、セリシア！」

「だから違いますわよ！ ……………はあ、その、一夏さんに謝罪をと思ひまして」

は？ 謝罪？

「なんで？」

「色々失礼なことを言っしまいましたので」

「あー、たしかに色々言ってくれたな」

蛮族とかサーカスとか。

「う、はい。私事で苛ついていまして、と言っってしまうと言訳になるのですが……無礼を働きました、申し訳ありません」

頭を下げるセシリア。なんだ、ちゃんと謝れるじゃないか。

「いや、謝ってくれたならもういいよ」

「ありがとうございます。……それと、一つ言いたいことがあるのですが」

「言いたいこと？」

「ええ。……織斑一夏さん、私は、いつかアナタを超えることを誓いますわ」

……。

「それはつまり」

「はい、宣戦布告ですわ。私は今回アナタに負けました。差がすぐに縮まると思います」

ですが、と強い意志を秘めた目で俺を見据える。

「いつか、アナタの隣まで登り詰めますわよ」

目に曇りはない。揺るぎない、断固たる決意でセシリアは俺に誓った。

あの目だ。斬月の一撃を受け止めた時の、全力で戦うに値する不屈の闘志を内に秘めた、強い目。

「は、上等！ 俺の元まで来い、セシリア！ 俺も、お前とのあの興奮をもう一度味わいたい」

血湧き肉踊る、というやつだな。

「は、はい！」

セシリアもあの戦いを思い出しているのか、頬が上気している。なぜか、その姿がやけに美しく、気高いものに見えた。

さあ、お前は。

「着いてくれるか？」

「無論、ですわ！」

十三話 「私の名前は……」 ? (後書き)

これでやっと一巻が半分終わりました。やっぱり学校行きながら書くのは時間が足りませんね。

シロはヤンデレです。健気なヤンデレです。ちなみに、彼女の思惑通りに行くとこの作品が完結するまで一夏達と絡まないのでハプニングを起こします。たぶん。

今更ですが、レンの髪型は『ハヤテのごとく!』のマリアさんを参考にしてください。

セシリアが大活躍ですが作者は別にオルコツ党ではありません。篤が空気ですが作者は別に篤が嫌いじゃありません。レンが地味でISに至っては名前すら明記されてませんが別にオリキャラが動かしづらいわけではありません。ISを考えてないなんてこともありません。ありません。ありません。ありません。

ホントデスヨ?

ヒロイン六人の中で実は篤が一番嫌いだとかレンの毒舌が思いつかないだとかISの細部をどうしようかいまだに悩んでいるとかそんな事実は関係ナイデスヨ?

それでは、ありがとうございました。

十四話 「無垢であることが良いこととは限らないという良い見本だね。遙の言

やっと言いました、通りすがり1です。

またオリキャラ（三巻終了後に本格的に出演予定）とエロ斑です。
嫌いな方はお気をつけください。

……………このオリキャラが正式出演するまで続けられるかなあ？

十四話 「無垢であることが良いこととは限らないという良い見本だね。遙の言

「そんなこんなでっ！ 織斑君、クラス代表就任オメデト――

」――

『オメデト――！！』

パチパチワーワードンドンパフパフ。
パンパンガンゴンドンドンゴウン！

沸き上がる歓声、鳴り響く楽器、破裂するクラッカー、舞い降りる紙テープ、打ち鳴らされるフライパン、乱射されるハンドガン、響く爆発音。

それら全てが、俺の敵だった。

「いや待とう織斑！ 後半だいたいおかしくないか！？」

今現在、隣でせっせとツツコミに励んでいる親愛なる我が友も、この場においては味方とは言えない。敵になるつもりもないようだが。

「ふっ……………そもそも俺がクラス代表になっている時点で、いや、俺《男》がISを動かしている時点ですでにおかしいんだよ！」

「今更すぎるだろ！ そしてツツコミどころはきつと他にあるはずだ！ 貴様の目は節穴か！？」

「男が俺一人とか何の罰ゲームなんだよおおおおお！！」

「それはもういい！」

いやだいが重要だぞ！ 同性間ならではの〇〇〇〇〇（文字数と関係なく五文字です）なトークとか、同性だからこそ〇〇〇〇〇とか！ なにより男子同士の気軽なスキンシップが恋しい！ 同性の気安さが懐かしい！

「？ 織斑は僕やクラスメイトにも自然体で接しているように見えるが？ 特に篠ノ之とは」

いやたしかに自然体で接せるようにはなれたよ？ 箒とか幼馴染みだしね。

だが、だ。だが、腹を割って話せるような気安い相手ではないんだよ！ 箒とかメチャクチャ綺麗になってるし、俺達だって思春期なんだからそれくらい意識するだろう！？

「そういうものか？ 試しに僕にばーいずとーく？ と言うのか？ をしてみればいい。なんせ僕と織斑は……まあ、友達、だからな」

顔を真っ赤にするレンは可愛いと思うが、箒、鼻血を止める。それはそうと、いくら親しくても、男女の間には乗り越えられない壁というものがあるのだが……言ってもわからないようだから直球でいこうか。

「正直、性欲を持て余す」

箒の口から飛び立った茶色の液体（烏龍茶）が、照明の光をキラキラと反射しながらアーチを描く。

「そうか、では僕で処理すればいい」

俺の口から飛び立った茶色の液体（烏龍茶）が、照明の光をキラキラと反射しながらアーチを描く。

『なに言っただレン！？』

我に帰ると同時に筭との連携コンボ。辺りは静まりかえっている。……いや、一発ぐらい殴られて今後この話をしないように、と思っただが。

「~~~~っ！　うるさいな！　なんだと言っただ！」

涙目のレンを観察する。

いつもは首の後ろで畳むようにして束ねている髪は下ろされ、夜の闇よりも暗く輝いている。

この世に存在するあらゆる要素を抜いたような完全な純『白』の肌にはどんな微かな『色』も見いだせない。

いつでもかけている眼鏡の奥にある、深淵のような黒を宿す瞳からは、クリスタルのような輝きを放つ雫が溢れている。

細い手足と小さな体躯は、まるで繊細な飴細工のような印象を受ける。

幼女と少女の中間を意識させる身体の線は、僅かながらも膨らみを見せ、余計に背徳感をそそる。

強さと危なっかしさが同居したようなアンバランスな性格と、その吹けば散るような風貌、そして何も知らない真っ白な精神は舞い散る桜の花びらのよう儚さを感じさせる。

——そんな少女が俺の〇〇〇〇を？

そこでふと我に帰り、首を振る。俺は（21）じゃない。だから神《作者》、変な電波を送るな！

「ハア、ハア、ハア！」

なんか一人受信してたが気にしない。黒髪ポニーテールなファースト幼馴染みな気がするけど気にしない。気にしないっいたら気にしない。

「はしたないですわよレンさん！」

おお、セシリア！ よくぞこの凍り付いた（そして厄介事の匂いがプンプンする）空気の中声をかけてくれた！ さすがは1―1を代表する空気が読めない残念な子だ！

「……………なぜでしょう、今とても馬鹿にされた気がしますわ」

「なんだ、居たのか……………オルゴール？」

「いい加減覚えてくださいませんか！？ 決定戦翌日の朝、学食での会話から一度たりとも私の名前呼んでませんわよね！？」

「……………」

「目を逸らさないでくださいませんか！？」

……………頑張れセシリア。みんな飽きてきただろうからそろそろ名前覚えてもらってくれよ？ そして箸、血の海を作り出してんじゃ

ねえよ。そんなんだから動かしづらくて空気になるんだよ。

「で、だ。レン、なんであんなこと言っただ？」

うん、多少強引にでもしないと埒が明かないしな。

「ちょ！ 今レンさんに私のなま」

セシリアは犠牲になったのだ、あの空気を壊すためのな！ とい
うわけで役目は果たしたのでスル！。こっから先は、俺に任せろ！

「扱いがあんまりですわ……………」

俺はセシリアの慟哭を華麗に越えていくぜ！

「『性的に』とか『我慢できない』、『いいか？』みたいな事を大
切な人が言っていたら了承するものなのだろう？」

「は？」

「いや、よくは知らないが冬沢がそう言っていた」

……………誰だ？ そんな適当かつふざけたことを、この天然記念物
級に純粹無垢なレンに教え込んだのは？

グッジョブ
「GJ！」

「はっ、くしゅん！」

「ん？ どうしたんだい、遥？」

「いや、誰かがオイラを噂してるのかな？」

「あー、レンちゃん（の周りの人）じゃない？ 今ISS学園にいるはずだから、ちょうど遥が教えたアレな知識を披露してるんでしょ」

「そうかそうか、仕込んだネタが芽吹いているのか……感無量だよ、オイラ」

「相変わらず人生を賭けてネタに走ってるね」

「全てを捨ててネタに走れる者には！」

「その口癖、今や遥のあだ名になってるよ？」

「え？」

「曰わく『全てを捨ててネタに走る女』だってさ」

「それならいいや」

「あ、いいんだ。なんか予想はついてたけど」

「うむ、ネタに走れるなら本望！ むしろこの素晴らしい名を誇りたいくらいさ！」

「ああ、うん。さすがだね遙」

「なに呆れた顔してんのさ。他人事じゃありませんぜ？ なんせこの島でユー《YOU》をしろうさと呼ばない人はいないかね」

「……………は？」

「いやはや、オイラがひたすらユーをしろうさと呼んでいたら定着したみたい」

「なあ！？ 私にはちゃんとした名前があるんだけど！？」

「白兔というね」

「それもあだ名！ むしろそれこそがあだ名！ 遙が勝手に付けて、勝手に短縮したあだ名だから！」

「まあ細かいことはいいじゃんか。むしろしろうさの本名知ってる人なんて、オイラ以外ではクド公くらいのもんだよ？」

「嘘お！？」

「ほんとほんと」

「え、ちょ！ は！？」

「まあ、諦めてね。今更本名乗っても定着に時間かかるし。ちなみに身分証とかもまとめてしろうさで登録されてるよ？」

「え！？ うわホントだ！」

「どうしたオンゴット？」

「惜しい！ もう少しがんばってくださいな！ …………… 変なあだ名で定着なんてしないでくださいね？」

「もう金髪ドリル、キンドリでいいんじゃないか？」

「助長しないでくださいませんかー夏さん！？」

いや、なんとなく言わなきゃいけない気がして。

「キンドリ……キンドリか……………」

「覚えようとししないでくださいませんか！？ 私の名前は」

「キミドリだろ？」

「違いますわよ！ 何から何まで違います！ そのドヤ顔やめてくださいまし！ 私は宇宙人になった覚えはありませんのよ！」

素……………だよなあ？ なんか逆に心配だ、この娘。

「まあそんな些末事はどうでもいいだろう？ なぜああいうことを言っではいけないのだ？」

さ、些末事……………些末事ですか、フフ。と隅でいじけてしまったセシリアは鮮やかにほっとして、レン、それはだな？

「あのな、レン？ あんなんそれこそ世界で誰より、下手したら家族より大事な人、それも（普通は）たった一人の異性にしか言わな

いもんだぞ?」

「……………」

「一生涯を共にするような、大切な人にだ」

考え込むレン。ふう、これでなんとか――。

「そうか、わかった」

おお！ わかってくれたかレ――。

「それならなんの問題もない、思う存分僕で処理するといい」

『ゴフウツ!!』

キリッ！　と言わんばかりの表情で言い放ったレンに全クラスメイトが吹き出した。色とりどりの液体が宙を舞う。あ、虹できてる。

「ちょ！　レン、話聞いてたのか!?!」

「無論だ。何を当たり前のことを言っている？　まあ、織斑は僕にとつては誰よりも大切な『友達』だからな、一生涯友人であることにも異論はない」

「いや、だから！　どんなことをするのかちゃんと理解して言ってるのかそれ!?!」

赤面してんのは可愛いけどね!?!　言ってることがアレだから洒落にならないぞ!?!

「どんなこと、と言われても。僕は織斑がしたいことなら何でも受け入れられるが（……………）」

初めて見る、柔らかな微笑みで告げられる。

『な！？』

顔が真っ赤になるのが自分でもわかる。頭の中をレンに〇〇〇〇〇させたり、レンを〇〇〇〇〇したり、あまつさえレンに〇〇〇〇〇なことまでする映像が溢れてくる。^{イメージ}ヤバ、鼻血出てきた。

初めて見せてくれた優しい微笑みと明確な俺への信頼、なににより雪原のような真っ白な心とその口から発せられた暗い情欲を掻き立てる内容がミスマッチで、凄まじく嗜虐心を揺さぶってきた。

しかも子犬のような無邪気な瞳にいつそう汚したいという征服欲と支配欲まで湧き上がる。

すでに筈はノックダウン、他のクラスメイトも大打撃を受けている。

「な、ななななな、ななななななな——っ！？」

俺も混乱中。うわばばばば！

「な、なんだそのリアクションは！？　ぼ、僕では、不満、なのか？」

やめてくれ。涙目上目遣いでシュンとするとかまじやめてくれ襲いそう。いつもの無表情はどこへ行った？　眼鏡が若干ずり落ちてるのがまた……………。

「待て、レン。とにかく待て、そういうわけではなくてだな」

「オモチカエリイイイ！！」

「血の海へ還つてろ、箒！」

なにこのカオス！ レンはネガティブ連鎖に入るわ、箒は病むわ、クラスメイトは狂乱するわ！

この後、パーティーは終了するまでずっとこんな感じで、キレた千冬姉が乱入するまで続いた。

ホント、勘弁してください。

しかも結局性欲は解消されないし、箒と同室だからアレやるわけにもいかないし…………。

はあ、性欲を持て余すぜ。

十四話 「無垢であることが良いこととは限らないという良い見本だね。遙の言

一つ疑問なのですが、なぜレンの天然エロ発言と戦闘のシーンではこんなにも筆に進むのでしょうか？

さて、今回は一つアンケートがあります。

ラウラとの関係ですが、一夏が誘拐される場面が想像しにくいのでどうしようかと考えまして、読者様の意見を参考にさせていただきます。

以下の内から一つ選んでください。

？原作通り

？ラウラと仲良し

？ラウラが一夏を尊敬している（ISについての論文を発表するなどして）

？むしろ恋人

？戦友

はい、書いといてなんですが良識ある回答が望ましいです。割と本気で。

それと、あくまで参考にするのであって必ず結果通りになるとは限りませんので、御了承ください。

一人一票、期限は原作一巻が終わるまでとさせていただきます。

それでは、ありがとうございました。

………ちなみに作者のレンのイメージは黒髪黒目で肌が異常に白
いクドリヤフカ（髪型マリアさん、眼鏡着用）です。

十五話 「待たせたわね！ 真打ち登場よ！」 鈴（前書き）

今晩は、通りすがり1です。

サブタイトルではありませんが本当にお待たせしました。

新キャラが出ると戸惑いますね、と言いついたいのはやまやまですがただ単に買いあさったラノベを読んでいただけです。ホントスイマセン。

とはいえ新キャラに戸惑ったのも本当のことです……そして例外なく新キャラも多少キャラが変わっています。これからさらに変化する予定です。第は末期です、南無。

今話もレンが暴走してます。

十五話 「待たせたわね！ 真打ち登場よ！」 鈴

待ちに待った時が来たのだ…………。

想い続けたあの日々が無駄でなかったことの証のために！

一夏に再開するために！

一夏と恋人という関係になるために！

ついでにISの事を学ぶために！

「日本よ！ 私は帰ってきちゃあ！！」
じっぽん

……………辺りを見渡す。

「よし、誰もいないわね」

あ、危なかったわ。誰かにあんなところを見られたりなんかしていたら、そいつの頭を記憶か命が消えるまで殴り続けなきゃいけないもの。

「ええと、受付はどこだったかしら？」

過去に成り果てた心からの叫びとそれに付随する思考を『黒歴史』と記されたゴミ箱に叩き込む。無論、表明した意思を違えるつもりは毛筋ほどもないけどね。

「本校舎一階総合事務受付……………あつちかしら？」

とりあえず照明にそって歩き出す。八時も過ぎた夜中、いつまでも門の前で突っ立っていら不審者に間違われかねない。

普段の私ならぶつくさと文句と呪詛に愚痴、その他諸々を吐き出

しながら、『そうだ、ISに乗って空を飛ばう!』とか考えている頃だが、今の私は機嫌がいいので軽やかなステップで歩を進める。

(命拾いしたわね、お偉いさん方!)

寛大な私に感謝しなさいよね!

「だから……でだな……」

「一夏?」

懐かしい声が聞こえた気がした。かれこれ一年以上も顔を合わせない私の幼馴染み兼想い人のものだ。

早々に出会えた幸運を信じてもない神に感謝して……いざ!

「だから、なぜ僕で織斑が性欲を処理するわけにはいかないんだ?」

と、踏み出した足がピタリと止まった。

は? 僕? 性欲? 処理?

「いい加減わかれよ!? そういうのは大切な人だけに」

「だから、僕は織斑が大切だと言っているだろう!? 恥ずかしいから何度も言わせるな!」

「恥ずかしがる部分が致命的に間違ってる!」

「頼む織斑、お前が辛い思いをしているのは僕が嫌なんだ」

「ん、む……。いやだけどな、レン」

「冬沢が言っていた、男は我慢しすぎたり『溜まり』すぎたりすると死んでしまうそうじゃないか」

「ダウト！ ダウトだレン！ ていうか冬沢さんとやらは何を教えてやがるんだ！？」

「む、冬沢はなかなか良い奴だぞ？ 異性の友人との正しい接し方や、性に関しての知識は全部彼女が教えてくれた」

「ある意味G」だけど！ ある意味G」だけどさ！」

「僕は織斑に死んでほしくない。………それに、死ぬ前の段階で理性を失って、無差別に女性に襲いかかるそうじゃないか」

「冬沢出てこいやぁ！ 貴様とは一回拳で語り合う必要があるようだなぁ！？」

エエト、ナニカシラコレ？

「友達を犯罪者なんかにしたくないんだ！」

「むしろレンに手を出した方が犯罪だから！」

ナンデ、イチカハヨウジョトイチヤツイテルノカシラ？

「だから………そもそも………」

「しかし………処理を………」

一夏と謎の少女が去っていく。一つ、決意した。

「ヨシ、コロソウ」

そのためにも、まずは手続きを。

はるばる日本まで帰ってきて、一年ぶりに再会した想い人がロリコンになっていたら、叩いてでも矯正しなきゃ、ねえ？

……私にとっては若干有利になっている気もするけど。

「ね〜ね〜おりむ〜、聞いた〜？」

いや、何を？

ん？ ISの授業？ 機体をマニュアル操作している俺には簡単すぎるから省略。いやだつて取り立てて何も無かつたし、俺の機体制御能力ならミクロン単位で高度調整できるんだぜ。フルマニュアル操作なめんなよ？

「転校生が来るんだつて〜」

「転校生？ この時期にか？」

にしても相変わらずのんびりで癒されるよな、この娘。さすがのほほんさん（本名・布仏本音^{のほとけほんね}）。

「む、転校生？ この時期に、ということはしゅじんこーかこーり

やくひろいんか超能力者だな」

その偏った知識は冬沢さんから輸入したんだろうなあ。自分で言
ってて言葉の意味わかってないみたいだし。

「なんでも中国の代表候補生らしいよ？」

「今更ながらに私の存在を危ぶんでの転入かしら？」

お、セシリアか。

「そうだな、どっかの誇り高い（笑）イギリス代表候補生が、素人
にいいように翻弄された挙げ句に完敗したから、代表候補生という
称号の名誉回復に来たんじゃないか？」

朝っぱらからキツイな、レン。

「だいじょーぶ、せしりあ？」

「……………大丈夫、ですわ。自業自得、というものですわよね」

見事なorzの姿勢のまま呟く。うん、頑張れ。

「まあ、とはいえず、専用機持ちは一組以外には四組だけだから
ね。クラス対抗戦は楽勝、おりむが勝つとクラスみんながし
あわせだよ」

そういえば一位クラスは学食デザートフリーパス（半年）がもら
えるんだっけ？

「その情報、古いよ」

ん？ この声、まさか――

「やっぱりお前か、鈴」

なるほど、昨日感じた懐かしい気配はお前か。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。簡単に優勝できると思わないことね」

ファン・リンイン
鳳鈴音、俺のセカンド幼馴染みが片膝立ててドアにもたれていた。

「昨日見てたのはお前だな？」

「ええ、中国代表候補生鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たのよ」

「そうか、格好つけてるところ悪いが全く似合っていないぞ？」

うん、これっぽっちも似合わない。

「こんなタイミングでそんなことを言うな！」

いや、今言わねばいつ言えと？

「そんなことより、見損なったわよ、一夏」

ん？ やけに厳しい視線と殺気が？

「あんた……いつから幼女に手を出すロリコン、いやペドフィリ

アになったのよ！ 手を出すなら私にしなさい！」

…… ああ、こいつもレンに振り回されてやがる。生暖かい視線をセシリアや箒と共に送る。それに気づかず鈴はさらにテンションアップ。

「そのいかれた頭、ブツ叩いて修正してあげるわ！」

殺る気の瞳で見つめられる。わあ怖い。主に隣で殺気を放出しているレンが。

「そのミニマムつんでれ、貴様僕の友達を侮辱するのか？ 織斑はろりこんでもぺどふいりあでもない、へんたいというなのしんだ！」

「あんたにだけはミニマム言われたくないわよ！ 私よりさらにチビじゃないのあんた！ というかそれ（一夏〓変態なる紳士）は予想以上に最悪なんだけど！？」

「貴様が恋愛対象でもロリペド言われると思うのだが……あとさりげなく欲望を暴露していることには誰もつつこまないのか？」

おお、箒！ まとも（？）な発言はいつ以来だ！？ そして冬沢、どれだけレンに色々仕込んだんだよ。明らかに意味もわからず使ってるよな、あの単語。

「というかあんたあの時の！ あんたなんか近くにいるから一夏が変態紳士になるのよ、この痴女！」

あー、うん発言だけ聞けば、ねえ？ ……………あ。

「ちじょ？ 血女？ 知女？」

「痴女よ痴女！ だいたい血女ってなん「おい」なによ！？」

スパアンツ！

「あいたあつ！？ こ、この打撃はまさか……………まさか！」

なんかデジャヴだ。あ、レンがいつのまにかちゃっかり席に避難してる。

「げえっ！？ 信長！？」

ゴガッ！！

「誰が第六天魔王か！」

頭を抱えて涙目でうずくまる鈴が^{ブルブルしてゐる}ちよっと可愛いと思った。……俺はロリコンじゃねえぞ？

「のぶ……………血降る……………千冬さん」

「今何か言いかけなかったか、ん？」

「ナ、ナンデモアリマセンヨ？」

刺激しないように不慣れな摺り足で少しずつドアから離れる鈴。
必死だな。

「ふん、まあいい。さつさとクラスに戻れ」

「は、はいっ！」

脱兎、その単語の意味を俺は今正に理解した。……ああ、うん鈴だ。あの千冬姉へのビビりっぷりとかヘタレっぷりとか昔のまんまだ。

「あいつ、IS操縦者になってたのか。知らなかった」

しみじみと言った。

「織斑、あのへたれミニつんは誰だ？ 社会的に抹殺したいから、その粗末な頭に詰まっている個人情報をしてだけ詳しく教える」

物騒だなレン。そしてヘタレもツンデレもミニマムも、もれなくレンに当てはまることに気付こうか？ あとツンデレの意味を調べて冬沢さんと縁を切りなさい。

「一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？ ……レンたんほどではないが勝ち気でヘタレなツインテツンデレっ娘も……ハアハア」

目を輝かせるな息を荒くするな「欲しい………」とか呟くな凜々しい筈はどこへ行った！？

「い、一夏さん！？ あの人はどんな関係で——」

そんな発言から騒動勃発。騒ぎ質問意見交換推論と右へ左への大騒動。中には千冬姉にダイレクトに質問に言った勇者《愚者》もい

た。

「もしもし、冬沢か？ 調べてほしい人がいるんだが。…… ああ…… ああ、そうだ。最優先で情報工作班を、狙撃班と強襲班も準備させる。場合によってはKの使用も視野に入れておけ」

情報機関を動かす馬鹿もいた。……
つておい！

「なにやってんだレン!？」

「奴を（社会的にも物理的にも）抹殺する準備をな」

「やめい！」

どんどんどタドタばたばたゴォン！

騒ぎは一向に収束する気配を見せぬまま、十分が過ぎようとしていた。

「……………貴様ら、言い覚悟だな？」

.....

「いたあつ!？」

な、何が起こったんだ！？ 千冬姉が一瞬ぶれたかと思ったら、いきなりみんなが頭を抱えていたぞ！？

「さて、**織斑**、**覚悟**はいいか？**騷動**の中心たるお前には**特別キツ**

いお灸を据えてやる」

ゆっくりと振り上げられる出席簿《武器》。心なしか淡い輝きを放って見えるそれを見て、悟った。

「……まさか、な——千冬姉が、千冬姉が俺の『死』か………」

「誰が初邂逅時にメインヒロインを解体する殺人貴か！」

振り下ろされた。

身体が十七分割されたかと思うくらい痛かった。

十五話 「待たせたわね！ 真打ち登場よ！」 鈴（後書き）

読んでいただきありがとうございます、通りすがり1です。

鈴はヤンデレではありません。あの程度では可愛い嫉妬（笑）レベルです。シロがヤンデレで狂愛です。レンは秘密。

気付いた方も多いとは思いますが、今回は比較的大きな原作との乖離があります。この作品では鈴がパーティーの日にIS学園に来ていますが、原作ではその後日一夏達の訓練後に来ています。正直な話訓練の描写を作者がめんどくさがったため省いた結果、あなっつてしまいました。ご了承ください。

PV50000突破、アクセス7000突破、登録60件突破しました！

ちなみに、現在アンケートは？原作通り 0.5票？仲良し3.5票？ラウラ→一夏を尊敬 1票？むしろ恋人 1.5票？戦友 2.5票です。

ありがとうございます。

十六話

「お持ち帰りいいいいいいいいいいいい！！」

第(前書き)

こんばんは、通りすがり1です。

ぎ、ぎりぎり一週間以内です！ 焦りました、七割ほど書いたところで五日間ほど停止していたことに気付いて慌てて仕上げました。週一は維持したいものです。

今回は鈴がなかなか可哀想です。鈴ファンの方、ごめんなさい。

楽しんでいただければ幸いです。

十六話 「お持ち帰りiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」 箒

千冬姉による1・1殲滅事変から時は流れ、昼休みを迎えた俺達（俺、レン、箒、セシリア）は学食を目指していた。

「だからセシリア・オルコットですわよ！」

「……………オ、オルコット？」

「そう！ そうですわ！ 私の名はセシリア・オルコット、断じてオルゴールとかドリルツトとかカカロットなどではありません！」

「面倒な、キンドリで「よくありませんわよ！」むう……………」

「はあああ、レンたんかぁーいーよー！」

授業中千冬姉に何度も叩かれていたわりに元気だなお前ら。というかレンたんって……………。箒はもう手遅れだな。

「待ってたわよー夏！」

「失せろへたれミニツン。土へ還れ」

うわあ、レンが（セシリアの時を含めて）かつてないほど険悪だ。

「なんなのこいつ！？ よりにもよって私をへたれと呼「黙れへたれ。へたれミニツンに名乗る名は無い。ツインテ禿げろ」」

怒り狂った狼のように（端からみる分には可愛らしいが）敵意と

鈴に至ってはさっきまでのことなど完全に忘れてガタガタ震えて、声も裏返ってる。うん、これはへたれがどうかそういう問題じゃないな。レンと違って常識を持っている上に鈍感でもないから余計つらいだろ。（俺という誘蛾灯があるにも関わらず）一般人である周囲の生徒が半径5メートル以内に近寄ってこないことからよくわかる。

「と、とりあえず飯にしようぜ？　鈴、場所取っといてくれ」

笑えたよな、俺？

「わ、わかった！　テーブル取っとくから早くしなさいよ！」

一目散に撤退していく。恥じることはないぞ鈴。ってうわ、座ってる生徒（テーブル席）がすぐえ同情的な視線を鈴に向けて席譲ってるよ。周りの生徒も避難してるし。うわ、鈴いたたまねえ………また涙目になってるし。

「む、今日はがつつり食べたいな………お茶漬けにしよう」

いつでも変わらぬマイペース。お茶漬けはがつつりか？　とかツッコミたいことはたくさんあるけど、ここまでくると尊敬するぜ、レン。

「で、では私はサンドイッチを」

セシリアは最近不幸だと思う。名前の件しかり、今回の（全く関係ないのに）とばっちりしかり。強く生きてくれ。………今度お茶にでも誘うか？

「私はふあ……れ……きつねうどんを」

篤は気にしない方向で。俺は日替わりでいいや。

「お、遅かったわね一夏！」

言葉とは裏腹に、恐怖に歪んだ顔は「もっと遅くてもいいのに、むしろ遅く来て！ いっそ来るな！」と叫んでいる。へたれなのに負けず嫌いで強気なのも相変わらず、と。

「ああ、すまん。伸びちまったか？」

なんで人を待つのにラーメンなんか頼んだんだろうか？ ……まあ、鈴らしいといえば鈴らしいけど。ちなみに遅いと言っても、他の生徒が俺達（というか篤）の進行ルートから自主的に避難したため、食券の購入から受け取りまで極めてスムーズに済んでいたりする。うん、びっくりするほど嬉しくない。

「あんたを待つてたせいでね！ ……というか伸びきってもいいから昼休み終わるまで待たせてほしかった」

後半小さかったけど、聞こえてるぞ？ スルーしてやるけど。

「まあそんな怒るな。丸一年ぶりに会った、もっと和やかな再開にしようぜ」

「私の華麗なるIS学園デビューを初っ端から台無しにしたやつ
セリフじゃないわよね」

華麗（笑）。

「爆死しなさい」

ううむ、どうも俺の周囲には手が早いやつか口の悪いやつしかい
ないみたいだ。

「ほう？ 爆死したいのか？ ならば貴様の部屋にTNTを設置し
てやろう。なに、心配は不要だ。出血大サービス、代金は貴様のそ
の粗末な命で勘弁してやろう」

両方備えたやつが俺のすぐ隣から殺気を振りまいていた。ちなみ
に鈴は正面に座っている。

「な、なにいきなり物騒なことを言ってるのよ!？」

おー、怯えてる怯えてる。

「心配するな、織斑の友人だった（・・・）みたいだからな、仮に
ISを展開したとしても一瞬で天国に逝けるような量を特別に用意
してやる」

葬式の用意もまかせろ。といつもよりもさらに感情の抜け落ちた
顔（慣れれば表情の判別がついてくる）で淡々と言うものだから、
鈴が余計に怯えてしまった。おーよしよし。

「なんで過去形なのよ……」

「簡単な話だ。死体と友情は育めないだろう（……………）
……」

みるみる色を失っていく鈴の顔。つと、さすがにまずいな。

「レン、どうしたんだ？　らしくないぞ？」

確かに普段から友好的とは言えない態度だけど、こんな初対面から敵意も露わに喧嘩売るようなやつじゃないはずなんだが…………。

「…………そのたれミつの言動、気に食わない」

「子供か！　ああもう、仲良くしろとは言わないから喧嘩を売るな！」

「だが「わかったか？」…………わかった」

頬を膨らませた顔をプイとそらす。不機嫌だな。

「たれミつ？　たれミつってなによ？　この中国の代表候補生、凰・鈴音がへたれ・ミニマム・つんでれ、略してたれミつ？　なんの冗談よ……………」

落ち込んでるところ悪いが、これ以上ないくらい似合ってるとも思っ、言ったら殴られるから言わないけど。

「鈴、帰ってきたのは多分昨日だろ？　ここに着いたのは夜八時前後、多分強引に転校してきたんだろ？　あんまり国にわがまま言う

なよ？」

「……………相変わらず気持ち悪いくらいの確ね。それより一夏こそ、なにIS動かしてるのよ。……………まあ 안타絡みならそのくらいで今更驚かないけど」

お、少し元気になった。……………というかどういう意味だこのヤロ
！。

「一夏さん、そろそろどういつ関係か教えていただけませんか？」

「そうだな、身長体重電話番号スリーサイズ住所全て可能な限り詳細に教える」

「とりあえず箒は黙ってる」

鈴が怯えているぞ、また。

「私は一夏の幼馴染みよ！」

堂々と宣言することなのか？ 立ち直りが早いのは……………長所だよな？

「ああ、箒がだいたい小一から小四終わりまでのファースト幼馴染み。んで、鈴が入れ替わりに引越してきた小五から中二の終わりまでのセカンド幼馴染み」

「へ、へえ、その子が例の……………一夏に聞いた話と全然違うんだけど……………」

正直すまんかった。鈴には真面目で凛々しい剣道少女みたいに伝えてたんだよな。なんでこんなのになったんだろ。

「ええと、私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわよ」

入学当初の《まともだった》凛々しい箒を僅かながらでも知っているセシリアが、ギャップに苦しむ鈴に同情するように（そして空気を变えるように）自己紹介をする。

「篠ノ之箒だ。鳳の部屋と就寝時間を教えてくれ」

爽やかな笑顔。酷い便乗があつたものだな。

『……………』

食堂にいる人々（俺含む）からの箒の評価は一つ。

『綺麗だけど残念な娘』

「篠ノ之は……………そこはかとなく残念だな」

鈍い&一般常識の怪しいレンにまで呟かれている。

「って、あんたがああのセシリア・オルコット!？」

「あら、私を知っていますの？ IS学園に昨日今日来たばかりのあなたにまで名前が知られているなんて、誇りに思わ「ISを起動するのが二度目のド素人に、機体特性を完全に無視した捨て身以外では欠片もダメージを与えられなかった代表候補生の恥さらしとか

噂の？」「……………」

さめざめと泣くなセシリア。そして鈴、悪意ない攻撃も相変わらずか、そこは変わっていてほしかった。

「余裕ぶっこいたはいいいけど対戦者には忘れられて数十分放置食らったうえ、機体名にまでなった第三世代兵器はかすりもしないでいいようにあしらわれた情けない代表候補生」

やめろ！ セシリアのライフはもう0だ！ トラウマを挟らないでやってくれ！

「国《中国》で聞いた話だけど、世界中に知れ渡ってるらしいわよ？ まあ一夏が相手なら仕方ないわね、代表候補生の面汚しとか思ってた悪かったわ」

無自覚とは恐ろしい。そんなだから敵を作るんだぞ。……………セシリア、マジがんばれ。

「……………工藤。馴れ馴れしく呼ぶなよ？ というか近づくな喋るな視界に入ってくるな目を開けるな息をするなむしろ生きるな存在するな」

悪意全開敵意バリバリなこいつはどうすればいいんだろう？

十六話

「お持ち帰りいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

第(後書き)

- ・一夏↓エロリ斑化。チート化。S斑？
- ・箒↓変態淑女化。若干強化。
- ・セシリア↓熱血化。薄幸少女化。お人好し化。強化。
- ・鈴↓へたれ化。天然化。

..... どうしてこうなった。

いや、最初は普通に書く予定だったんですヨ？　なのになんでこんなに主人公とヒロインの諸々が変わるんでしょうか？　激しく謎です。

きっとだいたい電波《作者の願望》のせいです。

ありがとうございました。

十七話 「一夏のぶっ飛び具合は理解していたつもりだったけど……………甘かった

こんにちは、通りすがり1です。

今回の一夏も無双しております。今回の籌は少しだけまとも（な時もあり）です。今回のセシリアは出番が少し多めです。今回の鈴は少し暗いです。今回のレンは欠席です。

十七話 「一夏のぶっ飛び具合は理解していたつもりだったけど……………甘かった

あの後、暴走するレンと箒をセシリアと協力して鎮めたものの、鈴が怯えながらも宣戦布告（らしい、セシリア談）をしたため事態はさらに迷走と混迷の一途をたどり、鈴と俺達は敵対関係になることになってしまった。とはいえ喧嘩をしたわけではないし、鈴もセシリアには懐き始めている（他の二人は論外、セシリアはなんだかんだ言いつつ（そして鈴に言われつつ）も鈴を二人から守っていたからだと思われる）。

まあ、今の俺達に近づいたら捕食されるか爆殺されるかの二択だから当たり前かもしれないが。

そして今、放課後。クラス代表になった以上は中途半端にやるわけにはいけないので、第三アリーナに特訓に来ていた。セシリアと模擬戦をする予定だったのだが……………なぜいる箒。

「え……………？」

「な、なぜそんな驚いたような顔をする！？」

「いや、だって篠ノ之さん。あなた……………」

「ふん。この『打鉄』のことか？ 事前に申請を出しておけば訓練機の使用許可くらゐ（箒ノ篠ノ之さん）がまとも（だ／ですわ）！』
どついう意味だ貴様らあ！！」

いや、まんま言葉通りの意味だ。

「ああ、そつえば貴女も『一応』は恋する乙女（笑）でしたわね。

……本当に一夏さんに恋してるのかしら？」

ん？ セシリアは今なんて言った？ なんとなく篤が貶された気はするんだが。

「し、失礼な！（笑）とはなんだ（笑）とは！ 私はいつでも一途に想い続けているわぁ！」

何をカミングアウトしてるんだ篤！ レンのことか！？ というか――

『ダウト（ですわ）！！』

鈴にも手を出そうとしてるじゃねえか！

「否定された！？ こんなにも想ってるのに否定された！？」

いや、アレは一途とは言えんだろ。

「……正直、私にもどうするべきなのか判断に困りますが、どうか普段のアレに自覚がないのかとか言いたいことはありますが、ひとまず今は……あなたが泣いて謝るまでブルー・ティアーズを撃ち続けようと思います」

なんでこっち見てそんな事言うんでしょうセシリアさん？

「一夏………kill」

目が死んでますよ篤さん。しかも不穩。

「自業自得とはいえ、本人に恋心を全否定なんてされたらああもなりますわよ」

まだISを起動してないから小さく呟かれても聞こえないって！
こういう時頼れるレンは教材作りに部屋に戻ってるからなあ……
…（いまだに勉強会は続いていたりする）。

「かくゴおッ！」

簾が踏み込んでってえ！？

「死ぬわっ！　まだISを起動してないんだぞ！？」

とりあえず両腕と雪片を緊急展開して受け止める。身体能力的に受け止められないので勢いを利用して後退、距離を取って白式を――

「今ですわ！」

「言ってるそばから撃つなセシリア！」

ライフルを向けられた瞬間、全力で左に飛ぶ。……おい、生身の人間に向かってBTまで使って一斉掃射するか普通？　そこら辺のビルなら倒壊するレベルの破壊力だぞ？

「いえ、一夏さんに白式を展開されたら勝機はないので」

サラッと情けないことを言うな！　代表候補生のプライドはどこへ行った！　貴族の誇りはどうした！

「人には時として、プライドを捨ててでもなさなければならないことがありますのよ」

それ今じゃなきゃだめうおわ!?

「……………きる」

圧倒的な身体能力を盾にひたすら攻め込んでくる箒と、その隙を潰すようにライフルとBTで牽制してくるセシリア。白式出す時間もねえよ!

少年奮闘中。

結局、リアル鬼ごっこ(鬼畜仕様)は一時間半に及んだ。集中の途切れから隙を見せた箒を零落白夜で沈め、ライフルとBTのエネルギーをほぼ使い果たした(ミサイル型含む)セシリアを白式(お陰様でエネルギーは満タン)を展開した俺が切り捨てて終わりとなった。

ちなみに気絶した箒はセシリアが担いで行った。なんであんなに俺に運ばせたがらなかったんだろうな?

「さ、さすがに死ぬかと思っただぜ」

特にミサイル型を撃ち込んできた時とか。腕部装甲なかったら上半身が消し飛んでたぞ?

「お、お疲れ様。…………元から無茶苦茶とは思ってたけど生身でIS落とすってなによ? あの篠ノ之とかいう変態も、IS操縦に慣れてないだけで、接近戦なら私以上だったのに……………」

鈴、タオルとスポーツドリンクは確かに嬉しいけどな？

「必死だったからな？　なんとかしないと俺死んでたからな？　落とさないと俺の上半身が消滅してたからな？」

一応白式の補助があつたからこそだぞ。完全な生身でISを制圧できるのは千冬姉くらいだからな？　むしろ第《障害物》が突撃してこなければセシリアに蜂の巣にされてたっばい。

「いや、私としてはミサイル（第三世代特殊仕様）を殴り飛ばした一夏の理不尽さにもツツコミたいんだけど」

「コツさえ掴めば案外行けるもんだぜ？」

「そんなんあんたくらいよ！」

「まったく……」と頬を膨らませる鈴がやけに可愛く見える……
……　なんか、女になった、って感じだな。

拗ねるちびっ子を見て興奮する一夏。

（21）への目覚めは順調なようだ。

「いい加減にしろやあー！」

神《作者》 あー！　そんなに俺を口リ斑にしたいのかあー！？

（はい、いつかレンをメインにR18を、と考えているので　by
神《作者》）

「え、あ、う、ごめ……ごめんな、さ………」

鈴に誤爆したあ！？ 泣くな鈴！

「す、すまん、鈴に言ったわけじゃないんだ！ ただ……ただ、ちよつと電波を受信しただけなんだ！」

涙を流し始めた幼馴染みを安心させるために抱き締める。……
他意はないぞ？

「ほ、ほんと？ ……嘘じゃない？ 私のこと嫌いになったり……捨てたり、しない？」

幼馴染みに女性を感じた直後に涙目上目遣い涙声とか！ 不安そうな目で縋るように俺を見つめながら身体を預けてるし！ 俺がどんだけこの色々溜まる環境で禁欲生活送ってると思ってるんだ！？ こちらら聖人もびっくりするほど忍耐力振り絞ってるんだよ！

「ああ、俺が鈴を嫌いになるわけないだろう？」

だからその嗜虐心をそそる目をやめてください。……最近自分が変態であることを否定できなくなってきた。

「私を、捨てないで、一夏。友達でもなんでもいいから、私を、捨てないで……お願い」

なんで、そんな事を言うんだ？

「なにか、あったのか？」

さっきまでの興奮が嘘のように引いていく。誰だ？ 誰が俺の幼

馴染み《鈴》を泣かせた？

「そ、それより！」

強引に話を逸らされた。……………まあ、無理には聞かないさ。緊急事態ならともかく、な。

「なんだ？」

「少し、汗臭いわよ？」

今それを言うか！？

「まあ、嫌いじゃないけど」

鈴は活発だからそうだろうけど……………。

「帰ったらシャワー浴びるわ。……………先に使わせてもらえるよう幕にどうにか交渉してみるか」

たまにはいいよな、うん。

「……………待ちなさい」

「どうした？」

「今、なんて言った？」

鈴って耳悪かったっけ？

「どうした？」

「もっと前」

「そうか、格好つけてるところ悪いが全く似合っていないぞ？」

「前すぎる！ もっと最近！」

「帰ったらシャワー浴びるわ」

「もうちょい前」

「待ちなさい」

「それは私の台詞」

「ここは俺に任せて先に行け！」

「いつそんなこと言ったのよ……………」

うお、鈴がジト目だ。……………さすがに、異性と同居してるなんて大っぴらに言いふらすことじゃないよな？

「一夏、あんた私になんか隠してるわね？」

ニコニコと聞いてくる。ま、まずい、誤魔化さねば。

「ナ、ナンノコトヤ」「一夏、先に部屋に戻っているぞ」……………」

扉の外から投げかけられる言葉。硬直する笑顔（中国産）。

「ああ、実は俺の部屋が筭と同室だな？ 寮長が千冬姉だから、気心の知れた幼馴染みと一緒にしてやろうという心遣いだと思うんだ？ 別にやましいことはなにもしてないし、なんとか上手くやってるから心配しないでいいぜ？ それじゃ、俺は部屋に帰るな」

まくし立てるように現状を説明して、離脱。鈴が再起動する前に全力で避難する。鈴、純情なせいか男女関係的なものに厳しいからなあ……。なんと羞恥から流した涙と共に青竜刀片手に追い回されたことか。誤解なのに。

「気心の知れた……。つまり、幼馴染みならいいのよね？」

決意した。

「ウェルカム！」

「やっぱやめるわ！ 手を放しなさい、放して！ 放しなさいよ！ 放してくださいお願いします！ いやああああ助けて一夏ああああああ！」

なんか予定調和な気がする。ん？ 決意崩壊？ なんのことだ？

1・セカンド幼馴染み襲来。

2・私も今日からここに住むわ！

3・ウェルカム！

4・鈴の貞操とかその他諸々、大事なものを賭けたバトル勃発。
↑今ココ

「現状を分析するより先に助けなさいよおおおおお！　って
なによこの力！？　あんたホントに女子高生！？」

「鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん鈴たん
ん」

まあ仮にも全国大会優勝者だしな。おまけに体術も修めてるから
単純な筋力だけじゃないし。接近戦で箒に適う女子高生なんて世界
でも一握りだろうな。

「ちよつ、一夏！？　だ、だいぶ本気で怖いんだけど！？　現実逃
避しないで帰ってきて！　そして助けひゃっ！？　どこ触ってん
のよ変態！　ってなんで嬉しそうなのよ！？　ひっ！？　い、一夏、
助け」

トッ。

「きゅっ」

鈴が本気で泣きそうなので箒を気絶させる。

第……どうして、こうなってしまったんだろう？

「あんたが早く止めないからよ！ 本気で怖かったんだからね！」

ブォン！

「うおっ！」

相変わらず神出鬼没な青竜刀だなオイ！ それこそさっき使ったけばよかったじゃねえか！

「あんた以外になんて危なすぎて使えるわけないでしょ！？」

「俺も斬られたら死ぬぞ！？」

「どうせ当たんないくせに！」

八つ当たり気味に、ぐだぐだに始まった追いかっこは鈴の体力が尽きて倒れるまで続いた。そろそろ日付が変わる時間だからこれ三時間は青竜刀片手に俺を追い回していたことになる。……タフだなオイ。

眠ってしまった鈴を両手で抱えて部屋まで運ぶ最中、ふと気づいた。

「あれ、晩飯は？」

現在十一時、もちろん食堂は閉まっている。

………腹、減ったなあ。

十七話 「一夏のぶっ飛び具合は理解していたつもりだったけど……甘かった
通りすがり1です。

正直な話、今話は全くといいほど自信がなかったりします。
つまらないと思ったら言うてくださると助かります。

応援してくださる方々がいらっしゃるのに不甲斐ない事だとは思
いますが、よろしく願います。

読んでくださり、ありがとうございました。

十八話 「月夜の邂逅……いや顔合わせてないけど」 一夏（前書き）

通りすがり1です。

今話は、完全にオリジナルなので非常にクオリティが下がっています。すいません、作者の技量不足です。

今回はほぼ一夏とオリキャラの独壇場です。感想などで聞かれた時は再出場は三巻後、と答えていましたが一度出しておいたほうが良いと判断したので、出させていただきました。

この話は特にR15かもしれません、苦手な方はお気をつけください。

十八話 「月夜の邂逅……いや顔合わせてないけど」 一夏

今でもたまに星を見る。

星の名前、星の位置、星座の名前、星座の成り立ち、どれも全く興味がないのに、時々自分でも驚くくらい無性に星を見たくなる。

理由はわからないけど、夜空に浮かぶ星達をただ無心に眺めている。

そうすれば、そうしていれば、いつか、大切な誰かに逢える。そんな根拠のない思いを、十年以上持ち続けてきた。

鈴をルームメイトに預けて外に出る。汗だくになった身体を冷やしたかったのと、久々に星を見くなったのでこれ幸いにと散歩に出かける。

ところで、なんで鈴のルームメイトは汗だくになって疲れ切った俺と鈴を見てあんなに顔を真っ赤にしてたんだろうな？　鈴が寝てる理由を聞かれたから「鈴が疲れきるくらい運動した」って言っただけなのに。はて？

つらつらとそんな事を考えながら夜道を歩く。もう日付も変わった、そろそろ帰ろうか。

『——』

「ん？」

今、なにか声が？

「気のせい、か？」

声はもう、聞こえてこない。

「……………」

耳をすませる。さすがに白式を展開するわけにもいかないのだから、全力で聴覚を研ぎ澄ます。……………なんでこんなに必死になってんだ、俺？

『いつか、大切な誰かに逢える』

……………十年間外れ続けてきた予感、今でも信じてんのかよ、俺。

『……………』

！ 聞こえた！

声がする方を特定しながら進む。二分ほど歩き辿り着いたのは、一本の大木がポツンと佇む広場だった。気配を消す。

俺がいる位置から木を挟んだ反対側。そこから声が響いている。

「抱き締めて… もう一度だけ

うつむいた言葉と 君の影

柔らかな忘却の先

いつか本当の愛で

君のことを抱きしめたい

さようなら……………」

綺麗な旋律が響く。

「歌……………」

悲しい、別れの歌。愛しいと想いながらも、愛したいと願いながらも、決して叶わない想いを伝える恋の歌。

ピタリ、と歌が止まった。

「誰……………」

柔らかい声。レンの声を少し甘くしたような（レンは少し凛々しい感じ）可愛いソプラノボイスには、微かに怯えが含まれている。

「あつ……。す、すまん、俺は織斑一夏。綺麗な歌が聞こえたからなにかと思って、つい」

これ以上怯えさないため、ひとまず動かずに話しかける。

「……………」あ、ありがとうございます？」

……………まあ警戒するよな、普通。

「いや、こっちこそ良いもの聞かせてもらったよ。邪魔しちゃったか？」

「ううん、そんなことない！ 歌を綺麗って言うてくれて……嬉しかった」

慌てたように言葉を返してくれる。……俺、彼女からすれば不審人物みたいなものになあ。

「ところで、名前聞いていいかな？」

「……………」

あれ？ 無視？

「……ごめんなさい。事情があつて名前を教えるわけにも、顔を見せるわけにもいかないの」

「事情？」

顔も？ どんな理由だ？

「うん。説明するわけにはいかないけど、絶対に無理。あ、別に犯罪者だったりはないよ？」

「そうか……………それじゃ、俺はなんて呼べばいい？ あ、俺は一夏でいいぞ？」

「じゃあ、いちかつて呼ばせてもらうね」

少し舌つ足らずな発音。

……………？ これ、デジャヴか？ なんでだ？

「私は……………シロ、って呼んでほしいな」

シロ？ まるでペットみたいな……………またデジャヴ？ さっきから、というかシロの歌を聞いてからなにか言いようのない感覚が……………。

「えっと、そろそろ帰りたいんだけど」

思考の渦を抜け出す。人と会話している最中に考え込むなんて、失礼だな。

「ごめん、なんだって？」

「そろそろ帰らないといけないの」

時計を確認。日付が変わってからそろそろ一時間が経つ。

「うおっ！ もうこんな時間か！」

どうやら、自分が思っていたよりもシロとの会話を楽しんでいたようだ。

「申し訳ないんだけど、この木に顔を押し付けてくれない？」

「えっ！？」

「あの……………顔を見られるわけにはいかないから」

あ、そうか。

「これでいいか？」

木に歩み寄り、額を押し付ける。

「目も、つぶつてくれる？」

声が近い。手を伸ばせばすぐに届くような場所に、名前も顔も知らない異性の『友人』がいる。それが、とても不思議だった。

「つぶったよ」

固く瞼を閉じる。

「色々お願いしてごめんね。ありがとう、それじゃあ」

軽い足音が俺のすぐそばを通り過ぎる。迷いなんて欠片もなく、俺の事を省みる様子のない気配をなぜか悔しく思った。

「シロ！」

だからだろうか？ 思わず声をかけてしまったのは。

「い、いちか？ どうしたの？ 大声上げて」

ビクツと驚いたような気配と共に、狼狽したような声を上げるシロ。

「また、シロの歌を聞きたいんだけど」

ポロリと、素直な言葉が零れ落ちた。

「え？」

「だめか？」

「……………」

……………仕方ないよな。いきなりこんなこと言われても困「毎週、十二時から一時まで」る……………へ？

「は？」

「私はその間、ここに居るから。五分くらい遅れて来て」

えと、それって。

「いいのか？」

「うん。いつでも歌ってるわけじゃないけど、それでいいなら。ただし誰にも私のことを言わないで」

「サンキュー、シロ！ 良かった……………とりあえず不審人物とは思われてなかったみたいだな」

「え？ 不審人物？」

「おう、夜中人気のない広場で面識のない女の子に近づくなんで、まるっきり不審人物っぽいだろ？」

「……………ああ!？」
ホントだ!？」

気づいてなかったのかよ!

「で、でもいかなら信頼できるし、大丈夫!」

……………いや、信頼してくれるのは嬉しいんだけどさ。なんでレン
といい初対面の俺をそんなあっさり信頼するんだ?

「あ、ごめんねいちか、もう時間だから行かなくちゃ」

「わかった。じゃ、またな」

「! ……………うん、『またね』!」

軽い足音が、遠ざかって消えた。

「んじゃ、俺も帰りますか」

そっぴゃ、飯食ってないんだよな。

ふと思いついて、余計空腹感が強くなった。

……………来週か。

歌う。

泣けないから、泣いてはいけないから、代わりに歌を歌って感情を発散する。

ずっとそれ続けてきた。

泣いてしまえば、後悔していることを認めてしまうから。

覚悟はしていたし、他のなによりも彼の幸せを一番大切に思っていることは間違いない。

けれど、どうしても想像してしまう。彼の隣で笑っている自分を。彼が笑いかけてくれる自分を。彼が友と認めてくれる自分を。彼に■する自分を。彼を■する自分を。彼に■される自分を。

彼と■し合う、夢みたいに優しい未来を。

弱くなってしまう。

彼の幸せに全てを捧げようと、強く固めた決意が崩れていく。

我慢できなくなる。

叶わない、叶ってはいけないと、蓋をした想いが溢れていく。

泣いてしまえば、きっとこれは止められない。

だから私は歌う。

いつか彼と二人で見た星空の下で。

弱い自分を戒めるように、叶わぬ■を諦めるようにと、悲恋の、別れの歌を。

「歌……………」

声がした。

一気に顔から血の気が引いていく。

顔も姿も、名前さえ、私は誰にも知られるわけにはいかない。もしも背にしている木を回り込まれたら、すぐにバレてしまう。

それに……………怖い。日付も変わった深夜、人気のないこんな広場に何の用があつて来たんだろう？ あの手ノ之とかいう人みたいなのが来ていたら……………。そう考えると震えが止まらない。

「誰……………」

「……………」

沈黙、恐怖心が募っていく。

「あつ…………。す、すまん、俺は織斑一夏。綺麗な歌が聞こえたからなにかと思つて、つい」

彼だ。

恐怖心が霧散した。

怖がらせないために、努めて柔らかい声で話しかけてくれる彼が■しい。要らぬ警戒をさせないようにと、その場を動かさず言葉を返してくれる彼が■しい。顔も見せずに急な不躰な質問をした私に、律儀に返答してくれる彼が■しい。

なによりも。

歌を綺麗だと言ってくれたことが、なによりも嬉しい。

「あ、ありがとうございます?」

なんとか絞り出した声は、あまりの歓喜に少し震えていた。

彼が私を認めてくれた。

彼が私を知ってくれた。

彼が私を誉めてくれた。

要らないと思っていたのに。

私は、なんて浅ましい人間なんだろう。

彼が幸せであればそれで良かったはずなのに、心の底から湧き上がってくる喜びをのうのうと享受しようとしている。

こうなるとわかりきっていたから避けていたのに、どんな運命の悪戯だろうか? 私は、彼に出逢ってしまった。

想定外の事態に困る理性よりも、また逢えた喜びに震える感情の方が遥かに強い。

仕方がない、偶然だから、わざとじゃない。そんなこと《言い訳》を囁く私が心のどこかにいて、それに乗せられようとする自分がいる。

「いや、こっちこそ良いもの聞かせてもらったよ。邪魔しちまったか?」

「ううん、そんなことない！ 歌を綺麗って言ってくれて……嬉しかった」

嘘。いちは他のなによりも私の邪魔をしている。……それが全く不快ではないどころか、ここ十年で一番私を喜ばせるもののが余計に拍車をかけてる。

「ところで、名前聞いていいかな？」

……いちかに名前を聞かれるのは、ちょっと辛いかな。

「……ごめんなさい。事情があつて名前を教えるわけにも、顔を見せるわけにもいかないの」

「事情？」

これはホント。誰よりも、いちかにだけは絶対に知られるわけにはいかない。

「うん。説明するわけにはいかないけど、絶対に無理。あ、別に犯罪者だったりはいしないよ？」

犯罪者かなにかに間違われて捕縛なんてことになったら切なすぎる。……いちかが私を捕まえて、閉じ込めてくれるならそれはそれで……。

「そうか……それじゃ、俺はなんて呼べばいい？ あ、俺は一夏でいいぞ？」

「うひゃあ!？」

「じゃあ、いちかって呼ばせてもらっね」

思わず妄想の世界へ飛び立ってしまったせいで、素で返してしまった。…………顔合わせてなくてよかった、さつき絶対顔弛んでたよ。

「私は…………シロ、って呼んでほしいな」

なにやってんの私!？ が、願望が！ 願望がとどまることを知らない！ 思考《理性》が樂園^{エデン}に出張していたせいで本能《感情》が暴走してる！

「えっと、そろそろ帰りたいんだけど」

いちかが考え込んでいる間に、サラッとこぼしてしまった私にとって本名より大切な名前をいちかの記憶に留めなかったために早々に退却を決意。ああもう、残念がるな私！ こうやって言葉を交わして私という存在をいちかが認識してくれただけで望外の喜びでしょうが！

まあ時間が押しているのもホントだ。一時には帰っていないといけないからもう五分もない。名残惜しいがここでお別れ。もう二度と逢うこともない。

名前に反応してくれなかったことが、少し心残りだけど。

…………我ながら、なんという矛盾。絶対に気づかれてはいけないというのに、私は今気づかれることを望んだ。ホント、救いような人間だ。

「ごめん、なんだって？」

聞いて！ 後ろ髪引かれる思いで！ 断腸の思いで言ったんだから！

「そろそろ帰らないといけないの」

「うおっ！ もうこんな時間か！」

気づいてなかったんだ……。

「申し訳ないんだけど、この木に顔を押し付けてくれない？」

「えっ！？」

うう…… 絶対変な奴だっと思われてるよ。

「あの…… 顔を見られるわけにはいかないから」

それに、いちかの顔を直接見たりなんかしたら自分が何をするかわからない。

「これでいいか？」

素直に従ってくれるいちか。…… 優しいのは良いことだけどさ、もうちょっと警戒心持とうよ。

「目も、つぶってくれる？」

無理だとはわかってるけど、この台詞はもっとロマンチックな場面で言いたかったなあ。

「つぶつたよ」

木の陰から歩み出る。

「色々お願いしてごめんね。ありがとう、それじゃあ」

心の中で、さようなら、と付け足していちかの脇を早足で抜ける。
止まってしまったら進めなくなるから、一心不乱に、振り返らずに
歩くことだけに集中する。

「シロ！」

――。

「い、いちか？ どうしたの？ 大声上げて」

なにも、考えられない。

私は今、何を言っている？

どうでもいい。

私は今、何を考えている？

どうでもいい。

いちかが、私の名前を呼んでくれた。

いちかがくれた、名前を。

嗚呼、なんて——幸せ。

ぞんざいな呼び方には、まるでペットに向けるような気安さと、奴隷に向けるような傲慢が同居している。

ペットでも奴隷でもなんでもいい、彼の側にいたい。

彼に命令されたい。彼に支配されたい。彼に束縛されたい。彼に使ってもらいたい。彼に閉じ込められたい。彼に征服されたい。彼に傷つけられたい。彼に苦しませてもらいたい。彼にいじめられたい。

——彼のモノになりたい。

彼に名前を呼ばれた瞬間、彼への■を起因とする醜い欲望が溢れ出した。

純粹、というのも少し違う気がするけど彼の幸せを最優先しようと思う感情とは明らかに違う、自分本位の感情。
うすうす感づいてはいたけど、いちかが名前を呼んだ瞬間、確信に変わった。

（これとは関係ない、きつと私自身が元から持っていたもの）

思い出のアクセサリーを握りながら、思う。

「また、シロの歌を聞きたいんだけど」

え？

「え？」

「だめか？」

そんな、こと？ 正直、今命令されていたらなんでも（直接いちかを害するようなこと以外なら）言うことを聞いていた。

顔を見せるとか言われても従っていたし、死ねと言われたら自殺していた。

「毎週、十二時から一時まで」

そして思考《理性》が停止している間に、また本能《感情》が勝手に暴走した。

「は？」

断らなきゃいけないのに。

「私はその間、ここにいるから。五分くらい遅れて来て」

私は彼に近づいちゃいけないのに。

「いいのか？」

いいわけがない。

「うん。いつでも歌ってるわけじゃないけど、それでいいなら。ただし誰にも私のことを言わないで」

私は……最低だ。

「サンキュー、シロ！ 良かった……とりあえず不審人物とは思われてなかったみたいだな」

自己嫌悪に苛まれている私の耳に、予想外の言葉が届いた。

「え？ 不審人物？」

「おう、夜中人気のない広場で面識のない女の子に近づくなんで、まるつきり不審人物っぽいだろ？」

・夜中に徘徊。

・気配を消して女の子に接近。

・見ず知らずの女の子に声をかける。

「ああ！？ ホントだ！？」

意外な事実にはショック！

「で、でもいかなら信頼できるし、大丈夫！」

というかいちかならむしろ襲われたらまずいんだって！ 落ち着いて私の本能《感情》！

「あ、ごめんないちか、もう時間だから行かなくちゃ」

は、早く離脱しないとホントに何をやらすかわからない！

「わかった。じゃ、またな」

また……………か。

「うん、『またね』！」

私は、帰るべき場所へと帰った。

十八話 「月夜の邂逅……いや顔合わせてないけど」 一夏（後書き）

通りすがり1です。

気づいた方もいらっしやるかもしれませんが、シロの歌っていた歌はあれです。『桜の枯れない島で繰り返される物語』の？、そのアニメ版の挿入歌です。

作者はあの作品が大好きです。アニメやライトノベルを好きになった最大のきっかけが、当時放映していたこれです。

その影響で、この作品にも多少出てきます。というか行きます、あの島。

さて、それではありがとうございました。

十九話 「戦闘開始よ！ って、ちょ、ちょっとタンマ！ まっ」

鈴（前書き

こんにちは、通りすがり1です。

週一更新を目指すと言っておきながら、一月と少しで破ってしまいました。楽しみにしてくださった方々、申し訳ありませんでした。

言い訳になるのですが、作者は夏期から塾に通うことになり、その手続きなどに追われた結果昨日中に投稿することができませんでした。

断じて数日前に買い忘れ、昨日買ったロウきゅーぶ？にはまってしまったわけでも、ロウきゅーぶのアニメを見ていて遅れたわけでもありませんヨ？

それはさておき、これからは作者が塾に通うことになったのと、受験生ですのでそろそろ本腰を入れて勉強しなければならぬなどという理由から更新が遅れる可能性が高いです。

自分勝手な理由ですが、どうかご容赦ください。

今話鈴ファン注意です。

十九話 「戦闘開始よ！　って、ちょ、ちょっとタンマ！　まっ」　鈴

一夏を追いかけてから数週間。一夏とはあまり会えていない。

べ、別に一夏の近くにいつもいる篠ノ之とかいう変態と白いチビが怖いわけじゃないわよ！　違うんだからね！？

それはともかく
閑話休題。

まあ、複雑な諸事情があつてあの日以来一夏とはまともに会話すらしていない。そういえば、あの日からルームメイトのティナが時々顔を赤くして私を見てるけどなんなのかしら？

「なんとかしなさいよ！」

「んなこと言つたつてなあ……………」

そんな理由で、やつとの思いで手に入れた接触できる数少ない機会に、わざわざ一夏に直談判しているのに…………この唐変木！

「あの篠ノ之とかいう変態、私を見かける度に全力で捕獲しにくるのよ！？　なによあの身体能力、昨日なんか危うく空き教室に連れ込まれるとこだったのよ！？」

もしISを持ってなかったらと考えると…………ゾツとするわね。

「だ、大丈夫か？　顔真つ青だぞ？」

「せめてあの変態だけはどうかして……………」

本当に、切実にお願いします。なんなら土下座の一つや二つするわよ？

「すまん。どうかそれだけは止めさせる」

一夏もここまでとは思ってなかったみたいね。頬が引きつってるわよ？

「頼むわよ、マジで。割と本格的に貞操の危機を感じるのよ」

一夏もあれだけ積極的になってくれたら………なんかそれも嫌ね。ところで、と急に真面目な雰囲気になる。なにかしら？

「あー、鈴。お前レンに何か言わなかったか？」

は？ レンってあのチビッコよね？

「色々言われた記憶はあるけど？」

へたれとかミニマムとかツンデレとか。言いたい放題………今思いついても腹が立つわあの毒舌チビ………！

「うーん。レンの奴、鈴と顔合わせてからずっと不機嫌なんだよな」

「不機嫌？ いつも無表情じゃない。能面みたいに」

もの凄いプレッシャー付きで。あ、鳥肌が………あ。

「いやあれで意外と表情が………どうした、鈴？」

「い、いや、なんでもないわよ！？ 本当にまったくこれっぽっちもなんにもないのそれじゃ私用事思い出したから行くわねバイバイ！」

明後日の方向に向かって全速前進！　なんか一夏の背後から湧いてくる蛆虫を見るような絶対零度の視線（と雰囲気）で私を睨みつけながら（無表情だけど）『首を掻き切る』ジェスチャーをしている幼女がいるけど、私の行動との関連性は一切ない。ないっとならない！

鈴の必死の嘆願（とさえ言えるものだった。あんな必死になる用事ってなんだったんだ？）以来、箒の動向には目を光らせている。

「はっ！　鈴さんのけは」

トッ。

「はあはあ、レ」

トッ。

「鈴たん見つ」

ドッ。

「レンたんの寝顔今見に行」

ドッ。

「鈴たん用トラップはここにせっ」

ゴッ！

「レンのISSー」

ドゴォ！

「り」

ゴガアッ！

結果、あまりにもきりがないので、箒が目を輝かせたら取りあえず気絶させるというのが最近パターン化してきている。徐々に音が激しくなっているのは俺の感情の発露、ではなく単純に箒に気絶耐性が付いてきたので出力を上げるしかないだけだ。殴る手も痛いんだけどなあ…………。

とまあそんな感じで対箒マニュアルを確立する毎日を送っていると、試合の日になっていた。

「……………」

まずい。

「……………」

「……………」

具体的にはすぐ近くにレンがいるのに、箒が一切アクティブな行動を取れないくらい状況は切迫している。

レン様がお怒りだ。

兆候はあった。鈴と喧嘩(?)したあの日から、今日に至るまでレンの機嫌は下降の一途を辿っていた。

原因は不明。……………だったらどれほど良かったことか。予想がついてしまう分、余計に迂闊なこととはできない。

「あのー……………レン？」

「……………」

虫けらを見るような、温かみを一切感じさせない冷ややかな視線を送る黒い瞳に黙殺された。後ろでナニカが悶えているので腕だけを動かし意識を刈り取る。せめて最後までシリアスを貫き通すこともできないのか箒よ。

「……………」

「……………」

見つめ合う俺とレン。冷や汗が止まらない。ついでに箒の痙攣も止まらない。確認もせずに打撃したのはまずかったか？ まあ箒な

ら大丈夫か。（なぜか）カレーシスターくらい不死身だし。

「…………織斑」

「お、おう!？」

情けないくらい声が震えてやがる……………これが恐怖だというのが!？」

「この二週間、織斑はどれくらいISSに乗った？」

「……………」

0です。

「そうだ、0だ。潔いくらい、全くの皆無だ」

「……………はい」

あれ？ 今口に出していたか？

「どういうことだ？」

「それは……………色々あって」

「そうか。色々あったか」

目が怖いよレン。せっかく可愛い顔してるんだからスマイルスマイル。

「おりむら？」

「すみませんでした」

反射的に土下座。

プライド？ そんなものは狗にでも喰わせてしまえ！

もうわかったと思うが、レンが怒っている理由は最近俺がISの訓練を休んだからだ。主に箒の騾とか箒の騾とか箒の騾とか暴走するセシリアの対処とか突っかかってくる（そしてレンに撃退されて落ち込む）鈴の相手とか箒の騾とかのせいで。

箒とセシリアはすでにレンに怒られ（約一名悶えていた、気絶させた）、俺も流されすぎだと叱られたばかりだ。

「はあ」

レン、溜め息をつく和幸福が逃げるらしいぞ？

「……………言いたいことは色々あるが、まあいい」

やっとレンの機嫌が直ってきた。なんか仕方のない弟を見る姉のような視線（経験有り）が向けられている気がするけど俺は気にしない。バンザイ！

それより、とレンが話を続ける。

「……………気をつける、織斑。この試合はなにか嫌な予感がする」

片手で眼鏡をいじりながら不安そうな口調で告げられた。この仕事はレンが弱気になった時のサインだ。レン自身が気づいているかは知らないが。

「どうしたんだ、いきなり？」

レンは俺の実力を知っている。慢心するわけではないが、代表候補生とも十分に渡り合えることはわかっているはず（セシリア戦が良い例だ）、最近の訓練時間が減っていたとはいえあっさり負けることはないし（一応甲龍（シェンロン）のスペックも調べてある）、レンが試合の勝敗をそんなに気にするようにも思えない。

「感じないか？ 上手く言葉にはできないが……不安になる」

正直、確かにそんなものを感じる。やけに不安を掻き立てられる気配だ。
だが。

「心配すんな、俺は絶対戻ってくる。さて、行ってくるぜ」

そんな表情、お前にはしてもらいたくないんだよ。

「……ああ、無理はするなよ」

……不謹慎だが、レンは怯えたような表情も可愛かった。あれ？ 矛盾してないか？ ……まあいいや。

「織斑一夏、白式！ 出撃するぜ！」

ちなみにここはピットの中でクラス対抗戦直前、セシリアはちゃっかり避難済みだったりする。……薄情者！

この試合、第二アリーナでの一組《俺》と二組《鈴》の試合はクラス対抗戦の第一試合だったりする。こんなドンピシャなタイミングとは、どんな運命のイタズラなんだか……。

「来たわね、一夏！」

数メートル先に浮かぶ鈴が警戒心も露わに叫ぶ。猫かお前は。

「おう、来たぜ」

警戒の表れか、異常に肥大化した青竜刀の刃を柄に二つくっつけたような武器をこちらに向けている。…… ISだからこそ扱えるよな、あれ。なんか分離して双剣にもできそうだ…… なんていう浪漫武器。いや、威力はありそうだけど取り回しに難がありすぎる、余程実力に差がなければ相手に決定打なんて与えられないぞ。

「一夏、あんたの理不尽さはよく知ってるし、実際馬鹿みたいに強いのも知ってる」

なんか酷い言われようしてないか？

「正直な話、あんたと戦うなんてメチャクチャ怖いんだけど」

あ、ヘタレが出た。

「私にも色々あってね、負けるわけにはいかないのよ」

中国の代表候補生にまでなったって話だから、そこらへんだろ
うな。

「だから」

肩の辺りに浮かんでいる歪な涙滴から突起物を生やしたような非
ンロック・ユニット
固定浮遊部位、第三世代型兵器・衝撃砲『龍咆』が輝き始める。
……普通にハンマーみたいにも使えそうだな。

「全力で行くわよ！　一夏！」

「もちろんだ！　俺も全力で行くぜ！」

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーツと言うブザー音と共に、戦いの狼煙はあがった。

はつきり言っつて、勝機はほとんどないだろうなあ。

目の前五メートルの位置に浮かぶ幼馴染みを見ながら、なんと
なく鈴は思った。

一夏の白式は、超近接特化型の浪漫溢れる愉快機体だ。千冬並
みの《人の枠を超越した》技量がなければただの的にしかないよ
うな、欠陥機どころか兵器とカウントできるかも怪しい代物。
カタログスペックを見る限り燃費も異常に悪いみたいだし（もっ

とも性能もそれに見合ったものだが）、少なくともズブの素人を乗せるような機体ではない。

乗っているのが一夏でなければ、例えば代表候補生クラスであろうとだ完封できる自信が鈴にはある。

それでも、勝てる気はしない。

英国代表候補生のセシリア。彼女と一夏の試合は、普段お世話になっ
ているお節介な彼女からは到底想像できないハイレベルなもの
だった。

彼女は事前に入手していた（つまりIS学園に入学する以前の）
情報とは一線画すレベルで英国の第三世代型兵器フルティアーズを使いこなして
いた。それこそ、BTの本領と言える一対多の戦闘なら、複数の代
表候補生を同時に相手したとしても、圧倒していたと確信をもって
言えるほどに。

そして、一夏はそれを打ち倒した。

初期設定の機体。戦闘をしながらの初期化と最適化。制限された
装備。機体そのものの相性。

不利な要素なんて挙げ始めればきりが無い。そんな条件下で一夏
は（シールドエネルギーの残量はともかく）圧倒的な技量の差を見
せつけて勝利した。

勝ち目は限りなく0に近いだろう。0と言い切ってもいい。

それでも、負けられない理由がある。

代表候補生だから？ 否、一夏は現時点で国家代表になれるだけ
の力がある。セシリア《英国代表候補生》の名誉回復も近いだろう。
IS操縦者としてのプライド？ 否、そんなものは狗にでも喰わ

せなさい。

鈴が負けられない理由はたった一つのシンプルなもの。

賭けをしたのだ、工藤レンと。

事の始まりは一週間前。まだセシリアと一夏の試合映像を閲覧していなかった鈴は、偶然廊下で遭遇したレンにこう持ちかけた。

「賭けをしましょう、チビッコ。敗者は勝者の命令を一つ、国家機密に関わるような事以外何でも聞く。どう？」

浅はかだった。武術の腕がISの戦力の決定的な差ではないと高を括っていた。

まさか操縦技術も負けているとは思ひもなかった。

そんな経緯で、彼女は負けるわけにはいかない。

ちなみにレンはこの賭けに負けるとは毛筋ほども思っていないので、この件と嫌な予感の件は欠片も関係なかったりする。

双天牙月を威嚇するように構える。

それを全く意に介さず、自然体で振る舞う一夏の余裕が憎らしい。

「来たわね、一夏！」

私から五メートルの位置で止まる。嫌になるくらい正確ね。

「おう、来たぜ」

その手に持っているのはかつて最強を誇った浪漫武器……むしろあれで世界大会を勝ち抜いた千冬さんがおかしいんだけどね。織斑には化物しかないのだろうか？

「一夏、あんたの理不尽さはよく知ってるし（最近特に強く思い知らされた）、実際馬鹿みたいに強いのも知ってる」

生身でIS撃破したりとか。IS学園に来てから余計に一夏の理不尽さが理解できた気がするわ。

「正直な話、あんたと戦うなんてメチャクチャ怖いんだけど（特に武装の危険度的に）」

セシリア戦のあれ、もうちょっとでセシリア死んでたわよね？

……本人は気づいてないけど。

「私にも色々あつてね、負けるわけにはいかないのよ」

賭けに負けたらこれから先一夏に近づくな、なんて命令されかねないしね……私自身そう命令する予定だし。

「だから」

龍咆を起動。開始と同時に先手を取る！

「全力で行くわよ！　一夏！」

「もちろんだ！　俺も全力で行くぜ！」

できれば手加減して！　特に雪片の出力！

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツと言うブザー音と共に、戦いの狼煙はあがった。

開始と共に機関銃のごとく不可視の弾丸をバラまく鈴。近接戦に持ち込まれれば即座に敗北する自分が容易にイメージできるので、龍咆で牽制しつつ（牽制以上の効果があるとは思えない）全力で後退する。

ドンッ！

「へ？」

それに対して、一夏が取った行動はひどくシンプルなものだった。距離を取られれば龍咆による中距離制圧戦になり、継戦能力を重視した（つまり武装を長時間使用できる）甲龍を捕らえるには大きな手間がかかる。だから後退する鈴を追いかける。

一発一発は軽いとはいえ、大量に放出される龍咆全てが直撃すればシールドエネルギーを半分は削られる。だから不可視の砲弾の隙

間をくぐり抜け（・・・・・・・・・・）、回避できないものは雪片で斬り飛ばす（・・・・・・・・・・）。

開始直後に空中で踏み込む（・・・・・・・・・・）と同時に行った瞬時加速によって、甲龍のハイパーセンサーでも捉えきれない速度を叩き出した一夏は、鈴に辿り着く一瞬の間にこれらを成し遂げ、龍咆の照準から外れた位置、鈴の懷に潜り込んでいた。

「零落白夜！」

雪片の刀身が淡い輝きを纏う。刃にまとわりつくように高速で循環する輝きは、一夏が燃費向上を目指した結果だ。

セカンド幼馴染みをスプラッタなことにしないために出力は調整済み。身体が上下に泣き別れなんてしない。……………はず。

「多分！」

「不安にしかないわよ！」

試合時間は、二秒を切った。

『試合終了。勝者、織斑一夏』

「……………やっぱり手に負えませんか」

「ああ、開始時に五メートルの距離という時点で詰みだ。あの距離ならそれこそ国家代表でも勝てる人間の方が少ないだろうな」

「馬鹿げた才能ですわね。物語の英雄にでもなるつもりでしょうか？」

「いや、どうも本人は才能を『個性』くらいにしか捉えていないらしいぞ？」

「……………色んな人の心をバキバキ折ってきたんでしょうね」

「ああ。しかも皮肉なことにアフターケアまでバッチリだから、男女問わずに心酔させる天性の人誑しだ。一時的に敵を作ることがあっても最終的には友人になっているか惚れているかの二択だ。不得意分野なんて恋愛くらいしか思いつかん」

「それはまたなんとも……………生まれてくる時代を間違えてませんか？」

「ああ、戦国時代に生まれていれば血を流すことなく日本統一を果たしていたかもしれん。なんせ私が転校する頃には、教師を含め小学校在籍する全ての人間に好意的に見られていたからな。クラスメイトなんて過半数が忠誠を誓っていたぞ」

「……………」

「慣れる、そういう奴だ」

「むしろ篤さんがまともなことに驚いていたんですけどね。レンさんと鈴さんがいないだけでここまで違いますか……………」（ボソツ）

「？　今なにか言ったか？」

「いえ、なにも」

ISを強制解除された（維持するエネルギーも残ってなかった。あと僅かでも出力を上げていれば鈴が分裂していた）鈴（気絶）を小脇に抱え、沈黙する観衆を見渡す。

やべ、やりすぎた？　流れ出す冷や汗が止まらない。さつき（本当についさつき）までエールを送ってくれていた一組のみんなも大口を開けて呆けている。

いや、だってさ？　全力宣言したし。距離をとられたらどうしようもないし。どう考えても白式のコンセプトは『一撃必殺』だし。短期決戦しかないだろ？

やったことは非常に単純だ。PICの応用制御で擬似的に足場を作って、瞬時加速しながら踏み込む。相対速度的にギリギリだったけど、見えないけどなんとなく位置がわかる『………』
・『龍咆を避けるか切り払うかしながら接近して零落白夜で一撃必殺。これがたった一つの冴えたやり方。だから俺は悪くない！』

なんて心の中で言い訳を――

『逃げろ、織斑！　上だ！』

レンからのプライベートチャンネルに一瞬遅れて、俺も壮絶な悪寒を感じ取った。反射的に瞬時加速で離脱しようとする身体を理性で押さえつけ、最大出力で零落白夜を発動させた雪片を頭上に掲げる。

衝撃が走った。

十九話 「戦闘開始よ！ って、ちょ、ちょっとタンマ！ まっ」 鈴（後書き

通りすがり1です。

最初に一言。

鈴ファンの方々ごめんなさい。

一瞬で戦闘が終わったうえに見せ場が素晴らしいくらい消えてしまいました。いや、原作よりそこそこ強化されてるんですよ？ 具体的には、一夏に斬られた一瞬で危つく胴体泣き別れの目に合いかけたことを悟るくらいには。

ちなみに箒はセシリアがアリーナに連行しました。気絶している間に。

箒は変態キャラとして皆さんに愛されているようなのでそのまま貫き通します。目指せ最強の変態キャラ！

次回はおそらくレンが初めて専用機を出します。バトルします。

それでは、ありがとうございました。

……さりげにここ二話は過去最長だったりします。

二十話 「許さない」 レン（前書き）

通りすがり1です。

またもや遅れてしまい申し訳ありません。

今話はガンダムの機体が出ております、嫌いな方はお氣をつけください。

前書きに色々書こうかと思いましたが、今回は書くことがたくさんあるので、まとめてあとがきで書こうかと思えます。アンケートもあるので、読んでいただけると助かります。

二十話 「許さない」 レン

最初から、クラス対抗戦の試合日程が決まった時から嫌な予感を感じていた。

けれどそれは、ひどく曖昧で漠然としたものだ。

具体的に、どういうことが起こるかはわからない。

だから僕は、織斑に「気をつける」と言うことぐらいしかできなかった。

いや、しなかった。

これは、そんな僕への罰だろうか？

『逃げる、織斑！ 上だ！』

試合終了直後に膨れ上がった悪寒を感じると同時に、叫ぶようにしてプライベートチャンネルで織斑に伝える。

間に合わない。

織斑一人ならともかく、例のタレ蜜を小脇に抱えている。

ISを纏っていない生身の人間が白式の加速度に耐えられるわけがないし、アリーナのシールドを貫く砲撃なんて言うまでもない。

だから、織斑は避けない。

そして、光の奔流に飲み込まれた。

幸い、飲み込まれる直前に零落白夜で防御しているのが見えたら、大事には至っていないはずだ。

だが、そんなことは関係ない。

僕にとって、この直感は信じるべき類のものであることは明確だった。

なんとしても、織斑を出場させるべきではなかった。

止められたはずなのに、止めるべきだったのに。

手段を問わなければ、織斑を出場させない方法はいくらでもあった。

だが、それは織斑にとって不愉快な手段でもあった。

だから僕は、織斑に嫌われるのが怖くて実行しなかった。

織斑だから大丈夫だと油断したのか？

強い、まるで物語のヒーローみたいに強い織斑だから、勝手に大丈夫だと思い込んだのか？

そんな保証がないことは、僕が一番よく知っているはずなのに。
なんという愚か者。

僕は、保身のために織斑を危険に晒したんだ。

許せない。

そんな僕を、僕は許せない。

でも、今動かない僕はもっと許せない。

だから今は。

これ以上織斑を傷つけさせない、そのために。

僕は走り出した。

辿り着いた先で見たものは、剥き出しの右腕から紅い液体を滴らせる織斑の姿だった。

エネルギーの消耗が激しい。

完全に不意を突かれる形で受け止める羽目になった砲撃は、数秒が経過した今もなお続いている。

アリーナのシールドを貫通するだけあってなかなか高出力らしく、突然の事態に思わず最大出力で発動してしまった零落白夜でもあまり余裕はなかった。

もちろん、すぐさま受け止められる最低限の出力に抑えた（残念ながら、一度完全に消して離脱するだけの出力はない。オマケもあるしな）が、完全に防ぎきれぬわけではない。

左腕で身体の内側に抱え込むようにして覆っている鈴はともかく、砲撃の余波は間違いなく白式のシールドエネルギーを削っている。特に雪片を掲げて砲撃を受け止めている右腕は顕著で、余波によって消費するシールドエネルギーのおよそ半分以上を占めている。

（まずい、そろそろ白式のエネルギーが四割を切る……………！）

鈴戦では一割も消費しなかったので、この先制攻撃でいきなり五割以上を削られている。現時点で、だ。

白式を初期設定のまま使っていたら、今頃人型の炭が二つ出来上がっていたことを考えると上々な結果なんだろうが、ちよつとした気紛れで有り得たＩＦストーリーの結末を考えると顔が引きつる。

「くっ、白式！」

バキィ！

「つつ……………！」

このまま現状維持が続けばそう遠くない未来、ＩＦストーリーと

同じ結末を迎えそうなので苦肉の策を実行。……………まあ、結局時間稼ぎにしかなんないけどな。
やったことは簡単。

あえて右腕のシールド保護を最低限に設定した（……………）だけだ。

損傷すると雪片を振るうのに支障が出る部位だけにシールドを集中させることでエネルギー消費をほぼ三割減。まあめちゃくちゃ痛いし、派手に裂傷とか走ったけど仕方ない。腕部装甲のおかげで思ったほど酷くなかったしな。装甲砕けたけど。

「……………ってーなやつぱ。というか、右腕だけ露出ってすげえ間拔けな格好だな」

傷痕残りそうだな、これ。……………鈴が気に病まないといいんだがな。

「つと?」

唐突に砲撃が止んだ。もうちょい早く止んでくれれば右腕ボロボロにしないですんだんだけどな。

「おつと」

鈴に負担がかからない程度の速度で退避。交通事故は勘弁だからな（……………）。

その直後、ほんの数瞬前まで俺達が居た空間を、音速を突破した黒いISが引き裂いていった。

ドゴオオオオ!

鈴を抱きしめるように抱え込んで背を向ける。生身の人間がこんな至近距離でソニックウェーブを食らったらただじゃすまない。あ、腕が痛い。

アリーナ中央に着地したのか盛大に土煙が上がる。鈴をピットに戻したいところだが、背を向けた瞬間後ろから撃たれましたなんてことになったら笑えない。骨も残らないな。

そんなこんなで動くに動けずにいる間に、土煙が収まった。

そこには、異形のISがいた。

まあ落下する時チラツと見えたし、さっきからハイパーセンサー（土煙ごときでどうにかなるほど柔じゃない）で確認してるから新鮮味なんて欠片もないんだけどな。もちろん驚いたりなんかはしていない。

ぱつと見黒に見える深い灰色の全身装甲フル・スキンを纏ったそれには首がなく、肩から頭までが一体化したような形をしており、腕に至っては地に着くほど長い。正に異形と呼べるISだった。

「お前、何者だ？」

「……………」

答えない、か。まあ当然と言えば当然だな。

『織斑君！ 今すぐアリーナから脱出しなさい！ 今先生達が制圧に向かっていきます！』

おや、山田先生？ …………… 普段からそんな風に毅然とした態度でいればもつと威厳も出るでしょうに。

「このアリーナすでに掌握されてますよね？ おそらく隔壁も下りているでしょうから、ISの格納庫には辿り着けないと思います」

あえて問いには答えず、確認を取る。

『え！？ あ、本当だ！ なんでわかったんですか！？』

……………選択肢は一つだな。

「あんなことがあったのに観客席の出入り口がロックされてるじゃないですか。それに非常出口も沈黙してますし」

というかパニックに陥ってる観客をどうにかしないとマズいんじゃないか？

……………にしても、この奇妙な違和感はなんだ？ なにか、あのISからは決定的に違うなにか（・・・）を感じる。

「それに、ピットに戻ろうと背中を見せたら狙い撃たれますよ」

オマケに、誰かがアイツの気を引いておかないと観客席に危険が及ぶかも知れないしな。どんだけ不利なんだか。

『で、ですが！』

状況を再確認してみる。

利き腕は負傷。雪片《唯一の武装》はオーバーヒート気味（雪片でなければとづくに壊れてるな）。左手には鈴《生身の人間》。エネルギーは半分を切った。挙げ句の果てに、白式の本来の性能を発揮すると鈴《護衛対象》が死ぬという無理ゲー仕様。

しかも相手は火力特化の遠距離殲滅射撃型（おそらく軍用）。

話にならん。

どうしよう、これ？

状況を分析すればするほど流れ出る冷や汗を不快に思いながらも思考を巡らせる。……………どうにかなるイメージが思い浮かばん。

ん？ ハイパーセンサーに感あり？ ピットからか？

「織斑あつ！」

「レン！？ なんでここに！？」

あの馬鹿！ あんな大声出したら！

「……………」

まずい、あの全身装甲がレンに興味を持ったのかピットの方を向いてる。

今すぐ気を引きたいところだが、鈴を抱えている以上無茶はできない。

「逃げろ、レン！」

「織斑……………血が……………」

ピットの入口から動く様子を見せず、青褪めた顔で茫然と呟いている。

「そんなことはいいいからさっさと逃げろ！」

くそ！ 全身装甲が完全にレンをロックオンしてやがる！

鈴に過負荷がかからないギリギリの速度で反対側のピットに急行する。

ステージから見えない位置に鈴を安置した後、全力でアリーナに舞い戻る。

「レン！ 無事か！？」

目に飛び込んできたのは、今にもレンの頭を掴もうと手を伸ばす全身装甲の姿だった。

「……るさない」

「逃げろおお！」

瞬時加速を繰り返す。過去最高の速度で空を駆けるが、間に合わない。

「レン！」

無意味とわかっていても手を伸ばすことしかできない。碎けんばかりに歯を食いしばる、なんで白式には雪片しかないんだ！ 遠距離武装があれば！

レンの頭に、機会仕掛けの腕が触れた。

「……許さない！」

「は？」

瞬間、全身装甲が吹き飛んだ。

「ぐはっ！？」

俺に向かつて。

無論、いくら俺でも後先考えずに全力で加速しているとところに障害物が現れれば、回避は困難を極める。それが、まるでダンプに跳ねられたスクーターのような勢いでこちらに向かってくるならなおさらだ。

⌈
⋮
!
?
⋮
!
?
⌋

ああ、あつちでも全身装甲が戸惑っている。俺、今ならアイツと友達になれる気がするよ。

絡み合うように空中で衝突した俺と全身装甲は、互いに引っかけ合いながらすれ違い、勢いを全く殺さないまま頭から（・・・・・・・・合・・・・・・・・）地面へと落下した。結果、俺は今地面で悶えている。超痛い。

あ、エネルギーが半分になってる。

「許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない！」

あの、レンさん？ 怖いよ？

「行くぞ、イクサスト……原形を保てると思うなよ？」

白式のハイパーセンサーが新たなISの存在を感知した。間違はなくレンの座標と重なる位置に存在している。…………レンは、専用機持ちだったのか？　ようやく痛みが引いてきた（まだ痛むが）頭を持ち上げた。

全身装甲と言うほどではないにしろ、身体の大部分を覆う鮮やかな赤青白の三色の装甲^{トリコロール}。額の中心にはV字を二つ重ねたような特徴的なアンテナ。そしてなによりも目を引くのは、十字を四十五度回転させたような形状の巨大なバックパック。見たことのないISを装着したレンが、そこにはいた。

…………いや、綺麗だと思うし、可愛いとも思うけどさ。走った影響か、怒りのあまりにか上気した顔は非常にそそるものがあるし、装甲の間（なぜか二の腕や太ももに集中）から垣間見えるピッチリと肌に張り付いているISスーツはやけに艶めかしい、確かに興奮するんだが…………怖い。

目から光が消えてるし、ブツブツと「破壊する…………粉微塵に破壊する…………」とか「まずは手を落として…………足も落として…………達磨に…………」とか呟いてるし…………レンだけは絶対に怒らせないようにしよう、うん。

イクサスト。正式名称はX^{エックス}アストレイ。

IS学園と同じくどの国家及び組織にも所属せず（……………）、また一切の干渉を許されていない唯一の企業が作成したISだ（……………）。

Xアストレイ最大の特徴は背面に背負った巨大なバックパックだ。X字の形状のそれは『ドラグーン』と呼ばれる第三世代兵器であり、機体名の由来にもなっている。

ドラグーンは自立機動兵器の一つだ。それだけを聞けば英国のBTのようなものだと思うが、両者の間には明確な違いがある。

BTが実戦に耐えうる自立機動兵器の完成を目的に開発されたのに対し、ドラグーンは複数の機能を搭載した万能型自立機動兵器の完成を目的として開発されている。

その開発思想上、動かすことを第一としたBTは操縦者のイメージを元にコンピューター制御によって操作する半自動型である。

一方、ドラグーンは高度な空間把握能力を持っていることを前提にしているため、完全マニュアル制御だ。狂いの無い正確なイメージがなければ運用することは到底叶わないため、BT運用可能なレベルとは比べ物にならないほどの（とはいえBTを扱える時点で一般的に天才と呼ばれる類の人種だが）特殊な才能がなければ扱えない。

コストや量産性はともかく、開発技術的にも操縦技術的にも要求されるレベルはBTのそれとは一線を画している。

勝っている部分がないわけではないが、同じ自立機動兵器としてドラグーンはBTの一步も二歩も先を行っている。

「行け！」

四基のドラグーンを射出する。

つい先ほど、触れられる瞬間に瞬時加速も利用した渾身の蹴りを叩き込んだ首無しを一欠片も残さず灰燼に帰すために。

「……………」

ドラグーンを脅威と判断したのか慌てて飛び立つ首無し。

「遅いぞノロマ」

ビームスパイクを出力させた一基のドラグーンで真上から叩き落とす。貴様には何一つさせるつもりも、ましてや逃がすつもりなど砂一粒分もない。

忌々しいエネルギーシールドのせいで貫通こそしなかったものの、更に一基追加したドラグーンで地面に押さえ込む。スラスタもビームスパイクも出力は常に最大だがなにか？

「這いつくばって許しを乞え。無様な貴様にはそれがお似合いだろう？ まあもつとも、どんな理由があろうと、どれだけ許しを乞おうと許しはしないがな」

時たまエネルギーを補充するために控えの二基と交代させながら、一歩一歩を踏み締めるように歩み寄っていく。

脱出しようと必死なのか、ジタバタともがいたりスラスタを噴かせているようだが無駄だ。こまめに位置を微調整して最も効率の良い位置をキープし続けている以上、よほどの出力差がなければ脱出はありえない。

右手にはビームサーベルを、左手にはビームライフルを。

「シネ」

目の前のスクラップには殺意を。

「ふう、さすがは軍用機といったところか？ 危なかったぜ」

ギリギリのタイミングで抱きかかえることに成功したレンを確認する。何が起こったのかまるで理解していないようで、目をパチパチとしている。

「え？ へ？ なにが？」

「奴さんが本気になったってことだよ。さすが軍用、俺達の競技用と違って制限が掛かってないだけのことはある」

んで、拘束を強引に外した全身装甲は限界まで引きつけたレンに襲いかかった、と。手からビームなんていうふざけた代物で危うく蒸発しかけたぞ。

「そ、そうか………ありがとう、迷惑をかけたな」

よかった、いつものレンだ。いったんリセットしたせいか元に戻ってる。

「ん？ どうした、レン？ 顔が赤いぞ？」

「は？ 織斑は何を言って………あ、あれ！？ なんだ！？ ついさっきまでなんともなかったのに………！ 織斑の顔を見ている

と心拍数が上がって、これは……恥ずかしいのか？ 見られたくないような、見てもらいたいような……ああもう矛盾している！ 触れているだけで無性に嬉しいし、身体が熱くなる。安心するよ
うな、落ち着かないような……なんだ、なんなんだこれは！」

顔を真っ赤に染めながらも心底わけがわからないといった様に慌てふためくレンは、見た目相応の女の子みたいに見えてとても可愛らしい。

……白式？ わざわざ鼻血噴いてる筈にハイパーセンサー向けなくていいからな？ なんかお前、俺がレンを可愛いと思う度に筈を探してるだろう。筈が情熱を噴出している姿なんてどうでもいいからな？ 楽しいか、筈の鼻血見るの？

「お、織斑！ この感情はなんだ！？ 不安定で不条理で……理不尽だ！ 頼む、教えてくれ織斑。僕のこの感情は、なんなんだ……？」

自分の中に理解不能な感情があるのがよほど怖いのか、潤んだ瞳で縋るように見上げてくる。普段から弱みは見せても頼ろうとはしないレンのそんな姿にドキリとさせられる。（なぜかは知らないが）少なからず自分に依存しているレンが、普段から見せる献身とはまた違う部分がすぐられる。

「いや、俺に聞かれても……後でセシリアにでも聞いたらどうだ？ 女の子だからこそわかることもあるだろ」

もちろん筈は除外。理由なんて言うまでもないだろ？

「あ……そうだな、すまない。取り乱してしまった」

顔は真っ赤のままだが多少なりとも普段のペースを取り戻したように、錯乱状態からは抜け出している。これなら心配なさそうだな。

「……………っ！」

チラチラとこちらを伺っては慌てて目を反らして何てことをまだやってるけど、それはまあご愛嬌ということで。……………なんか懐き始めた小動物みたいだ。

なんて和やかなやりとりをしているけど、実は今も現在進行形でビームの雨をかくぐつてたりする。おかげでレンを降ろす暇もない。

「さて、どうするレン？　ちょっとジリ貧っぱいんだが」

「……………零落白夜は使えるか？」

まあ性能差を考えれば零落白夜をブチ当てるしかないよな？

「使えるっちゃ使えるが……………あれ倒すなら最大出力で叩き斬るしかないよな？　軍用機だし、少しくらい絶対防御発動させたくらいじゃ止まらないぞ？」

「わかっている。何秒間展開できる？」

……………。

「最大出力で0・4秒。瞬時加速を一回使っなら0・1秒を切るな」

なんだかんだで50切ってるんだよな、エネルギーー。

「そうか……わかった、僕が隙を作る。織斑は機を見て突っ込んでくれ、サポートは引き受けた」

あいよ。

……結構無謀なことやろうとしているはずなのに、なんでだろう？ レンと二人ならなんの不安もない。なぜに？

「というか、お姫様だっこのこの状況からどうやって脱しようか？」

やばい、作戦の前段階で躓いてる。不安だらけじゃなーか。

「問題ない。ドラグーン！」

お姫様だっこのあたりで、やっと収まってきたレンの赤面が再発した。元から異常に色素が薄いせいかわびっくりするくらい真っ赤だ。付随してその他の状態異常も再発。嬉しさと恥ずかしさと戸惑いと好意と安堵と不安と陶酔とを具茶混ぜにしたような複雑怪奇な表情をしている。すげえ、どんな顔してるか表現できないくらいすげえ。ただ、やけに可愛くて、それ以上に熱っぽいというか色っぽいというか、艶やかだった。

それらを振り払うようにレンが叫ぶと同時に、ふよふよと頼りなさげにあたりを浮遊していたドラグーンというらしいBTのような自立機動兵器が、ランダムな機動を描いて全身装甲へと襲いかかった。

……BTに比べるとずいぶん大きな、形もフラスコみたいな円錐形だし。さっきビーム刃を出力していたから全く違う方向性で開発されたのか？ ん？ あれは、細いワイヤー？

「……………！……………！？」

一基がビームを撃ち、一基がビーム刃を出力して果敢に攻め立てている。全身装甲が対応に追われて攻撃が途絶えた隙にレンを降ろす。

「……………」

なぜか不満そうにしているレン。なにが不満なのか当人にもわからないようで、その事実には思い至ると同時に、自分のものなのに不気味くらい思い通りにならない感情に怯えたような表情を見せた。
……………仕方ない。そんな顔されたらほっとけないじゃないか。………と思うと同時にもっとそんな顔を見なくなる俺は末期なんだろうな。

「大丈夫だ、俺がなんとかしてやる」

抱き締める。小さい子供を安心させるように。

「おり、むら？」

「不安なら側ににいてやる。怖いなら励ましてやる。辛いなら助けてやる。泣きたくなったら胸を貸してやる。危なくなったら守ってやる。必要なら、なんだってしてやるから」

だから、さ。

「だから、そんな顔するな」

小さく、けれど確かに、レンは頷いて。

微笑んだ。

——IS越しに感じるレンの感触は、どこか懐かしいものだったような気がした。

見たことがないくらい優しい、可愛らしい微笑みに見とれていた俺は、頭の片隅でそんなことを考えていた。

「うおっ!？」

二度目になるレンの本当の微笑み（不意打ち）に気を取られている間にエネルギーを使い果たしたのか、ドラグーンの包囲網を突破した全身装甲が（手から）ビームを撃ってきていた。ちなみに俺が呆けている間、レンは微笑みを崩さずに俺を見続けていた。何してんだよ俺達……。

間一髪散開が間に合ったからいいものの、あれで死んでたら末代までの恥だぞ？

「行くぞ、織斑。拘束できるのは多分二秒が限界だ」

どこか吹っ切れたのか、極めて自然体で話しかけてくるレン。くそっ、今度は俺がなんか気恥ずかしいじゃないか！

「十分だ！」

ええい、今は集中だ！

「ドラグーン！」

レンの声と同時に飛び立つ四基のドラグーン。今までは二基が仕掛けて、残りの二基は待機していたが、今回は全て同時に仕掛けている。それに加えて、レン自身までビームライフルを撃ちながら突撃していく。

俺はまだ動かない。

「……………！」

対応しなければならぬ数が急に二倍以上に増えた全身装甲は、あっという間に追いつめられていく。自立機動兵器の扱いに關してはセシリア以上の技量を持つレンが、その全てを持ってただ動きを止めることに専念した以上、この結果は必然だったのだろう。

回避直後に生じた一瞬の隙を突き、ビーム刃を出力した二基のドラグーンが挟み込むようにして全身装甲を空中に縫い止める。

そして残る二基が向かい合い、ビームのワイヤーを編んだ（……………）。

「今度は逃がさない！」

俺はまだ動かない。ただ、一振りのために精神を研ぎ澄ます。

「……………！？」

生み出された光のワイヤーは、全身装甲を中心に周囲を回る二基のドラグーンに連動して全身装甲を縛り上げていく。

俺はまだ動かない。決して失敗しないために、最大のチャンスを待ち続ける。

「……………！！……………」

すぐに拘束から脱け出せると高を括っていた全身装甲は、その慢心故に捕らえられた。

そして、ワイヤーがキツく締め付けられた。

「織斑！」

今！

瞬時加速を発動。一気にトップスピードに到達する。

零落白夜はまだ発動させない。発動させるのは斬撃を放つ一瞬のみ！

全身装甲はもう目の前。

これで決める！

「……………！！！」

「な！？」

完全に予想外の出来事。ワイヤーによって簀巻きにされていた全身装甲が、左半身が吹き飛ぶのにも構わずに右手からビームを放った。

爆発音が響く。

全身装甲が放ったビームが俺を襲うことはなかった。

そもそも俺は射線上にいなかったし、ビームの帯の内部で放たれたビームは放出されることなく爆発を起こした。全身装甲は、ただ自爆しただけ。

そして、その爆発によって俺との距離が開いた。

零距离でマトモに爆発を食らった全身装甲は、浮遊すら口々にできない死に体となっている。

だが、俺の剣《雪片》は届かない。

ついさっき行った瞬時加速によって、白式のエネルギーは瞬間的に零落白夜を発動させられるギリギリしか残っていない。

わずかでも飛行のためにスラスターを噴かせれば、零落白夜は使えなくなる。

爆発によって距離を取られるまでは、ギリギリで推力が足りていた。

そして今は、足りていない。

「く、そがあああああ！！」

地上に着地するくらいはできるだろうが、それだけだ。俺は白式を失い、レンは先程の猛攻でエネルギーを消耗した（元々決定打も

持っていないのでジリ貧だが）。左半身を失ったとはいえ、未だに莫大なエネルギーを蓄え、大出力のビーム砲を備えている全身装甲にとっては敵ではないだろう。

俺達は、負けたんだ。

わかってる。

でも、諦めたくないんだ。

俺は、約束したんだ。

守る、って。

だから。

「諦めてたまるかよおお！」

信じる。

「乗りなさい（・・・・・・）、一夏！」

このアリーナにいるもう一人の仲間を。

「!？」

絶対防御をオフに。
加速する。

「お前の敗因は！」

瞬時加速は（・・・・・・・・）、条件さえ整えばエネルギーを消費せずに発動できる（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）。

「仲間が居なかったことだ！」

確かな手応えと共に、雪片を振り抜いた。

「ちよっ！ バカ！ 殺して」

白式が強制解除されたおかげでプチスカイダイビングを体験した後（レンが救出してくれた）、地面のありがたさを噛みしめていると鈴が顔を真っ青にして駆けよってきた。

「は？ 何言ってるんだ？」

「いや、だって！ 真っ二つに！」

「……………もしかして、鈴。」

「あれ、無人だぞ？」

「へ？」

おお、無防備な顔だな。

「どのどいつが作ったのかは知らないけど、無人機だよ」

「嘘………ありえない」

まあ信じられないのもわかるけどな。

「まさかとは思ったが、本気でわからなかったのか」

「むしろなんでわかったのよ!？」

「いや、なんでもなにも、人体の構造上絶対に不可能な動きのオンパレードだったじゃないか」

腰が直角に曲がったり。

「た、たしかに………」

ちなみに鈴は、気絶から覚めたあとはピットで甲龍のチャージをしつつ、モニターで俺達の様子を見ていたらしい。

「お前の目も節穴のようだな」

おお、レンか。

「あ、あんた………!」

「一応、礼は言っておこう。助かったぞ、凰」

「……………え？ 今、あんた」

「ふん」

スタスタと歩いてピットに向かうレン。顔が赤いぞ？

「まだ、あの変な感情が残っている。そのせいだ」

ぷいとそっぽを向く。

「おいおい、怖くはないのか？」

からかうように言うと、ゆっくりと俺を見上げた。

俺と目が合った瞬間、レンは嬉しそうな表情になり、その感情にまた混乱している。それは変わらない。

でも、とレンが続ける。

「その時は、織斑が僕を助けてくれるんだろう？」

僕は織斑を信頼してるから大丈夫。

そう言って、三度目の不意打ち。

学園の地下深く、関係者以外が立ち入ることを許されない場所。

そこでは、乱入したISの解析が行われている。

「織斑先生？」

声が響き、モニターに新たなウィンドウが開かれる。
山田真耶が訪れたようだ。

「どうぞ」

ドアが開き、端末を片手に真耶が入室した。

「あれの解析結果が出ました。——間違いなく無人機です」

全世界で、完成どころか開発のメドすら立っていない異質な技術。
ないはずのそれが、すぐそこにある。

「原理は不明です。綺麗に切断されていました」

無論、やったのは彼だ。

「コアは？」

「未登録のものです」

「そうか……やはりな」

小さく呟かれた言葉を、真耶は聞き逃さなかった。

「心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ、な」

「そうですか」

それだけを返して、真耶はドアへと向かった。

「……………織斑先生、一つだけ聞かせてください」

ドアの目の前。自動で開く位置一歩手前で、真耶は足を止めた。

「なんだ？」

「生徒達に危険が及ぶようなことを、していますか？」

「なんだ、藪から棒に物騒な。ノーだ」

「では、危険が及ぶと知っていて見逃していますか？」

「……………いいや」

「そうですか……………覚えていてください、織斑先生。これから先、生徒達に危険が及ぶとして、あなたがそれをあえて見逃すようなことがあれば」

「……………」

「止めることはできなくとも、腕の一本は覚悟してくださいね？」

「……………」

「失礼します」

日本代表の座を自ら退いた女性は、地上へと向かった。

二十話 「許さない」 レン（後書き）

こんばんは、通りすがり1です。

今話は今までで最長です。一万文字は越えたのではないのでしょうか？ 書いても書いても終わらず、二話にわかるのも微妙なので泣く泣くキーを打ち続けました。楽しかったですけど。

実は、現在10万PV突破、1万アクセス突破、そして総合評価で250ptを突破しました。

皆さんが読んでくださったおかげでここまで来ました、本当にありがとうございます。

前書きに書いたアンケートですが、実は上記に加えて二十話突破、原作一卷終了のお礼と記念も兼ねて、番外編を書こうかと思っています。

今回のアンケートは作者の意思に関わらず、純粹に投票数で書くものを決めようかと思っています。ものによっては時間がかかりそうですが。

一人二票の重複投票アリ（例：？に二票）でお願いします。三票以上投票された場合は、残念ながら無効票とさせていただきます。以下の中から選んでください。

？ノクターンでエロ

？IS学園でのレンの日常

- ? I S 学園でのドタバタ騒動
- ? 超番外編・I S クエスト〜東さんの悪ふざけ〜
- ? I F 〜一夏とレンがクラス代表決定戦で戦っていたら〜
- ? 座談会的なもの
- ? ヒロイン達がコスプレする話
- ? 一夏の中学時代の話
- ? もしも残念なI S 学園生が異世界に逝ったら（モンハン、リリカル、G E、とある、F a t e などの異世界に）
- ? 調子に乗ってないで本編を進める

他に意見があれば遠慮なく言ってください。可能な限り選択肢は増やします。

二十一話 「理不尽だ……」 弾（前書き）

こんにちは、通りすがり1です。

？の執筆が終了したので、やっと投稿できます。？はこれを投稿してからすぐに投稿する予定です。あまり出来はよろしくありませんが、興味があるなら『ざんS』で調べていただければ、出ると思われます。

久々ですが、楽しんでいただければ幸いです。

二十一話 「理不尽だ……」 弾

迫り来る機体。

中距離での射撃戦から一転、最高速度を維持したまま最短距離を突っ切ってきた。予想外のことに虚を突かれ、それでもなんとか反射的にアサルトライフルを発砲する。

「甘いつ！」

「なっ！？」

まるで未来が見えているかのような動きで、着弾の瞬間に横にスライドして再び加速。次の瞬間には目の前で近接ブレードを振りかぶっていた。

「瞬時加速！？」

いつの間にそんな技術を！？

「もらったぁ！」

この距離ではライフルは使えない。近接武装を呼び出して迎撃するのはもちろん、回避するにも時間が足りない。

振り上げられたブレードは真っ直ぐに俺へと振り下ろされ――

ガイン！

とっさに掲げた左腕のシールドに受け流された。

「うおおお！？ くそっ！ 相変わらず理不尽な反応速度だなあ才イ！？」

なんか叫んでるけど無視。渾身の一撃を流された事で生まれた致命的な隙を見逃さず、格納領域にある全火力を展開。引きつった顔に笑顔を返し、引き金を引く。

「グッバイ。惜しかったぜ？」

「ちくしょおおお！」

無数の弾丸を叩き込まれたISは、全てのシールドエネルギーを失った。

「くそっ！ なんで勝てないんだよ！」

「努力、根性、勝利が足りない」

「ジャンプどころか飛行してるんですけどねえ！ つーか最後のダイレクトに欲しいんだけど！？ そりゃ足りないだろうさ！」

「つっこみ疲れてゼーハー言いながら肩を落としているのは五反田^{ごたんだ}だ。俺の中学来の親友で、あだ名は『だだんだんだだん！』だ。」

「適当なことを言っな！」

「いや、クラスメイトに変なあだ名（？）をつける奴がいてな。毒舌で天然で人嫌い（つばい）だけど良い奴なんだ」

もちろんレン（と冬沢さん）の事だ。

「どんな奴！？　いつそ会ってみてえよそいつ！　そしてそれがさっきの件に関係あんのか！？」

「俺もあだ名付けてみたかった。反省も後悔もしていない」

「去ね！」

ちなみにさっきまでやっていたのは【IS VS IS EXT R A PLUS】。世界的に大ヒットした対戦型格闘ゲームだ。個人情報保護法も国家機密も知ったこっちゃねえと言わんばかりに世界大会に出場した選手と機体を徹底的に調べ上げ、それはもう誰もがドン引きするほど徹底的に調べ上げ（あまりの情報収集能力を恐れて誰も抗議はしなかったらしい）、世界中の誰一人として（選手本人や機体の設計者でさえ）文句のつけられないほどの精度で世界大会を再現した。

CPUレベルを『リアル』に設定したうえで、様々な条件を揃えてCPU同士を対戦させると稀に世界大会の再現になる程度には完成度は高い。ちなみに世界大会では行われなかった組み合わせで対戦させた結果、世界大会後（ISEX発売三日後）に行われた非公式の模擬戦と全く同じ展開になったという噂まで流れている。

また、リアルだけでなくゲーム性も追求していることも人気の一因になっている。普通に家庭用ゲーム機のコントローラーで遊ぶことも可能で、キーボードを利用すると本物のISと同等に近い操作も可能という二段構え。ノーマル（難易度）までは一般的なゲームのようにコマンドが簡略化されており、コントローラーを使用す

る。ハード以降はキーボードによる操作がデフォルトとなり、難易度が跳ね上がる（コントローラーでも動かせるがはつきり言って勝機は無い）。

このゲームに詰め込まれた全ての情報を解析すれば、世界大会に出場した選手と機体の全データが入手できることもあり、国家を筆頭に様々な組織が解析しようと躍起になっているが、いまだにどこも第一防壁すら破れていないらしい。

そこらのシミュレーションよりも優秀なこともあって、機器に繋いで訓練に使用している軍まであったりする。

そんな愉快極まりない曰く付きのゲームだが、家庭から軍にまで大人気なだけあってなかなかどうして面白い。薄いディスクのどこに詰め込んでいるのか、キャラクターの育成（乱数要素多数）に機体のチューンまで個人で可能だと言うのだからもう笑えない。

ちなみに千冬姉はラスボス扱いだ。難易度を『リアル』に設定した世界大会モードの決勝戦のみで戦える、正真正銘の最強キャラとして有名になっている。

千冬姉の試合を観戦モードで観ていると、だいたい数秒で決着が着く。機体性能はたいして変わらない（むしろピーキーすぎて不利なはず）のだが、純粋な操縦者としての技量、剣士としての実力、なにより天性の戦う才能によって振るわれる一撃を叩き込まれてすぐに終了する。零落白夜の発動以外でHPバーが減ったのを誰も見たことがないとか。

対してプレイヤー陣はというと、日本が誇る名高い廃神ゲーマーでさえ、『リアル』から2ランク難易度のダウンした『エース』での準優勝が最高記録だと言うのだから道のりは遠い。ちなみに、難易度は上から『リアル』『エクストラ』『エース』『ハード』『ノーマル』『イージー』となっている。

俺と弾はよくハードで遊んでいるが、頑張ればエースでもなんとか戦える。さっきの、ゲームとは思えないほど自由な機動はキーボ

ードならではだ。ちなみにタッグマッチならエースの準決勝まで行ったことがあるぞ。

ちなみに、これ（・・・）の製作会社だが、今度はISを使った大人数対戦型戦争シミュレーションのゲームを作る予定だとか。その情報が流れた直後から、各国のガードが数倍は固くなったらしい。誰か止めるよ。

「とまあ、弾で遊ぶのはこれくらいにして…………… 実際危なかったぜ。今のは実質俺の負けだ」

「…………… 負けは負けだ。慰めはいらねえ」

情けをかけたと思われたのか、ムスツとした表情で悔しそうに吐き捨てた。本心なんだがな……………。最後の反応は、実際にISに乗っていた経験があったからこそできたようなものだ。白式に乗っていないければ確実に負けていた。

ズルみたいな形で手に入れたアドバンテージで勝っても嬉しくねえよ。

「まあ、それはともかく。で？」

「デデデ大王」

「いや、しりとりじゃねえから」

「あの機動は見事だったけど、あそこで欲張らずに近接戦に持ち込むべきだったと思うんだ。機動力もそっちのが高いんだし、ひたすら張り付いてクロスレンジも可能だっただろ？」

「そうだな、近接ブレードを装備した近接特化機を、オマケみたいな二丁拳銃を装備した遠距離特化機でボコボコにするような奴が相手じゃなければそうしたよ。そして、俺が聞きたいのはさっきの戦闘解説とアドバイスじゃない」

「俺は至って健康だぞ」

「元気でやってるか、とも聞いてない」

「伝言」

「だからしりとりじゃねえよ。しかも終わってるじゃねえか」

「正直キツイ。マジで性欲を持て余す」

「わかってんなら最初から言えよ！」

はっはっは。俺がそんなに素直な反応を返すとても？

「あ、うん、ごめん。確かにそうだな」

「そこは否定しようぜ？」

なぜ即肯定する。俺はこんなにも正直者の好青年だというのに。

「なんでだろう？ 今、無性に『嘘だ！』って叫びたくなった」

発症したんじゃない？

「にしても珍しいな、お前がその手の話題を振るなんて。枯れてる

のか、ってぐらいそっちに興味なさそうだったんだが」

「いや、普通に人並みにはあるぞ？」

「嘘だ！！」

なんでだよ。むしろ自分で思っていた以上に変態だったよ。

「鈴を含めたどんな女子相手にも照れたことすらねえじゃねえか！
しかもびつくりするほど鈍いし！ この鈍感オブ・ザ・イヤーが
！」

「ああ、鈴な。あいつ、IS学園に来たぞ？ 相変わらず落ち着き
なかったぜ？」

「この話の流れでこの発言……頑張れ、鈴。あれ？ なぜだろう、
視界が歪む………」

何をさめざめと男泣きしている。そしてその『だめだこいつ、早
くなんとかしないと……』的な視線はなんだ。

「つーか、言うほど良いもんじゃないぜ？」

「女の園に男一人なんて美味しい状況にある奴が言っても信用なら
ん」

うむ、確かに一見浪漫溢れる状況に思えるだろう。だがな？

「考えてもみる。来る日も来る日も連日、朝から晩まで二十四時間、
前後左右上下どこを見ても、自分以外には異性しかいないんだぜ？」

想像したのか、若干青褪める弾。しかし、それでも夢を見続けるために一つの突破口を探し出した。

「……い、いや、部屋とか」

だが甘い。

「六年振りに再開して（変態だけど）綺麗になったファースト幼馴染と同室だ」

「ブッ！ お、おま！」

フッ、弾よ。今、エロゲ的な展開を妄想したな？ わかる……その気持ちはわかるが――。

「寮長が……部屋を決めたのが……千冬姉なんだ……」

これで問題なんか起こしたら（――自主規制――）にされること間違いなしだ。がくぶる。弾も俺がやらかした時の末路を想像してしまったのか、ガタガタと震えている。さすが千冬姉、本人すら預かり知らぬところでまで無意味にトラウマを量産してる。

「基本的に女子校だから俺には使えない設備も多いしな。具体的にはトイレに行くには必ずダッシュだ」

うん、いきなり同情的な視線になったな。

ところで――。

「入ってこないのか、蘭？」

声をかけるとあら不思議。ドアの向こうでドタバタと騒がしい音が……何を慌ててるんだ？

五反田蘭。弾の妹で、もう三年の付き合いになるんだが、未だに敬語で話したりと、俺に心を開く様子を見せない。

「いや、いつからいたんだよ……」

なんだ、その驚いた顔は。気づいてやれよ、兄だろ？

「その兄基準はおかしい」

そうか？

「俺も千冬姉も、お互いが家のどこらへんにいるかぐらいはわかるけど」

「その姉弟はおかしい」

なんと！

「普通じゃなかったのか……束さんも普通にやってたから、てつきり当たり前のことだと」

「そいつもおかしいんだよ！ この十五年の日本人生活で気づけ！」

「ちなみに蘭は『デデデ大王』のあたりからいた」

なんか音が、ドドン！ とかゴオン！ とかドガアン！ にグレ

ードアップしてきた。どうしたんだろう？

「これ何の音！？ 今、俺ン家でどんなアルマゲドンが起こってんの！？」

「物は壊れてないから心配すんな」

「余計不安になったよ！ これ破壊音じゃないの！？ マジで何が起こってんの！？」

「ラグナロク？」

「疑問系！？ そして物騒！」

「冗談だ」

「の割りには凄まじい振動が……………」

バキィ！

「あ……………」

「あ……………、ってなんだよ！ あ……………、って！」

「ドンマイ」

「それですませんなあ！」

五反田家は一応無事だった。

「というわけで、久しぶり、蘭。邪魔してる」

「はっ、はい！ お久しぶりです、一夏さん！」

うむ、元気が良いようだなによりだ。

にしても、蘭は家でもキチンとした格好してるな。学園ではラフな格好の女子が多いから新鮮だ。

「ギリギリにはなったが、事前に教えておいて良かった………すみん鈴、悪いが妹も応援しているんだ」

「ん？ なにか言ったか？」

「いや、なにも」

む、気のせいだったか？

（わざとやってるんじゃないだろうな、こいつ）

「えっと、IS学園って全寮制なんですよね？」

「ああ。今日は家の様子見ついでに寄ったんだ」

なぜか弾が疑念を孕んだ熱い眼差しで見つめてくるので、チヨキの指幅と両目の幅にどれほどの差があるのか調査してみようか、といったことを考えていると蘭が声をかけてきた。………命拾いした

な、弾！ 妹に感謝するがいい！

「ん？ あれ？ ……サンキュー、蘭？」

「へ？ お兄どうしたの突然？ しかも聞いてくるの？」

「いや、なんとなく感謝しなきゃいけない気がして」

弾、お前のその勘の良さはなんだ？

「えっと、今からお昼なんですけど。よかつたら一夏さんもどうぞ。まだ、ですよ？」

弾の奇行に緊張が解れたのか、さっきまでより少し雰囲気は穏やかになっている。ちよつと緊張していたみたいだからな。……俺ってそんなに怖いのか？

「ええ！？ な、なんで落ち込んでるんですか！？」

「いや、俺はそんなに怖いのかと……」

「はい？」

「気にすんな、蘭。一夏が無意味に考えすぎてるだけだ」

失礼な。蘭も「そつか……」とか納得してそそくさと部屋を出て行くな。兄妹そろって失礼な。

「本当に……頭良いのに、なんでこう馬鹿なんだろうこいつ」

「良い覚悟だな、弾。表に出ろや」

「どうどう。飯食って落ち着け、顔が怖いぞ？」

マジで良い度胸してやがんなてめえ。怒れる俺を飯で釣ろうなんて。

「ゴチになります」

美味いんだよね、五反田食堂の飯。

隣で飯を食う親友の姿に、溜め息が漏れてくる。

親友、織斑一夏とは中学校からの付き合いだ。一年生の頭に出会ったので、かれこれ三年になるだろうか。

最初は、女たらしのいけ好かない奴だと思っていた。実際、鈴がいつもそばに居たし、一夏の追っかけみたいなのをする女子は、日を追うことに学年・クラスを問わず増えていった。

おかげで、入学してからしばらくの間、一夏には同じ小学校だった奴を除いて男子の友達ができなかった。

なんでもできて女子にももてる一夏に、やつかみや嫉妬こそすれ親しみを持つ奴は、一夏のことを知らない男子にはいなかった。

かく言う俺もその内の一人で、女子を侍らせている（ように見えた）一夏に良い感情を持っていなかった。

そんな状態が続いたまま、数ヶ月が経ったある日。

一つのきっかけができた。

恥ずかしいから詳しくは省くが、その時の事を簡単に説明するな
ら――

蘭が不良に絡まれる↓経緯色々↓上着破かれる↓一夏が通りがかかる↓無双↓蘭（色々と混乱して）泣く↓一夏才口才口↓とりあえず自分の上着を渡す↓俺目撃↓誤解↓喧嘩勃発。

――といった感じだ。この後、蘭が誤解を解いて兄妹共々平謝りしたり、一夏が不良達を介抱して懷かれたりと色々あったが、この件を境に俺と一夏は友人となり、蘭の片思いが始まることとなった。

親交を持つてからわかったんだが、一夏は類い希なる鈍感だった。例の無数のファンもどきは、一部のミーハーな野次馬（主に千冬さん関連）を除けば、一夏が大小様々なトラブルを解決したことがきっかけで発生したんだが、一夏はその好意に一切気づく様子を見せなかった。おかげで、一夏に好意を持つ女子の大多数は、恋愛感情に気づいてもらうことすらなく、結果的に振られることとなった。ご愁傷様だ。

後に、男子から見た一夏の印象（女誑し）を覆す事件があったのだが、結果的に一夏が親しみやすい性格であることが知れ渡ったとだけ言っておく。長いし。

それからの三年間、俺は自然に一夏と鈴の三人でつるむようになったのだが、一夏の巻き込まれ体質のおかげで種々様々なトラブルに巻き込まれた。暴走族を叩きのめして一夏共々アニキと呼ばれるようになったり、不良を更正させたり、犯罪組織を潰したり、ワケありの女の子を助けたりと、上条ばりに多種多様なフラグを立てては自ら叩き折る一夏と共に、鈴共々愉快な青春を送ることとなった。おかげで、今では一夏はこの町で最も慕われる人間になっている。

未だにあいつに恋をしている女の子は多いし、トラブルをきっかけに友人になったものもある、ファンは男女問わず多いし、恩義を受けた者なんて数え切れない。いまだに暴走族や不良を続けている奴らも、節度を持つようになり、（色んな意味で）一夏には一目置いている。そんな経緯もあり、もはやこの町の伝説になってたりするけど、やっぱり本人は気づいてない。この鈍感が。

ちなみに、なんだかんだで形成された一夏の人脈がすごいことになっている。それこそ、頑張れば日本なんて支配できそうなレベルで。

魔王か、お前は。

「IS学園に入れたら、その時は是非ご指導を！」

「いいぜ、知り合いに国家代表候補生もいるから、そいつらにも声かけておくよ」

「……………」

まあ、ご覧の通り、実際はただの唐変木なんだけだな。

天を仰いで、もう一度溜め息。

二十一話 「理不尽だ……」 弾（後書き）

はい、通りすがり1です。

今話は、ちよつと、酷い出来ですよね……。文字数の三割くらいISEXの説明にもってかれてますし、後半も説明ばかりです。すいません、五反田兄妹初登場だったので、テンションを上げて書いていたら、こうなっていました。

本当にすいません。皆様が大好きな転校生二人組は、次話で出る予定です。……まあ、二人とも変になってますがね。特にシャルロットの皆様、ごめんなさい。詳しくは秘密を明かした話のあとがきで書きます。

ちなみに、番外編のアンケートですが、現在このよう（←）になっています。

- ? エロ↑書いたよ!
- ? レンの日常
- ? ドタバタ騒動
- ? ISクエスト
- ? 一夏とレンの真剣勝負
- ? 座談会的なもの
- ? ヒロイン達がコスプレする話
- ? 一夏の中学時代の話
- ? 残念なIS学園生が他作品に介入したら
- ? いいから本編を進める馬鹿作者

? 10票

? 2 票
? 3 票
? 0 票
? 0 票
? 0 票
? 5 票
? 0 票
? 3 票
? 1 票

総計 24 票

票数的に、次に書くのはコスプレ編なのですが、ヒロインにはどんな服が良いでしょうか？ 良い案があれば感想に書いていただければ助かります。期限はだいたい原作二巻終了までです。何もなければ、とりあえずレンにはクドリヤフカの格好でもさせます。

それでは。

二十二話 「『お姉ちゃん』って呼んでもいいわよ?」 鈴(前書き)

おはようございます、通りすがり1です。

週一更新なんとか継続です。頑張ったぞ俺!

ついにラウラ登場です。シャルもちよこつと登場です。

なんか鈴がちょっと強いです。

楽しんで下されば幸いです。

二十二話 「『お姉ちゃん』って呼んでもいいわよ？」 鈴

「レンが休み？」

五反田家を訪問してから数日が経った月曜日、朝の食堂にて。俺と同じテーブルにいた鈴が、開口一番に発した台詞は、レンの不調を伝えるものだった。

「うん……ごめん、私のせいなの」

なん……だ……と……。

「鈴……いくら変なあだ名を付けられたからって……」

レンに……いったい、何を……？

「違うわよ!!」

怒れる鈴。逆立つツインテールは小学校からの謎。背後に見えるデフォルメされた虎も謎。鈴には不思議がいっぱいだ。

「レンたんが……休み、だとお!？ なんて……事だ……っ! 凰! 責任を取って今すぐ代わりに抱きし「はあっ!」めえっ!？」

白式が例外的に受け入れてくれたツツコミ用の木刀を展開。なぜか虎印が付いてるが、威力はピカイチなので気にせずにレッツ打撲。どこからともなく湧いて出てきた箒を気絶させる。

…… クラス対抗戦が終わった後、ようやく調整が終わったのか、箒とは別々の部屋になった。中身は残念な変態でも、外面は凜とし

た美人さんなので、それ自体はいいことなんだが、それは同時に奴の監視が消えることを意味する。これ以上ないくらい不安だ。なんか、最後に変なこと言ってたしな。買物ぐらい筈ならいつでも付き合うのに。

「またつまらぬ変態を斬ってしまった……」

「なんでかしらね、それが木刀であることに違和感があるわ」

そうだな、なんで竹刀じゃないんだろうな。

「で、どういう経緯でやっちゃったんだ？ 吐けば楽になるぞ？」

さて、ふざけるのはここまでだ。まずは容疑者を取り調べないとな。

「私が犯罪者であることを前提にしないでくれる!？」

いずこからか取り出したるは、例の青竜刀。おお、この短時間で鈴の三大謎が全て出揃ったぞ。

「そ、それで……それでレンをやったのかぁ!」

よく見てみると、青竜刀には黒く変色した液体がベッタリと。

「付いてないわよ! とことん私を犯罪者にしたいようね一夏!？」

「まあ待て、食堂でそんなものを振りかぶるな。埃が舞うだろ?」

俺もまだ食事中だし。もぐもぐ。

「一夏は本当にマイペースよねえ！」

「誉めてもたくあんしかやらんぞ？」

食べかけだけどな。

「いらないわよ！」

そうか、んじゃ食うか。うまうま。

「それで、なにか言い訳はあるか？ 容疑者X」

「もういいから、黙って話を聞きなさい！」

怒られた。

あれは、昨日のことだったわ。

私は、工藤レンの部屋を訪ねていた。

「ごめんなさい」

深々と頭を下げる。

「な、なんなんだいきなり……？」

頭上（というほど上からではないが）から狼狽したような声が届いた。これだけで目を白黒させている顔が頭に浮かぶ。相変わらず素直で真っ直ぐな子だ。可愛らしくて和む。

「謝罪とお礼よ。ずいぶん遅れたけど、やっと決心がついたわ」

頭を上げ、目を合わせる。微妙に逸らされた。

「じゃ、謝罪……？」

一步前に進むと、一步後ろに下がった。押しに弱いみたいね、シンパシーを感じるわ。

「と、お礼ね。クラス対抗戦の時はありがとう。あんたがいなかったら、私は一夏を道連れに死んでたかもしれない」

いや本当に。自分が不甲斐ないせいで好きな人が死ぬって、最悪じゃない。

「む……あれは織斑を守ろうとしたただけだ、貴様を守ろうとしたわけではない。次また足を引っ張るようなら、貴様から撃つぞ、たれミツ」

やっと本来の調子が出てきたのか、毒舌で返ってきた。以前の私なら、怯えるか怒るかしていただろうが、よく聞いてみると言葉にこの間のような棘が無い、逆にこれもこの子なりの不器用なスキップなんだろうと考えると微笑ましく思える。ツンデレ、という

より素直になれずに意地を張る子供みたいで可愛いわね。

「たれミツじゃなくて、凰、でしょ？」

わしわしと、髪を乱すようにして頭を撫でながら、小さな子をあやすように言う。本人もそれに気付いたのか、真つ赤な顔で睨みつけてくる姿に、口元がニヤニヤと歪むのが自分でもわかる。

「うきゅ！？ な、なぜ僕が貴様を……ええい、止めろっ！ 頭を撫でるな、そんな目で見るな、ニヤニヤするなあ——！」

私が頭を押さえてる以上（身長差から）届くことはないのに、必死に腕をぶんぶんと振り回す姿を見てみると、堅物だった（らしい）あの篠ノ之とやらが壊れるのも無理はないと思う。初対面からこんな感じだったら、私も危なかった。誰よ、この子を能面みたいだなんて言ったの。

「なんなら、『お姉ちゃん』って呼んでもいいわよ？」

「なんだお前は！？ 頭沸いてるんじゃないか！？ 誰が呼ぶかバカ！」

あら残念。本当にそう呼んでくれてもいいのに。

「とまあ冗談はここまでにして」

残念だけど本題に入らないとね。

「弄ばれた！？」

「レンを弄ぶと聞いて私さんじょ」

ゴッ！

……私は何も見ていない。どこからともなく現れた変態とか、どこからともなく飛来した出席簿らしきものがソレを吹き飛ばしたとか、吹き飛んだ変態が曲がり角から伸びた手に引きずり込まれていったとか、その手の主が千冬さんと全く同じスーツを着用していたとか、私はそんなの何一つ見ていない。

目の前で首を傾げてるこの子は本気で気づいてない……？ いや、目の錯覚と判断したのか目を擦ってるけど、ただ無意識的に気づこうとしていないだけかもしれない。自己防衛のために。

「コホン。改めて謝罪するわ、工藤煉。『あんたなんか近くにいるから』なんて言っただけ悪かったわ。ごめんなさい」

もう一度、誠意を込めて深々と頭を下げる。驚いたような雰囲気からして目でも見開いてるのかしら？ たつぷり十秒間、頭を下げ続けた私を前にして、「えと」とか「その」なんて口ごもった後、「よし！」という言葉と共に小さくガッツポーズをすると、意を決しておずおずと尋ねてきた。なんでいちいち仕草がこんなに可愛いしんだろっ、この娘。

「僕は本当に、織斑の側にいてもいいのだろうか？」

あー、私の不用意な一言ですつと悩んだのか。

「織斑には、いつも迷惑ばかりかけている。役に立ったためしなんて……」

いやいやいや、さっきのお礼がまんまそれなんだけど。

「馬鹿ね。あの時なりふり構わず一夏を助けようとしたじゃない」
なかなかできないわよ、あんなこと。本気で大切に思っ
てないと、とっさになんて動けないしね。それに。

「あんたは一夏の友達なんですよ？　だっ
たらそばにいなさいよ」

でも……『友達』ねえ？　この子はそう
言っただけで、抱いているのは友情それだけかしら？

「……………そうか」

少しすっきりしたような、満足げな表情。
…………ヤバイ、この子
が敵になったら勝てる気がしないわ。

「ええ、そうよ」

本当に、『そう』であってほしいものね。

「ありがとう、凰」

小さくだけど、今確かに私を名前で呼んだわよね？　うわ…………こ
れがツンデレか。すごい破壊力。

「どういたしまして……………鈴って呼んでもいいのよ？」

呼んでくれないかしらね？　なんか、やっと野良（子）猫が懐い
てくれたみたいでやけに嬉しいんだけど。

「なっ！？　ちょ、調子に乗るなたれミッ！」

素顔を知った今、そんなこと言っても可愛いだけだ。少し顔赤いし。いつか下の名前で呼ばれたら悶えそうね。

「あら？　やっぱりお姉ちゃんがいいかしら、レンちゃん？」

「ちゃんをつけるなバカ！」

これは、名前を許してもらったってことよね？　そうゆうことにしておく。

「じゃあさ、やっぱりれんれんでよくないー？」

視界の端からにゅっ、と袖が余って垂れ下がった制服が現れた。いつの間に、どこから現れたの！？　気配が無かったわよ！？　この子は……えっと一夏にのほほんさんとか呼ばれていた子よね確か。

「まだ諦めてなかったのか布仏！」

レンも気付かなかったのか、珍しく（僅かにだが）表情を変えて叫ぶ。本人はどこ吹く風と言わんばかりにのほほんとしてるけど。

……確かにのほほんさんね、これは。にしても、こいつもちっこいわねー。私と大して変わらないんじゃない？

「およ？　りんりんじゃないかー。勇気百倍だねー」

うん、今気付いたの？　というかあんたがついさっき話を振ったレンが、後ろで騒いでるんだけど、いいの？　い、一夏並みにマイペースねこの子。

一組って、こんなんしかいないのかしら？　篠ノ之は論外だし、のほほんさんはこんな感じ、レンも結構アレだし、一夏は理不尽。……二組で良かったわ。

「りんりんて……まあいいけどさ」

あの件がキツカケで一夏と仲良くなれたから、むしろ良い思い出なのよね。一夏はあまり好きじゃないみたいだけど。

「すごいすごい。よくれんれんと仲良くなれたね。私達もまだよく話せてないのに」。せっかくだから、親交を深めるために遊びに行こうよ」

ふむ、それもいいかもね。私の知らないクラスでの一夏の様子とかが知りたいし。

「というわけで遊ぶわよ」

不穏な会話から展開を察したのか、コソコソと、扉の向こうへ退去しようとしているレンの腕を掴む。

「は？　ま、待て僕は」

「問答無用！　行くわよー！」

「いえ……い。あつそぶよー！」

のほほんさんと協力して、レンを寮の外へと連れ出した。

「ということがあったのよ」

「それはまたなんとも……………」

すげえ、レンが押されてるよ……………まあ仲良くやってるならいいけど。箸はもうどうしようもない。

「で、はしゃぎすぎたらレンが体調を崩しちゃって」

「うん、オチが最悪だな」

そして、今はベッドの上にいる、と。

「はっ！　ということは今、レンたんが部屋で無防備に！？　行かなくてはい！」

「逝ってる馬鹿」

虎木刀再び。

「もう一思いに雪片でやっちゃいなよ」

虎木刀に付いた血をハンカチで拭う俺を見て、ポツリと漏らす鈴。うん、俺も最近そうしようかと検討しているところだ。

時は流れ、舞台は教室。カタログ片手にISスーツ談義に花を咲かせる女子達の合間をすり抜け、簾を机に置く。

ふう、面倒だったな。千冬姉が来なければ、そのまま食堂に放置してたのに。ちっ。

「ねえ、聞いた？」

「……………ああ、あの話ね！」

「そうそう、織斑君の！」

んむ、俺の話？ 朝っぱらからの（主に精神的）重労働のおかげで、体力を回復するために突っ伏していた顔を上げる。

「んー、俺がどうかしたか？」

話をしていた二人に顔を向け、口を挟む。なにかやらかしたっけ、俺？

「うええ！ お、織斑君！？」

「お、起きてたの！？」

「ああ、どっかのバカ《変態》のせいで疲れたけどな。……………ったく、我慢できるようにしっかり賤ないとダメだな。ところで、何の

話をしてたんだ？」

「な、なんでもないよ！　そう、なんでもない………本当に、なんでもないの！」

「う、うん、なんでもないよ？」

慌てて両手を振って否定する二人。女心はミステリーだ。

「じゃあ、そろそろHRだから、席に戻るね」

「あ、ああ」

そさくさと席に戻る二人を、ただ見守ることしかできなかった。
ふむ、疲れたし寝るか。お休み。

「ねえ、ねえねえ！　き、聞こえた？　聞こえた！？」

「う、うん！　『疲れる』とか『駄』とか『我慢』とか！」

「これって、篠ノ之さんと織斑君が……ゴニョゴニョ……な関係なのは確定なのかな？　かな？」

「うん、篠ノ之さんも疲れきったように寝てるし……男女が一つの部屋の中だよ？」

「じゃあ、やっぱりあの時は……」

「そういうこと、だよな？」

『もう、男と女の関係に………』

不意に、懐かしい気配を感じて飛び起きた。

「っ！」

近い。もうすでに、十メートルと離れていない所まで来ている。

（この距離に近づくまで、俺に気配を悟らせなかった……？）

最後に会ってから約二年。どうやら、ずいぶんと隠密のスキルを磨いたらしい。微かな気配を頼りに元を辿ると、教室の扉の向こうにアイツがいることがわかった。

（こっちが気付いたことにも、もう気付かれるな………なら！）

周囲を巻き込まないように、教壇のそばに立つ。真っ向から受け止める位置だ。アイツも最大限配慮はするだろうが、万一のことがないように前列の生徒を少し下がらせる。

気を張りつめて、その時を待つ。

そして――

扉が爆破された。

「うおおお！？」

狙ったかのように（というか狙いやがったなアイツ）真っ直ぐと俺に飛来する扉（金属製）を、（クラスメイトの）安全を考慮して床に叩きつける。激しい音と共に床が大きくへこみ、扉がひしゃげる。

（これ、誰が弁償するんだろう……？）

余計な事を思考した瞬間、舞い上がる粉塵の中から、一人の少女が飛び出した！　なんかポケモンっぽい。

「一夏ああ！！」

突き出されるナイフ。速い。身体を中心に狙って突き出されたそれを、強引に跳ね上げた手で押し上げるようにして受け流す。待機状態の白式（ガントレット型）だったから怪我しなかったけど、無かったら確実に怪我してたぞ。

「このバカラウラ！」

「痛い！」

カウンターの頭突き。ふらりと一步後退するラウラの姿に追撃を叩き込もうかと考えた瞬間、ラウラがさらに二、三步下がった。チツ。

「ど、どうやら腕は鈍ってないようだな。それでこそ私のライバル

《戦友》だ」

「はっ！ そっちこそ、ずいぶん気配の隠蔽が上手になったじゃねえか。ついさっきまで気付かなかったぞ」

互いに油断することなく、睨み合うようにして牽制する。……
ラウラ、涙目だから全然迫力無いぞ？

「……二年振り、だな」

「ああ、久しぶり」

なんでここにいるのかは全くわからんがな。軍を首になったか？

「一夏………」

「なんだ？」

風通しが良くなったために流れた気流に、銀色の髪が流れる。緊張しているのか、真っ赤な双眸を揺らして、口を開いた。

「わ、私の婿になれ！」

……ふむ、ところで吹き抜けになった教室の扉から見える、男子の格好をしている女子はなんだろう？ 罰ゲーム？

二十二話 「『お姉ちゃん』って呼んでもいいわよ？」 鈴（後書き）

はい、二十二話でした。通りすがり1です。

今回は短く感じましたか？ 本当はこれが標準ですよ？ 最近がおかしかっただけです！

さて、意外なことに『鈴の酢豚約束イベント』の消滅についての質問が一切来なかったのですが、鈴が約束をしなかったのはへたれだからです。作者が書き忘れましたすみません。

ところで、前話とノクターンを同時更新したのですが、ノクターンのアクセス数が二十二話のアクセス数の二倍弱なんですよ……みんな、エロ好きですね。通1も好きですが、正直微妙な心境です。一応、『ざんS』のお礼番外編なのに……まあ、読んでいただけるのは嬉しいんですけど。

そういえば、キャッチフレーズメーカーとやらをやってみたら、←のような結果になりました。

・工藤レン↓『究極の天邪鬼』 若干あつて

・工藤煉↓『ジャンヌダルクの再来』 何を救う気だ

・シロ↓『ボンボン・ビガーロ』 意味不明

・エロ斑↓『自称・ビジュアル系』 黙れ変態

・ロリ斑↓『世界平和を実現できる男』 ロリで！？

・エロリ斑↓『人類最後の切り札』 人類オワタ

・S斑↓『究極のインフレ男』 何やってんの!?

・冬沢↓『噂の震源地』 ぴったり

・しろうさ↓『社会の闇に輝く非常口』 苦勞人です

・変態箒↓『永遠の優勝候補』 でも優勝できない

・今までの限界を凌駕する(存在な)セシリア・オルコット↓『100万分の1の可能性』 その可能性を掴み取った

・セリシア・カカロット↓『明日が待ち焦がれている希望の星』
確かにカカロットは希望の星

・へたれ鈴↓『禁断のタブー』 へたれはタブー

・たれみつ↓『春先の暴走機関車』 どこに向かっているのか

・作者の名前↓『人間社会に紛れ込んだ火星人』 ……イノベイド?

とまあこんな感じです。

それでは失礼します。

二十三話 「目標はただ一つ」 ラウラ（前書き）

通りすがり1です。

たいへん遅れてしまい、申し訳ありません。こんな小説を楽しみに待っていて下さった方になんて言っていていいやら。まさか丸々二週間かかるとは……。どうもスランプというやつなのか、サッパリ指が動きませんでした。

今回は少しですが、生身でのバトルが入ってます。それも筆が進まなかった原因の一つだと思われます。

本当に、お待たせしました。

二十三話 「目標はただ一つ」 ラウラ

唐突に、強烈な殺気が膨れ上がった。

『——！！』

俺も、ラウラも、そして軍人でも何でもない、気配に鈍感であるはずのクラスメイトさえ震え上がるほどの、濃密なものが。コレに気付けないのは、生物として大切な部分が致命的に壊れている。

この気配は……………っ！

「ラウラ！」

「わかってる！」

即座にラウラと休戦、共同戦線を展開する。昨日の敵は、今日の友。敵の敵は味方。僕ら本当は仲良しさ！　と言わんばかりの身替わりの早さだ。

身体を投げ出すようにして全力で飛び込んでくるラウラを、身体を半身にして後ろに通す。俺が格納領域から虎木刀を取り出して構え、ラウラが勢いのまま一回転して拳銃（ゴム弾装填）を構えると同時に、吹き抜けになった廊下から無数の主席簿が飛来した。

「うおおおお！？」

「うああああ！？」

前衛の俺、後衛のラウラ。二年前、ドイツ軍のIS配備特殊部隊、

『黒ウサギ隊』という通称で親しまれている（……）
シュヴァルツェ・ハーゼ』において、名実共に最強と呼ばれたコン
ビ（千冬姉は単独の方が強かった）の神業的な連携によって辛うじ
て迎撃できているが、機関銃のような勢いで連射される弾幕（出席
簿）に徐々に押されていく。

あれ？ 何か変化球が混ざってきたんだけど？

「怒ってる！？ 怒ってるよなあの人！？」

「あ、ああ、なんか知らんが千冬姉がキレてる！ キレる千冬姉怖い！」

ヤバい、弾幕が増えた。

つて、あの……逸らした出席簿が、窓側の壁を破碎やら貫通やら
切断やらをしている音が聞こえて来るんですが……。ただの出席
簿のはずなのに、そこらのアサルトライフルよりも危険なんだが。

「こうなったらやってやろうじゃないか！ ラウラ！ リベンジマ
ツチだ！」

「！ ああ、あの時の雪辱を晴らすぞ！」

ギリ貧になるくらいなら、僅かな可能性に懸ける！ 死にたくな
いからな！

「任せたぞラウラ！」

「ああ、行ってこい！」

出席簿の迎撃をラウラに任せて力を溜め、一瞬の後にその全てを

解放して前へと飛び出す。

出席簿は気にしない、ラウラが全て迎撃してくれるから、俺がすべきことはただ一つ。この虎木刀で、千冬姉に斬りかかることだ。

「おもしろい、私に接近戦を挑むか。無論、策はあるのだろうか？」

俺の踏み込みに合わせて、一切の溜めもなく、俺以上の速度で千冬姉が踏み込んできた。やはり、俺と千冬姉の間には、まだ圧倒的な実力差がある。

「もちろん！」

が、そんなことはとうにわかっている。予想以上に速かったが、これならギリギリで間に合う。少々不安定な体勢だが、腰に添えた虎木刀を抜き放つ。居合いの要領で放たれた虎木刀が、千冬姉の身体を引き裂いた。これは……っ！

「ふ……残像だ」

俺の前、虎木刀のギリギリ範囲外で不敵に笑う千冬姉。……

…俺が虎木刀を振ったタイミングで、一歩下がった……のか？ いや、状況的にそうとしか考えられないんだが……本当に人間か？

「そら、死に体だぞ？」

気づけば、視界一杯に広がった手のひらが、俺の頭部を掴んでいた。

昔の事だ。

当時幼かった俺は、つまりトラブル事あるごとに千冬姉が束さんにキメていたアイアンクローに興味を持った。……今思えば、若さゆえの過ちな。好奇心は怖い。

どのくらい痛いのか、と二人に聞いてみたところ、千冬姉はただニヤリと笑い、束さんは顔を青くした。

やっと嫌な予感に気づいた頃には時すでに遅し。ぐしゃりと潰れていく（……）水晶玉は今でもトラウマだ。

つまり、何が言いたいかというと、だ。

俺、頭部消失の危機。

「ラウラー!!」

若干リアルな未来予想図に背筋が冷えるが、手は打ってある。

「任せろ!」

「! ちっ!」

俺の頭上を飛び越えて、ラウラが姿を現した。

「奇襲成功! ってな!」

宙を舞ったラウラは、千冬姉を飛び越えながら両手にもった拳銃を発砲、ほぼ零距离から放たれたゴム弾は、圧倒的な速度で千冬姉に迫る。

迎撃は不可。粉碎せんとばかりに、俺の頭を掴んでいた利き手は俺が掴んでいるし（いくら何でも一瞬ではふりほどけない）、蹴り技など出そうものなら、足がラウラに到達する前に俺が千冬姉を押さえ込む。

これなら……いける、か？

「ラウラ！」

「わかってる！」

なぜ、こんなことになっているのだろうか？

感じたのは、莫大な殺気。それも、とても身に覚えのあるモノ。こんなモノを放てる人は、世界を探してもそうはいないだろう。むしろ、ホイホイいたら怖い。

今、この瞬間、もう自分は死んでるんじゃないか、なんて錯覚してしまうモノ。

そんなものに晒されながら、私は『二年のブランクがあっても、とつさに連携できたという事実は嬉しいものだ』とか『時が流れても消えない絆が、私とアイツにはあるのだな』なんて場違いな事を

考えていた。い、いかん、少し舞い上がっているな。……だが、なぜ。

記憶にあるものより幾分か広くなった、初恋の君の背中を見て思う。

本当に、なぜこんなことになっているのだろう、と。

二年前のことだ。

失意の底に沈んでいた私を、教官——織斑千冬が救ってくれたのは。

私は戦うために生み出された存在だ。戦うことだけを求められ、戦うことだけを教えられてきた。

そして、私は戦いにおいて高い性能を発揮し続けていた。だが、優秀だった（・・・）私は、ISという兵器に対応するために与えられた、とある特殊な能力を制御できず、『出来損ない』の烙印を押された。

私に向けられる視線は、上位者に向けられるそれから、落ちこぼれに向けられるものへと変わっていった。ただ苦痛でしかない灰色の毎日。そんな日々を送っていた私に、ブリュンヒルデ転機が訪れた。

どんな事情があったのか、世界最強の名を冠する女性が、シュヴァルツェ・ハーゼに教官としてやってきたのだ。

「心配はいらん。一ヶ月もあれば、お前は部隊最強に戻る。なんせ、私が教えるのだからな」

それから一ヶ月。教官の指導に従った結果、でトップに返り咲いていた私に、二度目の転機が訪れた。

「お！ あんたが千冬姉が言っていたラウラか。初めまして、俺は織斑一夏。千冬姉の弟だ。よろしく」

気に食わない奴だった。

へらへらとした薄笑い、覇気を感じられない言葉遣い、馴れ馴れしい態度。奴の全てが不愉快だった。

なによりも、こんな奴が教官の身内であり、あまつさえ教官に高く評価されていることが悔しくて、妬ましくて、羨ましかった。

完全であるはずの教官が極稀に見せる、不完全な揺らぎ。こいつが、その元凶。教官を変えている張本人。

「バカ言うな、千冬姉だって人間なんだぞ？ 完全？ なんのジョークだ？ あれで案外だらしな」

思いの丈を余すことなくぶつけて、返ってきたものは、途切れた言葉と、どこからともなく飛んできた木刀が奴の頭に直撃する光景。ズルズルと教官に引きずられて行く姿に、私はいつそう奴が嫌いになった。

だから私は、私《軍人》の流儀に乗っ取って奴に勝負をしかけ、負けた。

信じられなかった。認めたくなかった。悔しかった。戦うためだけに生まれ、厳しい訓練に耐え、特殊部隊の中でも揺るぎない最強となった私が、こんな平和ぼけした奴に負けた？

その日から私は、事ある度に奴に突っかかっていた。

奴が訓練のサポートをしていた時、奴が部隊の食事を作っていた

時、奴が雑用をしていた時、奴が休んでいた時、奴が私の前を通りがかかった時、奴が訓練していた時、奴が部屋でくつろいでいた時、奴が街で買い物をしていた時、奴が寝ている時、奴が私以外の部隊員と話していた時、奴が私以外の部隊員と一緒に居た時、奴が私以外の部隊員の頭を撫でていた時、奴が私以外の部隊員を誉めていた時、奴が私以外の部隊員の相談にのっていた時、奴が私以外の部隊員を慰めていた時、奴が私以外の部隊員といちゃついていた時、奴が私を見なかった時、奴が私を誉めなかった時、奴が私に構わなかった時。

いつでもどこでも私は奴に挑み、その度に負けていた。

「隊長と一夏は、本当に仲がいいですね」

そうして三ヶ月が経った頃。副隊長であるクラリツサの何気ない一言で、私が奴を打ち負かすために挑んでいたはずの勝負が、いつしか奴と触れ合うためのものに変わっていたことに気づいた。悔しさしか感じなかった敗北に、いつからか純粹な敬意と憧れ、そして確かな胸の高鳴りを感じていた。

この三ヶ月で変わったのはそれだけではない。

私にとってあれほど強固だった教官像も、奴が今まで見せようとしなかった教官の一面を引き出すにつれて、変わっていった。具体的には、ちよつと残念な方向に。

「千冬姉、教え子の前で良い格好したいからってちよつと張り切りす」

決して人体からしてはならない音と共に、裏庭に引きずられていく姿に、奴への評価も変わった。予想以上の馬鹿だ、コイツ。

奴も参加していた近接戦闘訓練（生身）において、たまたま組んだ際に発覚した相性の良さに、いつしかただの敵から敵兼相棒へと変わっていた。…………その能力の高さゆえに、教官との模擬戦を何度もやらされたがな。

部隊の雰囲気も、以前の殺伐とした無機質で冷たい場所から、奴曰わくアットホームで温かい場所へと変わっていった。有事の際は即座に切り替わるがな。

他にも…………？ 奴の事を考えていると、胸の奥から湧き上がってくるこの温かな感情はなんだろう？

自分の思考に混乱していた私に、クラリッサが決定的な一言を投げた。

「いや、恋なのでは？」

…………そんなはずはない。私は奴が嫌いだし、奴もいつも喧嘩をふっかけてくる私が苦手なようだしな。そう言えば奴は、私に挑まれる度に苦笑はするものの、断ったことは一度もない。ふむ、嫌いなヤツだが、優しくて、強い。まあ、認めてやらないこともないな。

「いや、ツンデられても」

それから、奴が帰国するまでの間に色々なことがあったが、私が初恋を自覚したのは別れの時だった。

ある日、唐突に私の能力を他の隊員のように制御できるよう調整

した奴は、隊員一人一人に合わせて作成したOSのデータを私に渡し、帰国する旨を伝えた。

そもそも奴がシュヴァルツェ・ハーゼに来たのは、教官が私の能力を制御できるよう調整してくれと依頼したからだ、その時になって初めて教えてくれた。

そして、故国では学生だという奴は、依頼を達成した以上、留まる理由はない、とも。

私と共に見送りに来た隊員達が号泣する中、私は困惑していた。嫌いな奴が居なくなったら清々するはずなのに、私の胸は苦しくて痛かった。

その痛みの理由を考えて、気づいた。

私は、奴に……一夏に、恋をしているんだ。

だが、遅すぎた。一夏はすでに空の上。思いを伝える事はできない。私の初恋は、始まることすらなく、終わってしまった。

「そんなことはありません。これから先、機会がないわけじゃありませんし、ないなら作れば良いのです」

落ち込んでいた私を親身になって慰め、積極的に相談に乗ってくれたクラリッサには、本当に感謝してもしきれない。日本の文化について詳しく教えてくれたしな。

そして、想いを自覚して二年。機会はあった。

目標はただ一つ。今や我々の『家』となった部隊に、教官共々新たな『家族』として迎えることだ。

………そのはずだったのに、なぜ私は出席簿を撃ち落としているのだろう？　しかも、一夏が教官の神経を逆撫でしてくれたおかげで、弾幕がいつそう激しくなった。量も、威力も。

「こうなったらやってやろうじゃないか！　ラウラ！　リベンジマツチだ！」

リベンジ……っ！　ああ、そうだな、ちょうどいい機会だ！

「ああ！　あの時の……あの時の雪辱を晴らすぞ！」

今でも鮮明に思い出せる。一夏《弟》と仲が良いのが気に食わないのか、やたらといじめられた日々………！　せめて一太刀、と二人で誓うも、成されることはなかった悲願を、今こそ！

「任せたぞラウラ！」

呐喊の構え………出席簿の迎撃を私に任せて突っ込むのか………いいだろう、お前を信じるぞ！

「ああ、行つてこい！」

後のことは考えず、迎撃にのみ集中する。自身と一夏に迫り来る脅威《出席簿》を撃ち落とし、銃身で叩き落とす。

ん？ あれは……手招き？

「おもしろい、私に接近戦を挑むか。無論、策はあるのだろうか？」

見間違い……か？ いや、確かに一夏は……っ！ ま、まさかあいつ、あれをやる気か！？

「もちろん！」

居合いの構え。コイツ……本気だ。二人でプランを練ったものの、結局練習すらできなかったというのに。

「ふ……残像だ」

ええい、仕方ない！

覚悟を決め、目の前の木刀に足をかけ（……………）
た。

「そら、死に体だぞ？」

教官のアイアンクロー。二年前、我々を恐怖のどん底へと叩き落としたそれが、今一夏を襲おうとしている。

「綺麗な……花……こんなに……たくさ……ん……」

「こわい……いや……こわいよ……お……」

「暗い……寒い……ここは……いや……だ……」

「先輩……もう一度だけ……貴女……に……」

「へ……へへ……だめ……だったや……」

「中尉……すみま……せん……」

「もう……疲れた……よ……」

「そんな……ISを素手で……」

「おにい……ちゃ……助け……」

「サラ……ごめん……貴女を……また……一人……に……」

「少しだけ……少し……だけ……休む……よ……」

「さよ……な……ら……」

「隊長……後は……任せ……」

「ここまで……なの……？」

「みんな……逃げて……」

「誰か……Dドラ……を……消して……」

「ほう……き……ちゃ……」

「これで……これでやっと逝ける……ニール……貴方の元へ……」

「……」

「私は……まだ……一夏に……」

「桜……桜が、綺麗……だな……しろ……また……いつ……か……」

「……」

これが、犠牲となったシュヴァルツェ・ハーゼの部隊員+αの声……その一部だ。一度食らえば、もれなくあの世が垣間見えると評判になる破壊力だった、とだけ言っておこう。

教官が教育的指導（本人談）を行う際には、ほぼ確実にアイアンクローを使用するのはわかっている。そして、私達はそれを利用する。

「ラウラー!!」

がしりと、アイアンクローをかけようとする教官の利き腕を一夏が掴む。今こそ、最大の好機！

「任せろ！」

一夏を飛び越えて、宙を舞いながら照準を合わせる。

「！ちっ！」

一夏が教官を拘束している以上、反撃は気にしないでいい。引き金を引くことだけに集中する。

「奇襲成功！　つてな！」

教官に雨霰と銃弾が降り注ぐ一方、私にくるりと一回転して着地。自由に動けない今なら、いくら教官でも回避は難しい………はず！！

「甘いわ未熟者！」

ドドドドドドドドッ……！

『……………は？』

轟音が響いた。音の発生源、瞬間的にブレた教官の左腕には黒い腕時計が。

「さすがはG-I-S-H-O-C-Kだな、耐久力が違う」

え？　え？　……まさか、腕時計で叩き落とした………のか？

「ふむ、悪くはない……が、甘い。動きを止めるな馬鹿者」

ほんの僅かな時間……数瞬にも満たない刹那、私達の動きが止まった。

そして、それが致命打となり、勝敗は決した。

「しまっ！　ラ、ラウラ、逃ぐああああ！？」

背後から文字ではとても表現できないような破滅的な音が届くが、振り向けない。一夏《戦友》は命を賭して私に未来を託した。

なら、私はここで終わるわけにはいかない。どうにか態勢を整えなくては……まずは教室から脱出――

「今は、ホームルームの時間ですよ？」

――しようと飛び出した瞬間、顔面を鷲掴みにされた。

「ふぐう！？」

視界のほぼ全てを埋め尽くす指の隙間から、僅かに見覚えのある笑顔が垣間見えた。

「や、山田教官………？」

先程職員室で挨拶した時と変わらず、山田教官はニコニコと人の良さそうな笑顔を浮かべている。

「ボーデヴィツヒさんの経歴は知っていますが、ここは軍ではありません」

表情は笑顔。声も穏やか。どこからどう見ても優しそうなお姉さんなのに、見ているだけで背筋に震えが走るその眼はなんですか？なぜ、私を空中に固定している貴女の細い腕に、少しずつ力を込めていくのですか？

「文化の異なる国から転入してきた以上、わからないことはたくさんあるでしょうし、それは仕方がないことです」

なぜ、そんなにも柔和な笑顔で、そんなにも濃密な殺気を纏っているのですか？

「ですが、教室でいきなり戦争を始めない程度の、最低限の常識は持っておきましょうね？」

私の頭からも、破滅的な音が響いた。

「ドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』所属兼ドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒだ」

あれから数分後。千冬姉はなんとか回復したラウラと転入生その2（罰ゲームの娘）を前に立たせ、自己紹介をさせている。

が、俺とラウラのコミュニケーションに度肝を抜かれたらしく、ラウラに続いて登場した『世界で二人目の男性IS操縦者』（本人談）、シャルル・デュノアに目立った反応を返すクラスメイトは居なかった。俺？ 現在進行形でぶっ倒れてるよ。

「ただの学生に軍人としての興味はない。この中に国家代表、代表候補生、ライセンス持ちの整備士、コック、パティシエ、ブリュンヒルデ、ブリュンヒルデの弟がいたら私の元に……」というかシュヴァルツェ・ハーゼに来て欲しい、好待遇を約束しよう」

くらすめいと の こんらん が ひどくなった ！

国家間の複雑な思惑が絡み合っているここでストレートに勧誘するか、普通？ というか、一部えらくピンポイントだな。

「一生徒としては、友達になってくれたら嬉しい。以上！」

くらすめいと は なごんだ ！

ああ、部隊員《家族》以外と個人的に接するのは初めてだったな。社会生活一年生。

「銀髪ロリキタ——！！」

へんたい が め を さました ！

ドゴオ！

へんたい は きぜつ した 。

させたの俺だけだ。虎木刀は投擲もできる優れものです。

「うむ、気になるころは多々あったが、というか気になるところしかなかったが、まあいい。デュノア、次はお前だ」

うん。二年の間に何があっただろうね？ 十中八九クラリツさんのせいだろうけどな！

「フランス代表候補生のシャルル・デュノアです。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて転入しました。みなさん、よろしく願います」

ふむ………ッコミ待ちなのか？

二十三話 「目標はただ一つ」 ラウラ（後書き）

通りすがり1です。

すいません、お待たせした割にクオリティは低いです。生身のバトルが難しいんですよ！

さて、今回は久々のIS戦闘が入る予定です。みなさんの評価がただのへたれで固定されているような気がする鈴木、最近空気になるセシリアをなんとか活躍させようと考えています。もしかしたら上下になるくらい長くなるかもしれません。

そして、その次はやっとシャルル視点の予定です。色々と批判がきそうな気がしますが、やってみたいと思います。

あ、それと、キャラ設定みたいなものは書いた方がいいんでしょうか？ 書いた方がいいなら、一報ください。

PV15万、ユニーク2万、350pt、お気に入り登録100突破しました。応援、本当にありがとうございます。

それでは、失礼します。

二十四話 「ひ、酷い目に会いましたわ……………」 セシリア（前書き）

お久しぶりです、通りすがり1です。

一週間以上も更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

主な原因はスランプと塾です。言い訳にしかありませんが、これでも一応受験生なんです。

今回はISの戦闘ですが……………あまり上手く描けた気はしません。すいません、クオリティまで下がってるかと思われませんが、お付き合いください。

二十四話 「ひ、酷い目に会いましたわ……………」 セシリア

『きゃああああ——っ！！』

ラウラの自己紹介（+α）によって微妙になった空気は、自己紹介によって『二人目の男子』だと確定した貴公子（♀）の登場によって粉碎された。

「男子！ 二人目！」

「二人も男子がいるうちのクラスは勝ち組！」

「美形！ 貴族っぽい！」

「お父さん、お母さん、IS適性をありがとう！」

クラスメイトに、興奮の嵐が吹き荒れた。

のは、千冬姉が鎮圧するまで……約五分前までの事だ。紹介だけしておいて、コミュニケーションを取る間もなく即授業（しかも教室外授業）という、転入生にとってなかなか非道な仕打ちにIS学園の本質を垣間見た俺達は、第二アリーナ更衣室にいた。…………ラウラとは少し話がしたかったんだが。

ここに辿り着くまでの道中？ 迫り来る魔の手は風よりも速く走り抜けて置き去りにしたぜ。シャルル？ 走るの遅いから途中から

肩に担いで運んでたよ。

「ええ、と……………」

説明もろくにせずに教室から連れ出したからか、どう接すればいいのか戸惑っているご様子。

「俺は織斑一夏だ。一夏でいいぞ。よろしく」

につこりと、普段より笑顔を30%増量（当社比）して自己紹介。挨拶と第一印象は大事だよな。

「あ……………ぼ、僕はシャルル・デュノア。シャルルって呼んでくれ。よろしく」

ぺこりと、軽く頭を下げて自己紹介。うむ、礼儀正しい奴だ。

……………うーん。中性的な顔付きだし、仕草も男性的だけど、骨格とか体つきからしてどう考えても女だよな、こいつ。

大きい制服で体格を隠してたせいで確信が持てなかったけど、さつき担いだ時の感触から確実だろうな。喉仏みたいな男性的特徴もなかったし。

「ど、どうした？」

「おおっ！？」

いつの間にか、端正な顔が視界一杯に広がっていた。観察している内に、無意識に顔を近付けていたみたいだ。

「すまん。綺麗な顔してるなー、って思ってた」

うん、男の顔じゃないよな。…………あれ？ 女の子（男装）を男子更衣室（仮）に連れ込んで、キスできそうな距離まで顔を近づける…………俺、変態っぽくね？

「き、綺麗って…………男に言う台詞じゃないだろ、それ」

頬を軽く染め、僅かに視線を逸らしながらの返答。仕草からなにから完璧に男なのに、誉め言葉への反応は普通に可愛らしいな。いや、本当に男だったらアウトなりアクションだけだな、それ。

「ああ、すまん。嫌だったよな、気をつけるよ」

さて、何の罰ゲームかは知らんが…………どうしてくれよう、この男装っ娘？

？「それ何の罰ゲーム？」と率直に聞く。

？素知らぬ振りして華麗にスルー。

？とりあえず情報収集する。

？着替えをじっと見て反応を探る。

？襲う。

？↓触れないであげるのが優しさ。却下。

？ ↓ある意味無難。保留。

？ ↓ある意味無難その二。保留。

？ ↓俺が変態確定になる。却下。

？ ↓なぜこの選択肢がある。却下。

というわけで、？と？の間を取ろう。適度にスルーしつつ、情報を集める。変態にならない程度に。

「つと、そろそろ時間だから俺は先に行くぜ。早く来いよ？」

方針も決まったので、制服からISスーツに着替えて更衣室の扉に手をかける。遅刻なんかしたら物理的に地獄を見かねないし、さつさと行くに限る。

「へ？ は？ え？ い、今着替えたのか！？ ええ！？ 瞬きもしてなかったのに、いきなり一夏が制服からISスーツに変わってたんだけど！？」

うむ、なんとなく編み出してみた高速着替え術だ。甲冑だろうが、鎧だろうが……果ては十二単だろうが最長二秒でフル装備できるぜ！ 弾曰わく、ゲームの装備変更のごとく服が切り替わる様は、たいへん不気味だったそうだ。しょぼ〜ん。

「いやいやいや、おかしいだろ！？ どんな速度だ！？」

「意外と練習すればできるもんだぜ？ なんだったら今度教えてやるつか？」

素人はちよつと関節とかを外しておくとかやりやすいぞ。

「全力で遠慮する！」

残念だ……… 実に残念なシャルルだ。

「さも僕が残念なような言い方はやめてくれないか!？」

止まっていた足を動かし、第二グラウンドに向かった。

……… なんで第二グラウンドに行くのに、第二アリーナの更衣室を使つてたかつて? 誤差みたいな数の男子のためには更衣室を作ってくれなかったから、空いてる場所を使つてるんだよ!

第二グラウンド。なんとか間に合つたシャルルを迎えた今……… 絡まれてます。

「……… 今度は、いったいどこの誰ですの?」

最近空気だったセシリア。諦めたような、呆れたような表情が印象的だ。

「あんた……… またあんなちっちゃい娘を………」

うん。その不名誉な称号を与えられそつな認識の仕方はやめてく

ださい。

「あの銀髪ロリをしようか「ワンパターン！」」

唸る虎木刀。

「ふむ。英国と中国の代表候補生か……試合の映像は観させてもらったが、なかなかの腕前だな。どうだ、ウチ《シュヴァルツェ・ハーゼ》に來ないか？ 大歓迎だし、待遇も約束しよう」

どこからともなく現れたラウラ。他国の代表候補生をいきなり勧誘するなよ。国際問題になったらどうする。

それと、その両手で抱えたお菓子の山はなんだ？

「うむ、なぜかクラスメイトの皆が私にくれたのだ」

ぺかー、と擬音を付けなくなるような笑顔で俺にそれらを見せつけると、いそいそと格納領域に仕舞っていく。エサをせっせと確保する小動物のような仕草に、クラスメイトの一部が悶えているのが視界に映る。うん、気持ちわかるよ。

「あのさ、勧誘しといて放置ってどうなのよ」

脱力したような声を漏らす鈴。

「ああ、なんかまたボケ要員が増えた気がしますわ。いくらなんでもツツコミきれまんわよ……」

愚痴るセシリア。

「安心しろ、私が手伝ってやる。ちょうど今、ツツコミが必要な奴が私の前に三人もいる」

そして背後から這い寄る鬼教官。あ、箒踏んでる。

「ち、千冬さん……………」

「お、織斑先生……………」

「お、織斑教官……………」

這い寄られて怯える仔羊が三匹。

「そら」

晴れやかな青空に、景気の良い打撃音と悲鳴が響き渡った。

「ふむ、少しやりすぎたか？」

ラウラ、轟沈。

屈強な（笑）軍人（全身ぶにぶにです b y クラリッサ）とはいえ、朝からこうもダメージを受け続けては耐えられるものではないだろう。

「凰！ オルコット！ 模擬戦をしろ」

「サー！ イエッサー！」

「了解であります！」

おお、これがパブプロフの犬か。見事に躡られてるな。

「お相手は誰なのでしょうか、サー？ 鈴さんでしょうか？」

「誰が相手であろうと、この命尽きるまで戦い抜いてみせます、教官！」

熱血だな、鈴。

「オルコット、授業が終わったら私のところに来い。話がある。主に私に対する敬称についてだ」

セシリア終了のお知らせ。顔が見る見るうちに青ざめていく。こ愁傷様。

「それと、対戦相手は「私ですよ」」

！……………うおう、すげえな。

ポン、と二人の肩に手が置かれる。

『っ！？』

二人や周囲の生徒はもちろん、気配察知には自信を持っていた俺にさえ直前まで気づかれないほど、極限まで気配と音を殺せるとは………ふむ、薄々そうかとは思っていたがやはり――

「よろしく願いますね」

——山田先生、あなたは……。

普段のぼわぼわした雰囲気からは想像もつかない、まるで抜き身の刀のように静かな威圧を放つ山田先生。にこにこ笑顔を絶やしていないのが逆に怖いよ。

「……ええ、お手柔らかに願いますわね？」

セシリアはなんとか返答するも、流れる冷や汗が止まっていない。

「……山田先生、でしたよね？ 胸を借ります。というかください」

カタカタと、軽く全身を震わせながらも軽口を叩く鈴。腰が引けてなければもっと良かったと思うぞ。

ラファール・リヴァイヴ。

フランス最大のIS企業、デュノア社製の第二世代型ISだ。安定性、汎用性、操縦性など、機体そのものの基本性能において高い水準を示しつつも、数多くの後付武装を保持できることが特徴。

好きなようにカスタマイズできる自由性、及び極端なカスタマイズにも追従できる汎用性を好む者も多く、第二世代型の最高傑作とも名高い。世界第三位のシェアを誇る、世界的にも有名な機体。

という説明をシャルルがしていた。さすがに実家製のISには詳しいな。まるでセールスマンのようにペラペラと口が回る。

シャルルの美声にうっとり耳を傾ける女子が量産されている一方、鈴とセシリアは山田先生が駆るラファール・リヴァイヴを相手に必死に立ち回っていた。

「鈴さん、遠距離戦に徹しますわよ！」

「わかってるわ！ 第三世代型《私達》の強みを活かすわよ！」

戦闘が開始した瞬間に交わされた言葉通り、戦闘開始から今まで二人は一貫して距離を取り続け、決して山田先生と接触しないように気を払っていた。

鈴は常に後退しながら広範囲に衝撃砲をバラまき、接近を防ぐ。セシリアがその背後から、スナイパーライフルとBTを駆使して山田先生本人を狙い撃つか、あるいは反撃を妨害する。

すげえな、即席とは思えない息の合ったコンビネーションだ。

対する山田先生は、不可視——それも広範囲にバラまく散弾型の衝撃砲を避け、撃ち落とし、切り払いながら前進。距離を詰めようとすると、スターライトとBTの狙撃により遠距離武装による反撃すらままならず、後退。

一見、完全に押さえ込まれたように見えるが、戦闘が開始してからすでに数分。未だに鈴達が攻めきれていないという事実が、両者の間にある絶対的なまでの技量差を物語っている。

「なっ……さけないわよねホント！ プライドかなぐり捨てても膠着状態に持ち込むのがやつと！？」

「二人がかりで！ 最新型の性能と特殊武装に頼りまくって！ 陰湿なハメ技のようなことまでやってますのにね！」

んー……………二人は愚痴ってるけど、現時点では最良の選択だよなあ。

実力、経験共に圧倒的に劣ってる相手に、ひたすら勝ってる部分のみで戦う。正しい判断だな、酷い構図だけど。

「なるほど……………さすがは代表候補生ですね。正直、予想以上でした」

感心するように呟く山田先生……………余裕そうっすね。最適化もしてない訓練機でいとも簡単に凌ぐとは……………。

あれが――

「ですが、まだ未熟です。そろそろ終わらせましょう」

――ヴァルキリー級、というもののか。

予想外……………いや、予想以上と言っべきでしょうか？

視界に映らない弾幕が私の進路を阻み、その間を縫うように飛び交うBTは、互いを守り合いながらも私の行動をことごとく妨害していく。時たま襲ってくる高出力のレーザーライフルにも、何度肝

を冷やしたことが……。

全く持つて見事な連携です。鳳さんがB Tの動きを読んで衝撃砲をバラまいているのか、オルコットさんが鳳さんの配置を読んで動かしているのかはわかりませんが、一方的でない信頼がなければ、この状況は成り立ちません。もう幾度となくB Tが墜ちていることでしょう。

「ですが、まだ未熟です。そろそろ終わらせましょう」

これからの成長が、本当に楽しみです。

エネルギーチャージのためにB Tが退くのに合わせて、シールドを展開。衝撃砲を防ぐ。

「足が止まったわ！ ってデカ！ なによアレ!？」

「どんな硬度ですの!？ スターライトの直撃を喰らって焦げ目すらできないなんて！ ……まさか日本の新兵器!？」

……あー、これ失敗作なんです。なにせ――

「推測重量………はあ!？ なによこれ！ 馬鹿じゃないの!？」

馬鹿みたいな防御力の代償に、馬鹿みたいな重量になってしまったんですよ、これ。

………これ支えるために、私今スラスターとPICを全開にしているんですよ。慣性制御を利用したISの推進力でもロクに動けない重量なんて、使い物になるわけがありませんよね？

常識的には(……)。

「展開」

ラファール・リヴァイヴ最大の切り札を右腕に装備。

細工は流々、仕上げをご覧じろ……外しはしませんよ？」

「『灰色の鱗殻』！」
グレー・スケール

第二世代型最強の攻撃力を誇るパイルバンカー。通称『盾殺し』
『シールド・ピアス』………なんですが、私の場合は使い方的に
『盾射出』のが正しそうですね。

「えええええええ！？　なんか飛んできたあああああああ！？」

はい。私の隠し球です。

「げ、迎撃しますわ！　破壊はできずとも逸らすぐらいなら………
」！」

あら？　言つて………はいませんでしたけど、それには細工があるんですよ？

空飛ぶ鉄塊。端的に言うならそう表現すべきモノがこちらに来て
いる今、打つべき手はただ一つ、迎撃のみ。

鈴さんの弾幕が少しでも止めば、間違いなく山田先生は私達に接近する。そうなれば私達に勝ち目はない。それどころか、シールド

の陰に隠れて接近している可能性もある。だから、回避は選べない。勝利の可能性が残されている唯一の道、迎撃。

幸いなことに、ブルー・ティアーズにはそれができる。

（切り札を使う時は………今！）

「ブルー・ティピツ!？」

凄まじい衝撃が私を襲った。

前略、セシリアがはねられました。

追伸、はねられた瞬間のセシリアの表情が忘れられません。

「えええええええええええええええ！？」

あ、ありのまま、今起こった事を話すわ！

セシリアが迎撃体勢をとったと思ったら、シールドが爆発してセシリアを挽いたのよ！

な、何を言ってるのかわからないと思うけど、私も何がどうなったのかわからなかったわ。

頭がどうにかなりそうよ…… あれは電磁加速だとか、トリックだとか、そんなチャチなものじゃあ断じてないわ……。

もっと不自然な加速……そう、まるで瞬時加速のような

「あれはですね、簡易版PICとロケットエンジンを併用して、擬似的に瞬時加速の真似事をしてるんですよ。きっとロケットエンジ

ンを起動させた時の光と音を、爆発と錯覚したんでしょね」

思わずセシリア（withシールド）の行方を追っていた私の耳に、声が届いた。声は、すぐそこから聞こえた。

「っ！ 双天牙月！」

瞬間的に両手に展開した双天牙月を、挟み込むようにして振るう。

「甘いですよ」

「痛っ！」

手首に走る衝撃に、左手の牙月が飛んでいった。

瞬時加速で得た加速のままにすれ違うその瞬間、展開した近接ブレードを居合いの要領で抜き放ち、牙月を振るう私の左手首を押さえて強引に突破した……と。

「完全にバグキャラですよね！」

即座に反転、ここから逆転できそうな手なんて、私じゃ一つしか思いつかない。

その方法だつて、山田先生が後ろを向いている内に行動を起こさないと成功のしようがない。

ただでさえ分の悪い賭け、痛みに怯んでいる時間なんてないのよ！

空中を踏み込む（……）。完全に見様見真似だったけど、なんとか成功。さらに、出力を絞って瞬時加速を発動。全身をねじって回転させ、その遠心力の全てを右手に握った牙月に乗せる。

振り向いて迎撃の体勢に入る山田先生の顔は、驚きに染まっている。……確かにハイパーセンサーは全方位余すところなく死角はないけどさ、いくらなんでも反応が早すぎない？ 私が反転してからほぼノータイムで振り向いたわよね？

それはさておき、あれほど避けてきた接近戦を挑んできたことに驚いたのか、それとも一夏の変態機動を真似たことに驚いたのかはわからないけど、ようやく一矢報いたわね。

「はあっ！」

真正正銘、全身全霊を賭けた全力の一撃を振り落とした。

「ひ、酷い目に会いましたわ……………」

威風堂々とした佇まいで大地にその身を突き立てるシールド。その陰からゴソゴソと、這い出てくる苦労人が一人。

セシリア・オルコットだ。

「エネルギー残量は、雀の涙ほど。スラスタ―は全損…………… P I C は生きてますけど、これじゃ飛べませんわね……………。ああっ！ B T が墜とされてますわ！ あ、一つ生き残って…………… 推進部が破壊されてるじゃありませんか！？ 抜け目ありませんわね……………。さて、鈴さんは無事」

自身のコンディションを確認するためにシールドの陰に隠れていたセシリアが、状況を確認するためにそろそろと首を出した。

ザンツ！

瞬間、チツと何かが耳元を掠めて行き、残り少ないシールドエネルギーが僅かに削られた。

「ヒツ！？」

恐る恐る、全く反応が追いつかない速度で背後の地面に突き立ったモノを確認する。鈴の双天牙月、その片割れだ。

「！ 鈴さん！」

それが降ってくるのが何を意味するかに思い当たり、空に意識を向けた。

そこに、鈴の姿はなかった。

あるのはただ一人、山田先生の姿のみ。その真下に、ゆっくりと降下していく鈴がいた。

ISの保護機能なのだろう、重力を無視した独特の動きで地面へと向かっている。ピクリとも動かないところを見ると、気絶しているようだ。小さいはずの着地音が、やけに大きく聞こえた。

「っ……………！ 見事でしたね。いいのを貰いました」

山田先生の呟きに、はっと我を取り戻して見てみれば、山田先生のラファール・リヴァイヴは腹部の装甲が碎けていた。

「それは……」

「ええ、鳳さんです」

信じられなかった。あれほどの強さを誇る山田先生に、代表候補生とはいえせいぜい十五歳程度の小娘が一矢報いたのだ。

（別に、普段のへたれっぷりやダメっぷりにありえませんか！
などとは思っていません。ええ、全く持って一切合切これっぽっちも思っなどいませんわよ？）

「では、後は私がトドメを刺すだけですわね！」

自らを鼓舞するように吼えたセシリアは、展開したスターライトの引き金を引く。臆病な友人が血路を拓いたのだ、自分が諦めるわけにはいかない。

「ふふつ、やはりそう来ますか。本当に貴女達の将来が楽しみです
ね」

だが、それは悪足掻きにすぎない。ISだからこそ可能な、不規則な機動でみるみるうちに距離が詰められていく。非常識な密度の弾幕を張ってようやく遠ざけられるような相手を、たった一丁のスナイパーライフルで足留めすることなどできるはずもない。当然の結果だ。

「あら！ 射撃武器は！ 使わないんですの！？」

「ええ、飛べない相手をイジめる趣味はありませんので」

距離がさらに縮まる。

「余裕ですね！」

「それでも教師ですから、生徒の全力くらいは受け止められませんとね……………ですが」

ついに手を伸ばせば届く距離まで近づいた。振りかぶる山田先生の手には、すでに近接ブレードが握られている。

「今日の所は、ここまでです」

「かかりましたわね！」

翻るスカートから放たれる、一発のミサイル。さっきは不発に終わった切り札《BT》だ。

「残念ながら、予想範囲内です」

振りかぶったのはフェイク。即座に体勢を整えた山田先生に、初速が付く前に蹴り飛ばされ、もう一発のBTを忍ばせていたシールドの陰に飛び込んだ……………。

成功していれば間違いなく勝利に終わっていたであろう策は、再びシールドが宙を舞うという結果に終わった。

最後のBTを失ったセシリアの目には、今度こそ斬撃を放とうとする山田先生が映っている。

それを見て…………セシリアが笑った。

「かかりましたわね！ インターセプター！」

「な！？」

蹴りというワンアクションを強引にねじ込んだ今の山田先生は、どう見ても隙だらけだ。

近接戦闘が苦手なセシリアでも、例の試合を経て以来最も信頼を置く武器の一つとなったインターセプター式型を展開して一撃を叩き込めるぐらいには。

「これで！ いかがですか！」

完全に意表を突いた一撃。コマのように身体を回転させ、右から左へと風払われるそれは、間違いなくセシリアの全力だ。吸い込まれるように鈴が残した傷痕へと向かったそれは、瞬時加速を利用して無理やりに間に合わせた斬撃によって防がれた。

「本当に……！ 予想を飛び越えてきますね………！」

跳ね上げられるインターセプター。全力の衝突に、セシリアの握力が耐えられなかったのだ。

「まだ一撃、残ってますわよ！」

最後の切り札は、鈴が残してくれた。

「ああああああ！」

回転の勢いのまま、地面に突き立つ牙月を引き抜いて振るう。

そして、それは地面へと叩きつけられた。

「え……………」

完璧なタイミング。インターセプターを跳ね上げた近接ブレードは、どう振り下ろしても間に合わない。勝利は確実だったはず。

唯一、誤算があったとするなら――

「……………二振り目を使うことになるとは思いませんでした。見事です」

山田先生が、二刀流であったこと。

「終わりです」

迫り来る刃。

回避は……………不可、体勢は崩れきっている。

防御は……………不可、装備は何一つ残されていない。

（本当に……………？）

感覚が引き延ばされる。時間の流れが極端に遅くなり、頭が狂ったように回転を始める。

（本当に、装備は全て使い果たしましたの……………？）

否、唯一つだけ、残っているものがある。

（イメージしなさい、軌跡を。そうしなければ、届きはしない）

イメージする。推進部を失い、地に倒れ伏した最後の一滴から目標へと続く一筋の軌跡を。

（これが……ラストチャンスですわ）

正真正銘の、最後の一撃。

（応えて……）

「ブルー・ティアーズ」

勝敗が決した。

放課後。俺とシャルルは俺達の部屋にいた。

「凄かったな、一夏！」

興奮した様子で話すシャルルの姿に、苦笑が漏れる。

「シャルル、ずっとそればっか言ってるぞ？」

「本当に凄かったじゃないか！ 負けたとはいえ（……………）

、あんな戦い！」

「あー、惜しかったよな」

最後の一撃。セシリアの偏向射撃は、紙一重で山田先生に当たらなかった。

どうやら一皮剥けたようだが、いくらなんでも体がついて行かなかったみたいで、山田先生に直撃する寸前で気絶してしまった。当然、セシリアの思考で制御されていたビームは直進運動に戻り、山田先生にヒットすることはなかった。

正直、二人が山田先生相手にあれだけ戦えるとは思わなかった。連携がどれだけ重要なのか思い知ったよ。

「本当に……どうしたらあのように戦えるのか……！」

未だに興奮の収まらない、男にしては可愛すぎる（……………
……）同居人を見る。

今、この場にいるのは俺とシャルルのみ。話すなら、今しかないだろう。このままだと、今夜はこの部屋に二人きりで過ごすことになりかねんしな。

「なあ、シャルル」

「山田先生の操縦も……なんだ、一夏？」

いや、話を遮ったのは悪かったけどさ、そう不機嫌そうにしなさんな。美人が台無しだぞ？

「いや、いつまで男装してるんだ？ お前」

二十四話 「ひ、酷い目に会いましたわ……………」 セシリア（後書き）

通りすがり1です。

はい、相変わらずなぜかセシリアが活躍していますね。なぜバトルになると良い役回りになるのでしょうか、謎です。

今回は性能差について書きましたが、某連合とZ A F TがVSするゲームに例えると、二人のタッグはプロヴィ（常時ラッシュ覚醒）&グフ・イザーク機（常時スピード覚醒）VSフォースインパルスのようなものです。最初からすでに詰み気味です。少なくとも、プレイヤーが相手なら通1は勝てる気がしません。

おまけですが、通1のイメージ的に鈴の一撃はエクシアの特格です。ぐるぐる回るアレ。

無駄話をしてしまいましたね。

さて、次回はついにシャルル視点のお話（の予定）です。通1は今から罵詈雑言が来るのではないかとビクビクしております。

できるだけ善処はするつもりですが、次回の更新も今回ぐらいかかるかもしれません。できるだけ善処はしますよ？ 本当に。

それでは、失礼します。

二十五話 「僕へ私と俺」が、母さんを守る」 シャルロット（前書き）

通りすがり1です。

すいません、盛大に遅れました。前回以上の大遅刻です。

言い訳になりますが、週五の塾とスランプ、要求文章レベルの高さと悪条件が重なってしまい、遅れました。本当にすいません。

さて、今話は今まで散々作者がビクビクしていたシャルロット回ですが……批判は甘んじて受けます。嫌いな方も多いでしょうから。

しかも、前述した通り難易度が高く、待たせた割りに文章レベルが低いです。

こんな駄文でも、待ってくださった方々が楽しめたら幸いです。

二十五話 「僕へ私と俺」が、母さんを守る」 シャルロット

俺——シャルル・デュノアは、転生者だ。

といつても、ネット小説によくある『神様に誤って殺された、お詫びに能力をもらってチート三昧、目指すはハーレムだ!』とか、『死の間際に知り合いの魔術師に飛ばされた、せつかくだから第二の人生を楽しむぜ!』とか、『神様が暇つぶしのために原作ブレイクしてこいとさ、まあ好きにしていらいけどさ』といった類のものではない。

人為的(という表現が正しいのかは知らないが)に、あるいは意図的に起こされたものではなく、単なる偶然が重なったことによつて生まれた産物。俺が経験したものは、そういうものだ。

突出した能力を持つ者は、異常として認識される。

生まれながらに『俺』の『思考』と『知識』を持っていた俺もその例に漏れず、同年代の輪からは弾かれ、大人達には気味が悪いと避けられていた。

年齢不相応な思考と知識を持つていようが、精神的にはただの子供でしかなかった俺は、事あるごとに自室に引きこもっては泣いていた。

そして、その度に俺を慰めてくれたのは母だった。

「たしかに、シャルは普通の子供じゃないかもしれないわね。でも、シャルがどんな子であれ、私の愛しい娘であることに変わりはない

わ。私がお腹を痛めて産んだ、私の家族。安心して、私はシャルの味方よ。それに、いつかきっと私以外にもシャルを大切に守って、守ってくれる人が現れるわ。お母さんが保証する」

母は、強く、優しい人だった。

どんな時でも笑顔を絶やすことなく、真っ直ぐに生きていた。落ち込む俺を、他人の視線なんて気にするなと笑い飛ばし、ただひたすらに無償の愛を注いでくれた。

それが、嬉しくて、申し訳なかった。

真っ直ぐに『自分』を愛してくれたことは嬉しかったけれど、こんなにも優しい人の子供が異常な『自分』なんかでいいはずがない。

だから、役に立ちたかった。

母の力になりたかった。

母の支えになりたかった。

母を守りたかった。

でも、できなかった。

俺の心底からの願いに、『俺』の知識と思考は、俺《ただの子供》にできることなどないという答えを返すだけだった。

笑顔の裏で苦労を重ねる母を、俺はただ見ていることしかできないまま、月日は流れていった。

自分が転生者だと自覚したのは、俺が六歳の頃。母が体調を崩した時の事がキツカケだった。

少しだけ家事を手伝わせてもらえるようになっていたとはいえ、慣れない（なんと俺が生まれてから初病気、母も俺もタフなのだ）看病（といっても飲み物を運んだり、濡れタオルを用意するくらいしかできなかったが）に自分で思っていた以上に疲れていたらしく、気づけば母が寝入った事も確認せずに、ポロリと心の内を漏らしていた。

——私なんて、生まれなければよかったのに。

俺がいなければ、あなたが悪魔の母親などと陰口を叩かれることはなかった。

——私を、捨てればよかったのに。

俺を手放していれば、あなたが無理を重ねることなんてなかったのに。

——私が、異常じゃなければよかったのに。

普通の子供だったら、私が異常《私》でなかったら、何の問題もなかったのに。

——私は……私が——

そつだ、なにより——

——生まれてきて、ごめんなさい。

パシン、という乾いた音が響いた。

頬の内側からジワジワと染み出してくる鈍い痛みと不自然な熱、視界の向きを強引に変えた衝撃、それら一連の情報を数秒の時間をかけて処理した俺は、そこでようやく頬を打たれたことに気づいた。

初めて受ける（……………）怒気を感じ、恐る恐ると視界を正面へ……………寝ていると思い込んでいた（……………）母へと向けた。

母は泣いていた。

生まれて初めて、母の涙を見た。

どんな事があっても微笑みを崩すことなく、サラリと対処してしまふような人だったから、泣く姿なんて想像すらしていなかった。

「——『生まれてこなければよかった』——『捨てられればよかった』——『自分でなければよかった』——『生まれてきてごめんなさい（……………）』……………シャル、私があなたをどれほど大切に思ってるか、伝わってない？ 私がどれだけあなたを愛しているか、わからない？ なんで、そんな事を言うの？ 誰が何と言おうと、私の愛娘はあなただけ。他の誰でもない、今ここにいるシャルロットだけなの」

優しい言葉、優しい瞳。言葉を重ねる内に怒気は鳴りを潜め、ただ慈しむような、言い聞かせるような優しさに取って代わっていった。そんな優しい人だから、俺は……………。

「でも、私は……私が居るせいでママにたくさん苦勞を」

母は俺が言葉を終えるのを待たず、はぁ、と溜め息を吐き、抱きしめた。

「子供は親を苦勞させるものよ。………それなのに、シャルは私に苦勞させてくれないじゃない。我が儘もおねだりも言わないし、甘えてすら来ない。それどころか、私を助けようと頑張る始末………シャルほど手の掛からない子供なんていないわよ？　むしろ、もっと私に甘えなさい」

優しい言葉に揺れる、自分の心が嫌だった。

「私は、ママの重荷になりたくないよ………」

優しさに甘えて、その結果母が不幸になってしまったら。

「重荷なんかじゃないわ。こうしてあなたと一緒にいる事が、私の幸せなのよ」

そう言ってくれるのは、本当に嬉しかった。

「でも………」

俺は――。

「ごめんなさい、シャル。辛い思いをさせたわね」

ポツリと、懺悔するような呟きが俺の言葉を遮った。

「自分が他とは違うことを、ずっと悩んでたのよね。ごめんね、気づいてあげられなくて。多分、私も心のどこかで、シャルのことを特別な子だと思っていたと思う。手が掛からない子、賢い子、強い子。勝手にそう思って、あなたに構ってあげようとしなかった」

「ママ……？」

「今まで本当にごめんなさい。だから、もうあんな事は言わないで指で頬を拭われた時になってようやく、自分が泣いているのに気づいた。」

「そんな風に思い詰めないで。例え他のなにが変わっても、私があなたを——シャルロットを愛しているという事実だけは変わらないわ」

カチリと、何かが外れるような音が俺の中に響いた。

「……んっ！」

頬を流れる涙も拭わず頷くと、力強く抱き締められた。

「シャル………」

母も泣いていた。

ただただ、二人で泣いていた。

その日、私の涙をキツカケに『俺』は目覚めた。この人《母》を

守ろうという決意と共に。

といっても、別に劇的な変化があったわけではない。少なくとも、外から見ると分には。

『俺』が目覚めたと言っても、前世を思い出したわけではない。
『俺』自身についての情報がほとんどないのは相変わらずだ。

対して変化は二つ。

一つは『俺』という人格が現れたこと………と言うよりは、表れたと言った方がいい。俺に根付いていた『知識』と『思考』の持ち主、日本で十数年を生きた青年（なのだろうか？）としての『俺』が目覚めたのだ。シャルロットの一部として（……………）。

そもそも、シャルロットという少女の人格は眠っていた『俺』を含めてのものだ。そういう意識がなかっただけで、『私』は『俺』であり、『俺』は『私』である。さながら喪失していた記憶を取り戻したかのように、『俺』という自分に気付いた、と言えばわかりやすいだろうか？

『俺』はおそらく、データ消去が不完全だったメモリーカードのようなものなのだろう。輪廻（のようなもの、多分あるはず）の中で洗い流されるはずだった俺《前世》のデータが、魂という器にこびり付いて私《今世》にまで残った。俺は頑固汚れか。

自覚した当初は、十数年を生きていた『俺』が幼いシャル（以下

略)の中には内部分裂を起こしたり、最悪意識を乗っ取ってしまったりはしないかと懸念していたが、幸いどこぞのテンプレ転生モノよろしくな事態には陥ることはなかった。

とはいえ、不安定になるのは避けられそうになかったので、意識的に『俺』を前面に出すようにしている。『俺』本人指導の元、『俺』を演じているようなものだ。所々で一人称が異なるのはそのためだ。とはいえ『俺』が起きている間『私』は寝ているとか、精神世界の中で『俺』と『私』が対話できる、みたいな素敵テンプレ設定はないし……我ながら謎だ。

私の^{シャル}性格自体は原作と変わらない(……………)んだがな。

そう、もう一つの変化これだ。

IS インフィニット・ストラトス というライトノベルの知識を『俺』が持っていたのだ。…………これだけだったらオリ主のようだが、他にも大量のライトノベルや漫画の知識が湧き出てくる所を見るに、俺《前世》はただのオタクだったようだ。残念。

こほん。

とまあそんなわけで、『フランス生まれのシャルロットだからこは小説の世界だ!』などと思うはずもなく、テンプレ転生していたなんて微塵も考えていなかった。俺にとって、母との二人暮らしは紛れもないリアルだったしな。

だからこそ、俺はあの日を忘れない。

『白騎士事件』が起こった日を。

そう、僕《私と俺》が、母さんを守ると決めた日を。

ハイ、回想終了。

どこぞの一人称小説の主人公よろしく、語り部を気取って現実逃避してみたが……どうしよう？

「いや、いつまで男装してるんだ？ お前」

いきなりゲームオーバーの予感がするんだけど。

二十五話 「僕へ私と俺」が、母さんを守る」 シャルロット（後書き）

通りすがり1です。

いきなりですが、次回の更新も遅くなるかと思います。これからどんどん忙しくなっていくので、どうしても時間がかかってしまいます。どうにか月一は維持したいところですが、難しいかと思われます。

さて、今話ですが…… シャルロットについてはもう何も言いません。受け入れます。

それはさておき…… すいません、今回完全に説明回ですね、時間全然進行してないし…… とはいえ、ここさえ書いてしまえば後は楽になるので進むだけです。ここが一番詰まっていたんですよ！

それはそうと、第一次のメインキャラもだいたい集まったので、皆さんがそろそろ忘れてそうなアンケート番外『コスプレ』編がやれそうですが…… 本編優先ですかね？ さり気を書きたかった設定は完全にスルーされたのが悲しいです。

いつも感想を下さるこうりさん、Yuuさん、本当にありがとうございました。時間はかかりましたが、なんとか更新できました。

更新する度に書き込んでくださるこうりさん、R18版にまで足を運んでくださって、ありがとうございます。

更新が止まっても書き込んでくださるYuuさん、実はこっそりペースメーカーに使わせてもらっています。だいたい週一の割

合で書き込んでくださるので、「お、もうそろそろ更新しなきゃな」と一種のシグナルにもなっています。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9320t/>

残念なIS

2011年11月14日21時51分発行